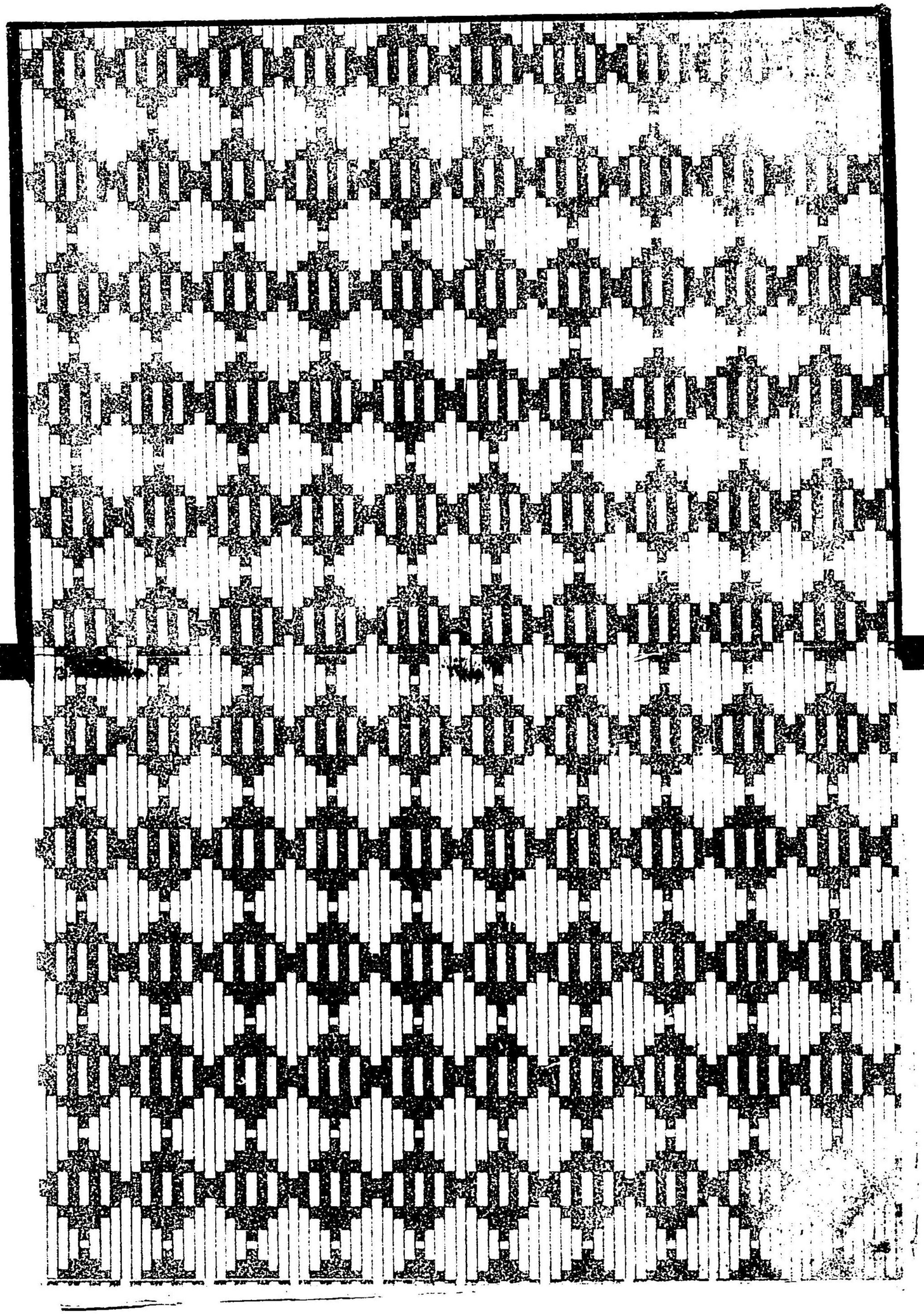
柏珍文庫

第廿一編

釋迦八相倭文庫

壹編



特63
844

万亭應賀氏

釋迦八相倭文庫一編

明治
44. 3. 15

袖珍文庫發刊の主旨

明治の文明は漸く膚淺の境を脱せんとして居る。米を食ひ肉を食へば生きて居られると云陋劣な時代は去つて、書を以て靈を養はれば生きて居れぬと云向上の時代に入つた。明治の文明が眞に輝くのはこれからである。

現下の讀書界は一方に泰西の奔放なる新思想を味ふと共に一方に自國の過去に於ける産物を新しき眼を以て親ひつゝある。この後者の要求に應じてこゝ數年來盛んに古書の飜刻が起つた。説すべくはあるが、その飜刻書はいづれも大册で裝釘も立派である爲に高價であり、且つ大抵は豫約出版法を取るが爲に購讀が手輕く出來ぬのが缺陷である。

泰西にはカッセル、レクラム等云書肆があつて、どんな名著でも極めて簡素な小册子にして極めて廉價に販賣する。屋根裏に住む貧書生でも自由にこれを

購讀し、紳士も携帶に便なるを喜んで旅行でもする際は必ずこれを袖にする。

弊院が袖珍文庫を發刊するのは日本のカッセルとして立つたのである。古典と云はず輕文學といはず、雅といはず俗といはず、韻文といはず散文といはず過去の日本が產出したる文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず漢籍中必讀のものをも選み、必ずしも文藝を範圍とせず經世修養其他の書をも選み、いづれも二十五錢均一の袖珍本に裝釘して、弘く讀書界に提供し、以て現下の缺陷を補はむとするのである。その假名漢字の鹽梅等に留意して現代の讀者諸彦に便した事、校訂を最嚴密にした事などはこの文庫の特色と自信する。

明治四十三年六月

三敎書院主識

解題

釋迦八相倭文庫は万亭應賀の著した草双紙で、繪は初めの方は三代目豐國、廿四編以後は二代目國貞の筆である。總て五十七卷ある。弘化二年から慶應四年までに順次發行したものである。釋尊の傳を日本風に和らめて婦女子の情のうつるやうに色を着けたのである。固有名詞だけは本名を使つてるが、言行は思切つて日本化してある。だから不自然な事ばかりであるが、文の妙なる、それを忘れしめて、却て其の爲に獨特の味を生ぜしめて居る。寔に類の稀なる宗教小說である。懸け詞などを使つたところも脈味に陷つて居らぬ。この草双紙は非常に歡迎されて、芝居にも屢演ぜられた。應賀の著てはこれが一等有名で

あつて、この外福德天長大黑柱、神代藻鹽草、日逮記旭衣、磁石山浮世精寶、忠義教誡赤松譚、葛葉九重錦、御所奉公東日記、教訓武藏鐙等がある。

釋迦八相倭文庫

初編叙

大集經未來記に曰ふ如く、白法隱沒と說かれしこそ、今此の時に合はせ見るに、不思議なる哉其意不違、四民の心顚倒して、武家が番太に番太が二本、亭主を嫌ふ女房あり、予も十八歲にして戲作に志せど、元より師匠を取る事をせず、書は一點も讀むことを得ず、ほんの猿智惠方便は、四十餘年の元祖もあれば、爰に釋迦八相の物語を、机に控へ

て是を著はす。

天保十六年
乙巳の孟陽

二十五歳の戯作
二十番の内

万亭應賀述

釋迦八相倭文庫初編

江戸 万亭應賀著

夫れ五天竺の其の一つ、中天竺摩迦陀國の都、迦毘羅城の開闢、大賢王より三十六世の帝、師子頰王と申し奉るに、王子四人あり。第一か淨飯太子、第二か甘露飯太子、第三を白飯太子、第四を斛飯太子と申しつゝ、何れも勝れし皇子達なり。然れば治まれる當御代を、第一の王子、淨飯太子に讓らんと頰王衣服を更めて、大極殿に出御あり。四人の王子、月卿雲客、並居る中に飾りつけし、七流の御寶と申すは、第一に月氏國の御系圖、第二に四神龍道の御多羅枝、神力の御ちやうづ、鬼神の恐れし弓矢、第三に白蓮劍、第四に闇冥如意の玉、第五蓬萊宮より供へたる玉の冠、第六に不淨を被ふ玉の旗、第七に五

善覚大臣の嫡娘
摩耶夫人
中天竺迦毘羅城
三十七代
浄飯大王

善覚大臣の姫娘
橋曇弥

天竺の内、山海道陸野道、三十餘州の國の給國、右の七寶は、代々傳はる重寶なれば、淨飯太子に更め相傳するなりと、玉座に直して、即ち位を讓り給ひ、三人の王子へは、東西南北の國を分けて賜はり、百官の者へもそれ〴〵に、官を增し、祿を付け、尙も國民の政道末世までも怠らず、豐かに此の國を守るべしと、御言葉正しく宣ひて、軈て奥へぞ入らせ給ふ。月卿雲客口を揃へ、皆萬歲と唱へつゝ、實に難有き綸言かなと、悅びの袖を連れて、打揃うてぞ退きける。去程に淨飯大王は、萬乘の位に上り、政事正しく仁心厚かりければ、皆々世に難有帝なりと、仰ぎ尊み奉りける。斯くて或時大王一間に籠り政道の文書を復し居給ふ處へ、重役高明大臣進み出て「只今御前へ罷り出で、申上げるは餘の義にあらず、君政事を知ろしめすに、古きを捨てゝ新らしきを研くを一つの孝と仰せありし如く、芳苑十里に路造り、新内裏を造り殿へ奉れば、則ち吉辰を選み、御移轉あれかし。又一つの願ひには、男子の傅きは、今宮

中に滿つれども、官女后の傅きは、只の一人さへ之無く、夜のお殿間の寂しきは扨置き、御代を嗣がせ給ふ王子か設けん賴りさへ無きまゝ、何とぞ隨身の輩の内にて、容貌優しき娘を、官女后に供へ奉りて、政道正しき君の御胤を、千代萬代までも、遺し參らせ度く存上る」と、謹んで申しければ、帝御機嫌麗はしく、「實に尤もの事かな。兎も斯うも宜きに計らへかし」と、仰せを被り高明大臣なほ平伏して、「然らば先づ奥殿をも造營して、御移轉を急ぎ、叡慮を休め奉らん」と、悅び退きて速にそれ〴〵の役人へ、綸言の趣きを傳へ、奥殿の御普請も成就しければ、程なく吉辰の日を選み、既に其日となりければ、百官の輩に、二十歲を越さぬ娘あらば、帝へ奉るべき由、兼ての綸言に任せ、今日行幸の街に出で、今を盛りの多くの娘、今日を曠と姿を飾り、互ひに花の色香を爭ひ、帝の御通りを待ちかけて、今を遲しと並み居たる。折から淨飯大王華やかに、連錢葦毛の駒に跨がり、手綱凛々しくりん〴〵と搔繰り、供奉の面々

も勇ましく、御馬の左右に從ひ、間もなく此方へ來り給へば、高明大臣地上に跪き、「是に並み居まするは、我君へ隨身の面々が娘なり、叡慮に適ひたるを奥殿へ召入れ給へ」と申上ぐれば、帝則ち御言葉優しく、彼等にも會釋し給ひ、勝つて三百人宮女に召抱へられ、直さま迦毘羅城へと、駒の足を運ばせ給ふ。

此時高明大臣、街に並み居たる數多の婦人を見渡せし中に、世に類ひなき美人、善覺大臣の娘兩人見えず。如何の事と不審ながら、帝に供奉し、彼等が穿義に、それ〴〵の者を招きて、樣子をぞ糺させける。爰に又善乘國の將軍、善覺大臣に、三五二十歳の娘二人あり。姉を輕盡彌、妹を醒耶と云ひて、何れも劣らぬ容色にて、此の二人の者に勝りし美人は、世に少なしとぞ聞えける。されば此の二人の娘互ひに淨飯王の志優しき嘸に、何とぞ一度なりと御姿を拜せんと思ふ折から、宮女后を數多召抱へらるゝと云ふ、其の沙汰を聞くよりも、何とぞお目通りせんと樂しみしに、親善覺は、假令帝の仰せなりとも、斯く淺ま

しき育ちがらにて、君の傅きは思ひも寄らぬ事、只二人とも我々づれに、善き緣あらば傅けんと、君の御移轉の巷へも出だされば、二人とも懊惱と心に物思ひ積る處へ、博齋道二ケ國を領する、淨飯大王の四番目の弟、一斛飯太子は、甚く婦人が好み、善覺の娘、殊に麗はしと傳へ聞き、何とぞ手に入れんと媒介を以て言ひ渡れど、二人の女の心に嫌はれ、自ら只一人、忍びて善乘國へ來たり、善覺に面談し、種々とわり口說き望めども、善覺不平の顏色にて申すやう、「偖か我子なりとも妹背の緣は、一筋に親の意にも任せ難し、是を無理に言ひ聞かせなば、是非なく親の心に從ひ、否々ながらも妹背の緣は結ぶとも、元より心に染まぬ時は、女の身の果敢なきを悔み、遂に縊れて身を果たすか、水に沈むか二つに一つ、無分別起せるは、世間に間々ある慣ひ、何とぞ此の譯柄を汲み分けて、必ず機嫌を損せぬやうに、思ひ切つて給はれ」とものしとやかに答ふれば、斛飯色を變へ、「愈々以て身が望みの叶はぬ上は口數利かず、オヽ

それよ」と肝立引上げ、奥の一間を指して走り入り、何心なく居たる二人の娘を、捉へんとするに慌さ、「コハ何事」と慌てゝ逃ぐる。妹の袖耶が襟髪引掴み、引寄せんとするを見るよりも、姉の輪蛮彌突立ち上り、手早く要意の懐剣を、抜きそばめつゝ立ち寛り、「無禮しやると許さぬ」と、競り合ふ裏へ迦毘維城の淨飯大王の勅使なりと、呼ぶ聲斛飯の耳に入り、「ヤレ仕損じたり、殘念や」と、娘を放ち、慌てゝ背戸口より逃げ出てたり。後には様子白髪の善覺、勅使の出迎ひ叮嚀に、一間へ招じ敬へば、のさ〳〵通る初大臣、四下辺りを睨め廻し、「勅諚の趣き餘の儀でなし、此度淨飯大王へ、百官の翼、官女后が奉るによつて、御移轉の商都の街へ、姉妹の娘を差出だせと仰せありしに、何を以て帝の仰せを背き、不參ありしぞ」と目に角立てゝ、權柄に言ひ聞かすれば、善覺は平伏の頭を少し上げ、「中々君の仰せを背く心ならねど、御存じの如く小國の某が娘ども、如何にも曖しき育ちにて、帝の御傳には畏れありと存じてお召

に從はず、是非にとあらばそれこそは、冥加に適ひし身の面目、如何とも御計らひ下さるべし」と相述ぶれば、初大臣打首肯き、「如何にも心優しき大臣かな、斯林に美しき姫が持ちながら、誇らぬ心底感じ入りたり。則ち是は證札なり」と、渡せば善覺二人の娘に、是を戴かせ讀ませけるに、両人の内、叡慮に適ひし方を留め、一人は何れとも、御返しあるとの仰せ、然らば我早下の心に任せずとて、善覺乃ち人を選み、姉の輪蛮彌へは馬將軍をつけ、妹蹙耶へは優將軍が付けて參内させんと、兩人の將軍を呼び出だし、心をつけて守護すべしと、それ〴〵の手當をなさしめ、參内の用意をぞ急がせける。実程姉妹は、日頃の願ひ届きてや、お后に召さるゝと云へど、何れが叡慮に適ふやらと、心の内の物案に、紅粉化粧に氣を付けつ、互ひに髪を結び合ひ、それ〴〵の腰元が從へ、華やかなる衣服が着飾り、心も空に飛立つ計りなれど、流れ涙の暇乞ひに、涙限りなく見送ければ、同じ心の善覺大臣、氣が取直し、「願うても成ら

ぬ身の出世、親も大慶に存ずる、早や〳〵參内致すべし」と、涙隱して勸めける。

去程に初大臣は、彼の兩人の姫を召具し、迦毘羅城へ歸り登りて。先づ善覺大臣の志、斯樣々々と奏聞せしに、帝山々しく思召され、傾めて政道も正しかるべき間、則ち小國の王に附せしめんとて、聽て善覺王と綸旨を賜はり、四節の禮儀參内を許されける。是と申すも善覺が、斯く美しき娘を持ちながら、些つとも已れを驕らず、卑下する志厚き故なりと、皆々齊しく感じける。扨て姉の蟠蟲彌は、月の方と名づけて、月宮殿へ移し、妹摩耶をば花の方と名づけて、青龍城に据ゑ、互ひに劣らぬ月花の、粧ひを爭ひつゝ、君に傅き奉りぬ。然るに碧き上つ方より、卑しき賤の女に至るまで、嫉妬の心は愼み難く、世に恐るべき者にぞありける。されば淨飯大王は、彼の兩人の女を留めて、后には供へたれども、分けて妹の花の方摩耶夫人、御心に適ひけるにや、此の方へのみ近づき臥し給ふを、姉なる月の方蟠蟲彌、獨り寢の閨寂しきまゝ、嫉み心の

一途に傾り、アラ恨めしや一人の君へ、姉妹にて見ゆるとは、例少なき事なるに、そもや初めの仰せには、叡慮に適ひし方を留め、一人は御返しあるとの事、それに違ひて二人とも、留めて妾は此のやうに、獨り寢さすとは聞えませぬ。情なの御計らひ、もはや摩耶とは緣を切り、他人となりて言葉も交はさじと、恨み嘲つ其一念、假寢の夢にも青き蛇となり、鱗を逆立てゝ青龍城の夜の床へと飛び行く有樣、附隨の女中ども、稀には是を見たるもありて、コハ不思議なるよ事やと、殊に怪しみ恐れけろ。扨又花の方摩耶夫人は、君の心に能く適ひて、夜毎々々に御通ひ繁く、姉の方へは一夜さも、訪れなきが姉上は、定めて恨み嘲ちて在さんと、心には察すれども、我思ひも亦止み難く、信實深く見えければ、君も一方ならず思召して、此の方へのみ通はせ給ふ。然るに春も半ばの頃、或夜さ青龍城の玉の床に、美を盡せし夜のものなぞ敬々の、枕に熟睡む摩耶の夢に、虛空に妙なる音樂聞え、紫の雲靉靆き其上に、十六丈の寶塔聳え、

金色の旗八流れ、七寶・寶樹八本、花房の香妙なる上に、諸々の佛合掌して、經文を唱へければ、寶塔の扉さつと開け、大日輪の内にありて、光明赫奕と輝き、「我れ成道か得て現在到來して諸佛智に緣を結ぶ」と、文を唱へ給へば、白象御壁あらたかに、「如何に夫人、御身に世間花、載きて來る、其上へ載き、佛御壁あらたかに、「如何に夫人、御身に結緣深ければ、今淨飯大王を父と賴み、夫人を我母と賴みて、衆生濟度の爲め顯生する故、暫く胎内を貸し給へ」と朗かに仰せあり。摩耶は思はず起返り、「アヲ勿體なやおほけなや、五障三從の穢れある、此身の胎内へ御佛を宿さん事は思ひも寄らず、免し給へ」と身を背向くれば、佛重ねて宣はく、「さは宣ひそ、既に摩耶の前生は、東上國の南に當つて、緊那羅城と云へるあり。此の都の主偶、法裟王の最愛の姫に、瑠璃女と云へるは、幼なき時母に遲くれ、育陀夫人と云ふ繼母に育てられしが、此の繼母にこうや女と云ふ姫一人あり、容貌美しゝと雖も、瑠璃女には及び難く、されば瑠璃女、東陽國の帝に傳を、繼母

の妬みにて樣々に讒言し、偽り奏聞すれば、法裟王は眞と思ひ、都の北に切陀羅山と云ふ嶮岨の山へ室を造り、罪なき瑠璃女を只一人捨てさせ、育陀夫人の娘、こうや女を其の代りとして、東陽國の帝へ傳かせける。されば瑠璃女は實母の遺品とて、淨光菩薩の說かれたる、解脫結品經を信じ、千部寫して一萬部讀誦し、七種の木の實を取りて、三燈を揭げ、日月燈明佛を供養せし。其の因みに依つて、今既に摩耶夫人と生れ、淨飯大王と枕を交はし給ふなり。以前の燈明佛は即ち某なり。是非に胎内を貸し給へ」とあるを、摩耶は只管陀びて、合はする手より、忽然と蓮華開けば、佛是に移り、經文を唱へながら、三五の乳房を掻分けて、幻の如く摩耶夫人の、胎内へぞ入り給ふと、見しより愕き夢覺めて、見れば不思議や我ながら、五體六根淸らかに、玉を抱きし心地して、自ら其身より、金色の光明輝き、忽ち六通を現じ、虛空にて、「諸佛淸淨して守護す」と聞え、春風も身に吹き過ぐるか、花の御粧ひ次第に衰へ、朝夕の供御

も通まず、病ひの床を暫しも離れ給はれば、帝附隨の女萬に樣子を聞き、是より聞へも通ひ給はず、密に優陀夷夫婦を召し、「此程夫人は風の心地なるや、只打臥して惱み强く、花の宴にも怠りて出でず、夜の通ひも絶えたるが、そもあの夫人は世に勝れて情深く、殊に内氣の心遣ひより、氣病みならんかも知れ難し。萬事望みの儘に勸はり、少しも早く平癒させ、身が心をも安からしめよ」と、仰せを蒙り優陀夷夫婦、其次第を逐一に、摩耶夫人に告げ申せば、「身に受けて難有き思召し、飽くまで厚き御情の程、生々世々忘れ難く、少しも早く全快して、戀しき君に見えんと、一途に思ひ奉る甲斐もなう、只抄取らぬ身の煩ひ、今の仰せを聞きしより、いとゞ心が急かるゝ」と、涙含みつゝ物語れば、優陀夷の女房謹んで申すやう、「兼々醫師の申すにも、兎角病ひは各自の、氣より強るものと承はる。されど貴女樣も畏れながら、只お氣晴らしが肝要かと、及ばずながら存じまする。幸ひ今宵は春雨の、戀氣が拂ふ其爲に、酒の用意を調はせ

お座敷を更へて皆々を召寄せ、お賑かに致したら、些っとはお慰みにもなり、此程の御鬱氣も晴れませう」と、勸め申せば摩耶夫人、「それは能くこそ心づきたれ、今宵は何やらいつもより、一入氣も鬱々しき儘、早う宜しなに計らや」と、仰せに從ひ優陀夷の女房、お局お側お次を始め、お茶の間お仲居お婢まで、お免しあつて召出だされ、用意の九獻餐の物、所ろ狹きまで置き並べ、軈て夫人の御座をも移し、琴や三味線笛太鼓の、調子を揃へ囃して、夫人の心を誘め、皆諸共に興じける。扨多き女中の其中に、伴御の役を勤むる女は、元はやんごとなき大臣の娘なるが、親の許さぬ忍び男を持ち、遂に親の勘氣を受け、果敢なき身の暮しも致せし身なれば、下つ方の世帶の事などは勿論、女一通りの病、月のめぐり滯りの事などまで、能く心得し者なれば、數多の女中に厚遇され女の役にありしが、此夜始めて摩耶夫人の御前に召出だされ、酒など給はり、それこれ爲す内、夫人の御顏容を、遠目ながらに拜して言ふやう、「お畏れながら

御夫人様の御惱みは、如何にも芽出たき王子の胤を、宿し給ひし御景色なり」と、長ろ〳〵申しければ、皆々大きに打愕き、「扨は眞か、芽出度や」と、悅ぶ中にも摩耶夫人、思ひ合はする此程の鏡夢に違はぬ言葉の端、「アラ難有や」と思はずも、仰する御言葉聞くよりも、多くの女中そやし立て、「扨は相違もあらじ」とて、取々悅び帝へも、優陀夷を以て奏聞すれば、帝の御悅び限りなく、月卿雲客下々まで、是ぞ御子孫長久の基と、崇つて皆々祝しける。されば此噂、月景殿の轎奏彌へ聞え、親善覺王より附人、馬將軍を召し、「如何に將軍聞きつるか、妹摩耶は逸早く、王子を懷胎せしとの事、只でさへ我力へは、君の御通ひも無き處へ、早くも左樣になる時は、尙以て摩耶のみへ、君は情をかけ給ひ人も彼のみ敬ひて、中宮女御と崇めつゝ、威勢は日々に增すべきに、それに引易へ情なきは、在るに甲斐なき此身の上、果敢ない命存らへて、數多の者に指さゝれ、顏見らるゝも恥かしき儘、今宵の內に仇し世を、離れる覺悟極めし故、

和郎密かに心得て、頓死せしと世間に披露し、妾が死骸を隱してたも」と、搔說つし伏沈む。遣瀨涙も女氣の果敢なき思案ぞ道理なる。馬將軍は打愕き、「それは餘りに短慮なり、思ひ敢なくお成りなされずとも、御無念晴らす仕方もあり、先づ〳〵心を靜め給ひ、暫くお待ち成されませ」と宥められて力を得、「さらば和郎に任する間、兎も角もして遣瀨なう、悔しき一念を晴らしてたべ」と、わりなき言葉に馬將軍、聲を密めて云ひけるやう、「それにてこそ宜さ事あれ、此の都より丑寅に當つて、宿陀山と云ふ高嶺あり、此所に阿閦山人の跡を次ぎ、術を行ふ、儀伯仙、無間仙といふあり、此の二人の行者の法には、飛ぶ鳥も落つる奇特あり、これへ賴ひて妙術を行はしめば、貴女さまの御胸の晴れる仕方もあらん、此義如何にゝ勸むれば、轎奏彌大きに悅び、「少しも早く計らへかし」と、言ふに膀左心得て、聽て一人の官人を、使ひに立てゝ招ぎければ、程なく行者兩人來りて、馬將軍に面談し、委細の譯を密かに聞きて、事もなげに答ふるや

う、「仰せの趣き何より易し。併しながら伏の法には、七段の次第あり。先づ懐胎の調伏には、其當人の姿容を、能く見定めねば行ふ事能はず」と、述ぶる彼方に轎輿彌々人、忍びて窺ひ立聽せしが、御簾を掻き上げ立出て、「それは何より易き事なり、自らが文認め、呼ばゞ驛耶は必ず來らん、其時襖の陰より直ちに硯引寄せて、鈍くもやをら摺る墨の、黑き心の怖ろしや、嫉みの一念消して、兩人ともに其姿を、能く見られよと言含め、此方の一間に忍ばせ置き、えん瀬なく、心の内か卷紙に、情夏毛の筆染めて、書くとも讀むとも戀しさは、盡きぬ思ひと細々に、存じ參らせ候ひと、書き認めて文函の紐に結びも唐花の、實の無き節に引縮めて、上包みして物馴れたる、側女中に言付けて、青龍殿へぞ遣はしける。去程に驛耶夫人は、思ひ懸なく姉君より、玉章を受け、押披き見れば「一筆しめしたり〳〵、此程は絶えて音信れ無き儘、如何と姉も心配せしに、承はればそもじには、帝の御胤を宿せしとや、偏に國の爲代の聞え、姉

の身に取りても如何ばかりか、悦ばしく存じたり〳〵、さりながら女の身の、一大事は難產なれば、是か案じて夜の目も寢られず、戀しく床しく思ひ暮らせば、常の儘にて苦しからず、今日は此方へ渡り給へ、俱に睦ましく故郷の越方など語らひ參らせん、先づは其罪と、早々筆を止め候ひし」と讀終り、驚て優陀夷夫婦を召して、「これ見給へや、他人にならぬ姉妹の親切、片時も早く趣き度し此由我君へ申してたべ」と、仰せに任せて優陀夷は心得、速かに御前に出て、右の事ども奏聞すれば、帝は快よげに仰するやう、「女子の親身さもありなん、驛耶が心任せにせよ」とあるにより、遽に御支度を調へ參らせ、局腰元多く從へ、いそ〳〵と使ひと俱に驛耶夫人、月景殿へ渡らせ給ふ。身は薄き氷か双の上を、渡るより尙危しと、知らぬが佛と云ふ事は、此時よりや云ひ初めけん月景殿には轎輿彌、今や遲しと待侘び給ふ處へ、姉君は云ふに及ばず、女中將軍等へも、下さる土產を待たせつゝ、驛耶夫人來り給ひ、玉章の厚き情か、繰

返し〳〵、悦び告げて敬ひ給へば、姉は又内の思を、面の色には顯はさず、「ヤレ懐かしや、能くこそ來り給ひつれ、イザ先づ酒を參らせん」と、老實々々しげに持囃し、「如何にも芽出度き御身の程ぞ、第一には帝の御悦び、親御の名聞此の姉までが何の樣にか、嬉しさ餘りて涙が」と、目顔に蔽ふ袖の内は、人知らず齒を切ひしばる、彼方の襖の陰よりは、儀伯仙、無間仙、俱に醜耶の髪容へ目を配りつゝ容體を窺ひ居るこそ怖ろしけれ。既に巡れる盃も、數積もれば轎曳彌は、醜耶に向ひて老實やかに、「語りて盡きぬ二人が越方、今暫しと盲ひたけれど、春の夜の短き儘、君のお伽も如何かと、案じるも和女の爲め、又も迎へん今宵は先づ」と、早や追ひ立つるを心に呆れ、アラ情なや久々の、積る語らひも霎時の間、最うお暇申す事かと、姉とは變りし醜耶夫人、涙含みし御粧ひ、名殘惜げに悄々と、青龍城へぞ歸り給ふ。

扨此の物語猶長ければ、一先づ此所にて筆を止め、此後二編三編に、醜迦誕生より種々不思議あるを、面白く書き綴り、引續き出版仕候間、御求め御覽可被下候。めでたし〳〵。

釋迦八相倭文庫

貳編之序

抑も中天竺迦毘羅城、三十七代淨飯大王の后摩耶夫人王子懷胎ありしより、姉の轎曇彌嫉妬深く、一念十六丈の蛇形となり、あなたを怨み、身を悲みて、內縛外縛業縛の無明の法の調伏に、三百六十餘流の血筋を搦め、假令衝突く鎗梅ありとも、倒に花は散らず、胎は鶯含法華經の、玉を延べたる佛童子が、神力自在の奇特ある、一代修行に基

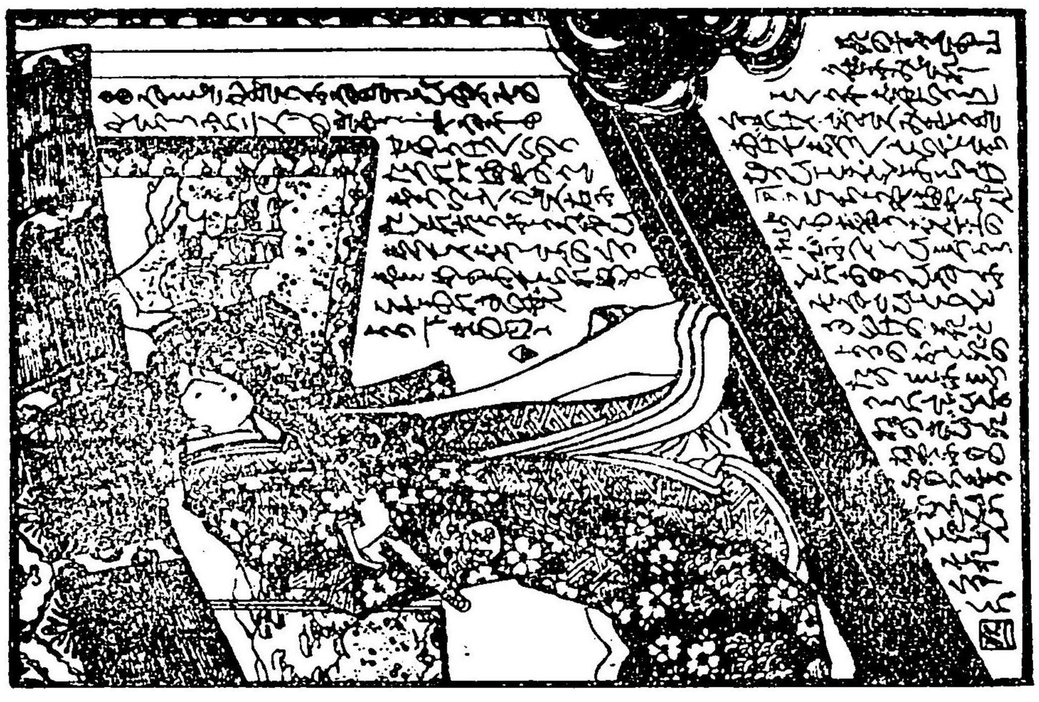
けど、戯作の筆のあやしきまゝ、直に倭文庫と題ること爾り。

弘化三年丙午春新版

万亭應賀識

釋迦八相倭文庫貳編

然れば痛はしや摩耶夫人は、何心なく青龍城へ歸らせ給へば二人の行者は、間を立出て、今見届けたる姿の如くに、摩耶の容を作らんと、米の米を取寄せつゝ、月の水を迎へ取りて、七度洗ひて粉に碎き、是にて夫人の顔を作り、米の藁を以て體を拵へ、五形の串にて此所彼所を繼ぎ合せ、五色の衣を纏はせて、腰には花の帶を締め、三つ羽の征矢を差させて、丈の髭をかけ、頭に四手を切り付けて、地の下七尺の底に埋めつゝ、上には調伏の壇を飾りて、四方には注連を張り、供物には米・飯を黑く染め、百八十本の釘を刺し、四隅に幣帛を立て、華髮に木瓜の花、射水に白蛇の水を滴れ、蝶螺の脂を以て燈明を照らし、虎狼の骨を以て燒香に燒き、檗木に三尺の片刃の劒を立て、朴木にしたら修丹の備へ、生絹の袖を逆さまに縫ひつけ、麻を取寄せ、裏掻かぬ草履を並べ、行



者は左り繩にて葬髪を結び、禮に掛けて調伏の壇に、立向ふたる有様は、身の毛も弭立つ計りなり。去程に僧伽仙人、用意の幣帛押取りて、天神地神あらゆる惡鬼神を、二人の念力に任せて、祈り立て責めかくれば、殿中遽かに震動し、不思議や百八十本の幣帛一つに亂れ懸れば、無間仙人大音あげ、「如何にや如何に摩耶夫人、無間長夜の狹からん、出てよ〳〵」と呼はれば、又も鳴動盛んにして地の下へ埋けし摩耶の形代現はれ出で、供へたる衣を打掛けて、裏掻かぬ草履か踏み、壇の上へ上りつゝ、傍の御簾の内へ向ひて、「アラ情なや姉上、自らが王子か懷胎せしも、不義密通の心から女を辱かしむる邪曲なられば、偏へに許して給はれ、のう怖ろしや、アラ苦しや、何ぞ許して〳〵」と、熱鐵地獄の苦みを、受くるも辱弱き姫御前の、身を打臥して涙限りに泣き詫び給ふ。其傍らには二人の行者、猶も責めかけ〳〵祈り立つれば、摩耶ゝ形代彌よ悶え、右に倒れ、左によろぼひ、七顚八倒の苦み、目も當てられぬ折こそあれ、最前

より一間の内に、始終を窺ふ姉の轎蟲彌、花の姿も山風に、亂れし如く顏貌曠らし、懷劍携へ御簾搔き上げて、徐々と出で立ち向ひ、言葉を荒らげ、「アラ心地よや摩耶夫人、能くも滑飯王の御心に諛ひ、自らをば在る甲斐なしに、和女一人を手活の花と、夜のお伽のみに、自らは只獨り寢の、寂しき閨に物思はする、報いは覿面それ苦しくば、父普曇王を恨むべし、今は親を親とも思はぬ妄、況して其力を妹などゝは、思ひも寄らず緣は切りたり、觀念せよ」と裳を蹴立てゝ、罵りながら行者に向ひ、「ソレ此形代を宜きに計らひくれよかし」と仰せの下に彼の二人は、壇より摩耶の形代を引下し、幣帛を差し、蓆に押包みて、取捨てんと殿中か退き行く。扨て轎蟲彌は調伏の法、成就せしと悅ぶ處へ、馬將軍密やかに進み出で、「如何に姫君、斯くの如く調伏も調へば、摩耶も是から亡き身となれば、今までの御念も晴れ、是非とも帝の御伽は、貴女お一人、然ぞお悅び」と言はれて流石轎蟲彌、嬉しき素振り顯はし兼れ、「此上王子を懷

姫致さば、和郎も格別取立てん。太儀々々。只何事も密やかに、包むやうに附隨の女へも言ひ含めよ」と有りければ、馬將軍拔からぬ顔にて、「それは少しもお氣遣ひ遊ばすな、某宜しく計らふべし。扨て二人の行者へは、當座の褒美に斯樣々々」と、述べて手づから寶藏より、沙金千兩取出だし、蝶花形に押包み、是ぞ白木の臺へ載せ、外に又綾錦千匹づゝ、腰元女中が荷ひ出て、廣間の内へ飾り置き、待つ間程なく二人の行者、形代を遙か隔ちし山へ打捨て、勇み立つて歸りければ、馬將軍厚く待遇し、「當座の布施として則ち是なる品々を下さる。重ねて又も沙汰せん」と、差出だされて行者ども、「思ひ寄らざる結構の品々、難有く頂戴仕る」と頭を下げて一禮述べ、品々携へ立たんとすれども、餘り重くて腰立たず、漸くに二人して、欄干の下へ運び降りたり。然れば又轎彌は、何となく心嬉しく、數多の女中へも常に戯りて物柔らかに言葉を懸け、手道具の類ひそれ〴〵へ遣はし、惡事を深く包ませければ、皆々も此方の姫君

を帝の御意に適はせんと、日頃の願ひも屆きて嬉しさ、此上は少しも早く、王子の御胤を宿し給へと、取囃すさへ物密やかに、私語く處へ一人の腰元慌て走り來り、「喃恐ろしや、只今の行者二人とも、欄干の下にて五體が窘み、少しも歩む事叶はず、手足を悶掻き、然も苦しげに見えまする」と申上ぐれば轎彌、そは何故と立出で給へば、皆々も隨ひ行き、此躰を見て愕く中に轎彌、「アレ〳〵將軍兩人とも、祈りに精盡き草臥れけん、手を取つて介抱せよ」と、仰せを被むり馬將軍、取敢ず下へ降り立ち、二人の手を取り助けんとする折から、遽かに惡風、颶風の如くに吹起り、鳴動すれば、コハ如何に、大地めり〳〵と雷光の如く、四方へ裂けて行者二人は、眞逆樣に金輪際へぞ陷入りける。此の有樣を姫君始め、附隨の女中見るよりも、皆身が顫はせ、扨こそは摩耶を祈りし報いかと、恐れ戰き一同に、奥の方へぞ逃入りける。然れば神ならぬ身とて、佛をも產み給ふ、殊に尊き摩耶夫人、されども知れぬは御身の程にて、

痛はしくも青龍城へ、歸らせ給ひし其日より、祈らるゝとは露知らず、姉君の心ばせを最と頼もしく思召し、又一つには懐胎の、王子を安々産み落し、何うして斯しての嬉しさも、指折り數へ何時か早や、紅葉色めく菊月の、初旬となりければ、帝を始め下々まで、程なく御安産あるべしと、皆々悦び待ちける に、或時夫人轉寢の、夢見よりして病氣起り、遽かに差込み強くして、御苦みと成りければ、優陀夷夫婦附隨の者も、コハ何故と氣を痛め、ソレ醫師よ、お藥よと、噪ぎ取々なりければ、末々までも夫人の病ひ、平癒か祈り、介抱愚かなかりしかば、漸く差込みも治まりて、少しは落付き給ひし故、附隨も氣を休めけろ。其時摩耶夫人は、優陀夷夫婦を御膝近く召寄せられ、最と苦しげなる御聲にて、「のう優陀夷自らが差込みは治まれども、骨の節々痛み強く身内が窘む様に覺え、動く事も叶はねば、起上るべき様もなく、それに又胎内の王子も、早や七月とも成りたれば、最と仂なく働く事の、折々此身に覺ゆれば、心嬉し

く思ひしに、今となりては拔け殼の、様に覺えて胎内に、王子ありとも思はれず、心ならねば此由を、詳しく醫師に尋ねてたも」と、仰せに優陀夷は取敢ず、巧者の御醫師を招き寄せ、御容體を伺はするに、篤と拜脈して申すやう、「一體懐姙の御身には、物のあやかり氣の噪ぎと、申す事は間々ある慣ひ、此度姫君の御煩ひも、それに異る事無ければ、少しもお氣遣ひあるに及ばず、御安産も程あるまじ、只御保養が肝心と、詳らかに述べければ、實に然もあらんと附隨も、種々の御慰みを勧め、病ひも薄らぎ給ひしが、早や十月とも成りけるに、未だ御産の氣も無ければ、附隨よりも摩耶夫人の、心の内の物案じ、過ぎし頃お目見えせし、供御の女を側近く呼べとの仰せありける故、其旨を係りへ通じ御前へ召連れ出てければ、摩耶は膝下近く召寄せ、御身の様子何奚と、包まず隱さず語り給ふも、女同志の心安く、供御の女中も御身を勦り、撫で擦りながらの物語り、「イエ最う姫君様のお案じも、御尤もてはございますれど、決して

懼々思召すな、月越しに胤の孕りましたを、則ち重れ月と申して、下々にもそれは〳〵、太い事ございます故、お氣遣ひなくお心を、清々と遊ばせ」と諫め申せば何時になく、御機嫌も麗はしく、浮世の噂も折からの、暫しお心慰めと附隨諸共打囃しける。扨て百官百司の輩よりも、醜耶の心を慰めんと、皆それ〴〵に思ひつきある品々かぞ獻上しける。斯くて十三月に至れども、王子御誕生の樣子も無ければ、醜耶は頼みの綱も切れ果て、がつくりと氣を落し、再び床に就き給ひ、昼夜の分ちも無く、只泣き悲しむ計りにて、假令病ひ癒るとも、身の懷胎は思ひも寄らず、重き病ひか種々に、持囃されし日惜しさ。君への聞え、姉君の手前、アラ恥かしき此身ぞや、只此儘に死れよかし、生きて甲斐なき我命と、我と我身を死ぬ覺悟、思ひ定めてそれとなく、召使ひの者へそれ〴〵の、遺愛品に遺はさんと、心を當て置き衣服を更め、親御へ一筆委細の事を、書き置かばやと手近かなる、硯引寄せ忍びやかに、墨摺り流す胸の内、堰き來る涙は、雨殿、筆の穂長き命毛も、今は甲斐なく書き盡し、今宵限りと涙を拂ひ

「のう父上、母樣、先立つ不孝はお許しあれ、此の年までの御高恩は、海山なれど懇ひに、果敢なき事を囃されて、國への聞え、親御の面目、生恥晒すも面伏せ、何うぞ自らの亡き後で、必ず嘆いて給はるな、黄泉の障りと成りもやせん、切めて此世のお名殘に、片時なりとお側に居て、永の御慰の十分一でも、養ひ返し度う思へども、思ひがけない身の出世に、一日片時御用も叶かず、臨終の際にお顔も見ず、果てゝ行く身の心の内は、マ、何のやうてあつたろかと、思うてばし下さるな、親に先立つ大膽もの、不孝者よと憎んでたべ、それが切めての罪亡ぼし、返す〴〵もお年の上、朝夕御身を大切に、只姉上を此世の便りと、思して果敢ない自らの、事をば薩張り思ひ切り、亡い後々で倆な事、思出だして懐々と悔んでばし下さるなや、言ひ遺し度い數々は、須彌の山ほどあるなれど、滝なす涙先立ちて、物言はせれば後や前、あら〴〵申遺し候」と書きは書

けども目は眩み、讀むとも盡きぬ胸の内、噫如何なる天魔が魅入りてか、斯かる果敢ない身の最期、思へば〳〵過ぎにし春の、彌生の夜の夢見より、此よな病に取著れて、此身計りか我君の、御心さへに兎や斯うと、痛めし事の勿體なや。今が今生のお名残と、兼て嗜む懐劍を、やなら取り出す覺悟の際、胸一杯に思ひ詰め、岸破と伏して泣き沈み、暫し絶入る心の内、憐れと云ふも愚かなり。

去程に摩耶夫人は、兼ての覺悟も今更に、親を思ひ、君を思ひ、頻りに嘆き沈みしが、不思議なるかな此折から、遂に睡さして思はずも、寐睡むともなく打臥せしが、夢か現か幻の、如くに光明輝さて、三五の乳房を掻分けつゝ、過ぎし頃對面さし、佛現はれ給ひしが、忽ち玉を延べたる如く、三十二相備はりたる御優姿の兒と變じ、臥したる摩耶を劫けに、搖り起し〳〵、御帛爽やかに宣ふやう、「のう久しや、母君、御身苦しみ在す故、此身を恨み給ふは道理な

れども、加何なる冤の魅入りぞと、宣ひしこそ恨みなれ。過ぎし彌生の頃、衆生の願を、普れく滿てん其の爲に、正覺ずる暦なれば、何どかは君の心を破るべき、其疑ひを解かん爲に、仔細を包まず物語らん。必ず他へ洩し給ふな。夫れ一時の瞋恚に、具定公の善根を燒き捨て、又諸々の生を受くるに人と生れ、人と生れて萬づの道理を知り、道理を知りて能く到るを、則ち三つの喜びと云ふぞかし。又世界に十定の捷あり、先づ、身尊くして賤きを捨てず、同じく暗きを捨てず、同じく愚なるを捨てず、同じく惡人を毀はず、同じく貧しきを捨てず、同じく衰ふ者を捨てず、同じく適はざるを捨てず、同じく偽りを捨てず、同じく缺けたるを捨てず、因果因緣を知つて、外を恨むる事勿れ、是十定の捷なり。扨又未だに此暦が、誕生せざる其仔細は、姉君轎盡彌嫉妬深く、御身の懐姙を聞くよりも、過ぎし彌生の頃偽りて、月殿へ迎へ〳〵は、母子を調伏せん爲なり。其邪法には、人間の出世の角を七重に塞ぎ、父母より

分くる、三百六十餘流の血統を大綱にて搦げ、母君も暦の骨々も、碎くる計りなれば、如何で命のあるべきや、さりながら轎蛩彌は、御身と既に姉妹の縁を切りたれば、今はしも七百生の恨みの念、健やかに啼れ渡りて、二人の命恙なし、只不憫なるは奈落へ沈みし、調伏の行者二人なり。是も我、到來作佛の時至らば、引導して助くべし。是等の事必ずしも、疎かにな思ひ給ひそ。佛力自在の我身なれば、今にも産るゝは易けれども、然あらば御身は立處に、中宮女御と敬はれ、轎蛩彌は尚暗きより、暗き邪念の一入起りて、生々世々に迷ひを取らば、暦が功德も甲斐なければ、尚尊體を煩はさん。今告げ奉りし事共は、只此儘に聞捨て給へ。花の對面は是が始めて、又も逢ふ日のあるべきに、夢とは思ひ給ひそ」と、言ひつゝ再び乳房を分けて、胎内へ入り給ふと思へば、忽ち光明輝さて、五體清らかになりしかば、靡耶は愕き夢覺めて、我と我身を抱き占め、「アラ勿體なや罪深や、疑ひ晴れし今の仰せ、斯程尊き懐胎を、天魔の

魅入と唱ちしを、許し給へ」と岸破と臥し、涙ながらに詫び給ふ。去程に早や夜は明けて、いと〻心の麗はしく、硯引寄せ嘆きの中より、悦びの筆を染め、有りし次第を細々と、認す内にも胎内の王子、いと仂なく働かせ給ひ、軈て月日も重なりて、二歳十月に滿つ冬の、寒げき空とぞ移りける。斯くて或時靡耶の御前へ、優陀夷進み出て、平伏し「只今申上げまするは、則ち君の御言葉懇ろに聞し召すべし。抑も姫君の御懐胎は、最早三年に近くなれど、今以て其の兆なし、元より典藥どもは、病氣なりと見立て、朕も夫と存ずるに、靡耶一人懐胎と申すが、女に依りて懐腹と申すものあり、それのみならず人の恨みにて物あやかりもと案ずれど、情け深き靡耶なれば、附隨の女子も、嫉むべき事露ほどもなし、況してや姉の轎蛩彌も、何時ぞやの文の趣き、殊に親しき同情にて憎む様子は更々なし。是等の事を落もなく、堅く靡耶に言ひ聞かせ、安堵させよとの御使し、只々典醫の計らひに任せ給へ」と逃べければ靡耶夫人聞し

召し、「難有き我君の仰せ、然りながら、妾を病氣に見立て侍る、典醫の藥を用ゐん事は、なか〳〵に思ひも寄らず、實に自らが胎内は、王子なる事疑ひなし。それにつき和郎にばかり、物語る仔細あり、必ず他へ漏らしなせそ」と、身の有樣を細やかに言ひ聞かすれば優陀夷は感じ、「實にそれにては御誕生の無きは道理、此上は帝へ某宜き樣に申上候はん、御心安く思召せ」とて其儘御前を退きける。斯くて三年の春を迎へ、如月の初めとなりければ、帝國中の相見を百人選みて呼び出だせとの勅命あり。依りて此所彼所へ觸れられて、百人の相見を殿中へ召出だし、帝も御簾の陰よりして、樣子如何と窺ひ給へば、聽て高明大臣百人の相見に向ひ、「姫君の御身の上、御煩ひか但し又、御懷姙なるか詳らかに申上げよ」と命ずれば、相見ども承り、みな肺肝を碎きつゝ右顧左眄摩耶夫人の、御顏容を拜し、一同に、「御懷姙は思ひも寄らず、御煩ひに極まつたり。而も恨みの邪氣あり」と、正しく九十九人まで、言葉を揃へて申しける

故、姫君始め附隨の、女中も力を落さぬは無く、涙さしぐむ計りなり。時に遙かの末座に控へし、一人の相見の翁は何とやしけん、物をば言はで只潸然と泣き居るが帝密かに御覽じて、「斯く九十九人の者が、摩耶を病氣と見立てしに、あれなる老翁のみ仔細を言はで、只泣き居るこそ審なれ、ことの要を承れ」と、仰せに依りて高明大臣則ち件の老翁を呼び近づけて、仔細を問へば、翁は涙を打拂ひ、「そも姫君の御容體は、只今九十九人が見立て申上げたる上からは、老耄なる某儀は、何事も許し給はれ」と、詫ぶるを大臣聞入れず、「イヤ〳〵是は勿體なくも帝の仰せ、忽せならず、御相卜筮何れなりとも、心の丈を包み隱さで、詳に申上ぐべし」と、退引させぬ高明が、言葉に老翁頭を上げ、「然らば御免を蒙りて、某が今相する處、且つ占ひの趣きを、明白に申上げん。畏れながら摩耶夫人は、是眞の御病氣ならず、如何にも芽出度き御懷胎にて、而も玉を延べたる如き、太子御誕生に極まつたり」と、具さに逃ぶるを聞き敢ず、

大臣威丈高になり、「イヤ翁の言葉疑はし、さほど芽出度き御吉瑞、而も玉を延べたる如き、太子御懐胎と見立てながら、何とて潸然と泣きけるぞ。不吉の事動心得難し、サア此誕は如何に、如何にぞや」と、責め付けられて翁は嘆がず、「其譯懇ろに申すべし。されば某が占ひは、天眼通の仙法にて、九曜七曜二十八宿、三十六均の星を立て、其外秘密の法を以て、男女の位を指すなり」と、言はせも果てず大臣は、「それが又何故に悲しくて泣きつるぞ」「されば候、其仔細は、此王子降誕後、假令水火の中へ入り給ふとも、御身に恙ある事なけれど、十善天子の御位を望み給はず、妙覺無爲の位備はり、衆生濟度の法王如來に在ませば、明日の命も知れぬ此翁は、斯程尊き如來の結緣に、逢ふ事難さ恨めしさに、思はず涙ハ零せしなり」と、申せば君を始めとし、高明大臣、其外の、附隨までも是を聞きて、知れぬ事とは思ひながら、皆一同に悅びつゝ、一人が眞か九十九人の、申すが眞か先づ是までと、殘らず殿中を退けゝ

る。去程に摩耶夫人は、此の夏、綿ぬきの御祝ひの日より、玻璃遮那城へ移されて、青陽の間へ褥を設け、心も涼しき帷子に、折から薰香の、馨り一入媚めく風に、摩耶夫人はまだ宵の間の、轉寢し給ふ其の處へ、幼いけなる兒彷彿と、又も夫人の御側へ現れ、楓の如き御手にて、華奢々々と三度擦りて、「如何に母君先づ頃、又の對面を約せし故、再び現れ參りたり。明日より七日の御愼み大切なり、一時の嗔恚に、善根を燒き捨つると、言ひしこそ此時なれ。夫れ父に五恩、母に十恩とて、海にも山にも換へ難き、十月の恩を受けて此世へ生れ、又十丈とて、厚き恩ハ被り、遠からず父淨飯王にも、對面し奉らん。嬉しや母君」とて優しくも、抱き着きて搔き口説き、戀ひ焦れ給ふ有樣に、俱に焦るゝ摩耶夫人、うれし嬉しや、只今こそ御誕生まし〳〵たか」と、抱き上げて抱き占め〳〵、優陀夷夫婦に早く見せて、喜ばせんと飛立つ計り、心いそ〳〵立たんとすれば、轉寢の夢は甲斐なく覺めて、只双手にて其身をのみ、搔き抱

きて居たりしかば、這は又夢にてありけるよと、思へど最早や御誕生も、近からんと思へば心嬉しく、優陀夷を始め附隨に、密やかに物語り、御悦び限りなき、折から中老職の命婦とよぶ女中、君よりの御使ひに、參りたりとて入り來れば、摩耶は忙がはしく四下か片付け、いざ此方へと呼入るれば、命婦は優柔に座につきて、「扨て我君の仰せには、姫君の御煩ひより、二年三年此の方は、花の宴も之れ無き處、此節は少しづゝも御快きとの事故、帝此方へ行幸ありて、藍毘尼苑い花園にて、宮中の人々を、殘らず召出だして、花の宴の御催しは如何あるべき、それも一つは其方様の、お氣晴らしの爲なれば、只々摩耶の心任せに、せよとの仰せに侍るかし。如何思召さるゝや」と、述ぶれば摩耶は妙やかに、「思ひ懸ない今日の御使ひ、最早や三年も我君の、御顏容も拜し奉らず、御懷かしき折からに、此身に餘る仰せ事、冥加なや勿體や。殊に又局々の、上臈達も打揃うてとは、如何にも嬉しき御宴にこそ、摩耶が悦び此上なし、

君への返辭よきやうに、申上げくれよ」とて、尙種々の物語しつ、命婦を待遇し歸されける。去程に淨飯王、遽かに花の宴の御催しあり、其用意とて殿上殿下、上を下へと返すが如く、内外の官人立噪ぎて、局の取込み政所の、混雜大方ならざりけり。斯くて其日と成りければ、帝玻璃遮那城へ行幸ありて、月卿雲客殘りなく、藍毘尼苑の西青陽殿に、上下の隔てなくぞ連なりける。扨て又姉の轎曇彌も、君よりの仰せに依りて、花の宴に立出づる姿は　優しく見ゆれども、心の内の恐ろしさは、世に譬ふべき方もなく、妹摩耶とは同胞の、緣切りたれば今更に、心に懸る事もなく、怯めず臆せず廊下傳ひに附隨の女中引連れて、御前近くぞ進みける。されば青陽殿の南の廊へは諸卿を据ゑ、北の廊へは數多の女中を据ゑ、一轎曇彌の褥を右の上へ敷き、摩耶夫人の褥を左の下と定め、皆々衣紋掻い繕ひ、座を連れたる美々しさは、譬へん方もなき風情なり。されども摩耶夫人只一人、未だ出座なかりしかば、帝命婦を近く召され、「何故摩

耶に立出でぬぞ、今日の花の主なるに、何どて遅きや、疾く召せ」と、仰せに
従ひ馳せ行きて、斯くと申せば摩耶夫人、「されば今日の行幸、殊に珍らしき上
臈達の、遥びの迎ひの爲め、途まで心は赴きしが、君の思召の程如何と、身は
是に控へ侍り、直様参内致さんと、數多の女中を右左り、引連れ出でたる其姿、
天人とも仙女とも、譬へん様なき御粧ひ。加之ならず表には、仁愛慈悲の相を
現はし、徐々と歩ませ給ふ、御身上をアラ不思議や、瑠璃光如來不可思議の光
りを放ち、日月光佛諸共に、前後左右を守護すれば、歌舞の菩薩も光りを添へ、
御前間近く進みつゝ、式代あつて左なる、褥へ移り給ひける。帝是を御覽じて、
「如何に摩耶、久しく音信なき折から、今日の對面嬉しいぞや」と、實に情ある
御言葉に、摩耶は答へも只平伏し、君を敬うて座し給ひ、身を遜りて在すれ
ど、其様無高く麗はしさ、四下眩き有様に、數多の女中も惚々と、暫しは見惚
れ居たりしが、軈て褥の近くへ進み、「姫君儲ませ給ひしと、聞きて皆々お案じ

申し、只懐かしう侍りしに、早や癒らせ給ひけん、今日のお入りの如何計りか、
喜ばしや嬉しや」と、君の前をも憚らず、手取り袖曳き持て囃せば、輪蔓彌は
不興顔、背向きて何の言葉もなく、差俯向きて居たりしが、良流盼に摩耶の姿
を、熟々と眺めやり、思はず涙をはら〳〵と落し、アラ怖ろしの我心や、斯程
優しき妹を、嫉みし事の恥かしさと、心の内に詫び給ふ其色外へ現はれて、君
を始め人々も、輪蔓彌の摩耶を思ふ、涙の體を見るよりも、是までとは事變り、
扨々優しき姉君かなと、皆一同に感じける。これや如來の佛力にて、一時の懺
悔に億刼の、罪障此に消滅して、一佛淨土の結緣となる、最とも尊き事なりけ
る。其時帝御聲清しく、「あれなる藍毘尼苑の寶樹は、容易には折らせぬ筈、さ
れども一入風情ある、嬉しき今日の會なれば、皆々の心に適ひしを、一枝づゝ
許すべし、疾く〳〵手折りて簪に挿し、其花に擬へて一曲か唄ひ、盃を巡らし
さゞめき舞へ」と、君の仰せの其の御言葉の末、「扨て今日摩耶夫人は花の主に

て、自らの簪なければ、志のある方より、一枝手折りて簪に挿させ、酒を侑めよ」と仰せありければ、皆々願ふ處なりと、齊しく庭に降立ちて、何れが醍耶の御方の、御心着の花ならんと、彼方此方を打眺め、思ひ〳〵に見立てつゝ、これや〳〵と手折りては、皆簪に挿込みつ、醍耶の前に進み出でゝ、盃に取添へて進めけり。佛に一枝の花を捧げ、菩提の此身を得ると云ふ事、此時よりぞ始まりける。然れば盃の數巡りて、帝の御氣色麗はしく、醍耶の方に打向ひ、「あれなる提婆維樹の花房は、藍毘尼苑ハ長なれば、一枝朕が簪にせん、あれ折りてよ」と、仰せあり。醍耶は嬉しく庭へ降り、提婆維樹の下へ寄りて、やをら左りの手を伸ばし、一枝折らんとする程に、不思議や遽かに差込み來りて、胎内殊の外動じければ、すは夢の告げは今なるか、折も折とて花の下、玉體の縁も是までかと、引入るゝ樣に見えければ、女中達は慄き慌て、御手を把りて躍り擦り、目を揃へて取々に、御心を勵ましければ、醍耶は漸う人を力に、

提婆維樹の下へ座し、暫く心を落着け給ふ。是や正しく御安産の、機至れりとぞ見えにける。めでたし〳〵。

釋迦八相倭文庫

三編之序

夫れ摩耶夫人の懷胎を、諸佛結緣して安く太子は誕生し給ひ、忽地天上天下、唯我獨尊の形を造れども、天哉性哉、血筋の母の別れを知らず、繼母の手しほに育ち、やゝ三歳にして初めて、未來の母を深く戀慕す、これを三歳の出家と云ふ、然れば轎曇彌の惡念も、一時の懺悔に罪障消滅して、悉達太子の諱初め、冠定めの祝を賀ぶ、眞如の眉

の曇りなき、月景殿の勇ましきも、一犬の虚に吼ゆるを、萬賢の御見物様方、必ず實に傳ふべからず。

弘化三年丙午の春新版

万亭應賀述

釋迦八相倭文庫三編

去程に摩耶夫人の、座し給ふ御頭上へ、虚空より金色の光りな放ち、旗二旒れ天降りて、提婆羅樹の梢に留まり、異香芬々として實相の淨土も、斯くやあるらんと思ふ折から、夫人の御衣か搔分けつゝ、左りの側よりフラ尊やな、太子誕生まし〳〵ければ、帝な始め奉り、優陀夷夫婦附隨も、欣び勇み氣も浮かれ、殊にお庭の面と云ひ、遠かの御安産に取敢ず、屏風お褥お枕な、持運ぶさへ後や前、慌て惑へる其内に、今まで二旒と見えたる旗の、忽ち金色の龍と變じ、功德の水を降しつゝ、太子を始め摩耶夫人の穢れを清らかに洗浴して、蹤跡く雲へぞ登りける。去程に太子は、前へ三歩 後へ四歩、左りの指にて天をさし、右の指にて地をさし給ひ、天上天下、唯我獨尊の形ちを造り給ひてより、母君の膝に安座まし〳〵、乳房か搔き捜し尋ね給ふ。されば生れ子の産聲を聞く時

は、凡ての女の產に慣りて、一生の苦みも忘れて、力付く者なれど、摩耶夫人は然る氣色もなく、只雨に萎む花の如く、打萎れ給ふにぞ、優陀夷夫婦慌てゝ太子を抱き上げ、兼て召抱へられたる、乳母上臈達へ渡しければ、皆々大切に傳きて、御簾の內へぞ入れ奉る。扨又摩耶夫人なば、お褥の儘心靜かに、御居間へ遷すべしと、優陀夷夫婦の指圖に任せ、數多の女中勸りて、奥へ手輿に舁き遷しつゝ、御機嫌の程を伺ひけるに、尙宜しからぬ御容體故、誰彼の隔てなく、典藥ども殘らず御脈を取りけるに、皆々頭を傾けて、「御大切〳〵」と計り申せば、帝を始め優陀夷夫婦、命婦、其外怪しの末の者まで、太子御誕生の悅びの中の、悲みに袖を絞りて惜めども夕に艷艷く花の雲の、朝は雨にそぼ濡れて果敢なう散るに異らず、實にや老若の別ちなく、無常の風の誘へばこそ、假りに浮世と云ふ果敢なさ、然れば悼はしや摩耶夫人は、可愛盛りの御身にて、其儘はうつろはず、御健かなる風情にて、自然に目を閉ぢ果て給ふこそ、哀れ

と云ふも愚かなれ、扨て宮中の人々は、わつと泣き伏し皆一同に、袖を絞れる有樣には、空も雨持つ計りなり。此旨附隨の女中達、漸次〳〵に傳へしに、帝の御嘆き一方ならず、龍顏か惱まし悲み給ひ、「今日の花の宴こそ悅びなれ、正しく摩耶が名殘の爲に、儘せしに異らず、此上もなき死出の餞別、心に殘しそ」と打嘆き、弔はせ給ふぞ難有き。扨又君の御側に、附添ひおりし轎曼彌の方、摩耶は敢なく成り給ふと、聞くより褫襠掻い上げつゝ、無常の一間へ走り行き其亡骸に縋り着き、面は名殘の涙なれども、心の內には過ぎし頃、調伏せしより惱み初めて、斯く果敢なき身と成り給ふか、アラ怖ろしの我心や、罪なき妹を恨みし事、如何で天道許し給はん。摩耶の魂此の家の棟に、留まりなれば今一度、亡骸に返りて此の私に、冒藥を交はして給はれと、誰が敎へしか小袖の褄を結び留め、魂呼ひして泣きけるを、優陀夷見兼ねて樣々に、諫むれども尙正體なく、此儘此所に身を失ひ、冥土の摩耶に追着いて、伯りし罪か懺悔して、

天の御罰を逃れんと、悶え焦れて掻き口説くを、優陀夷は君の仰せに事寄せ、輪曼彌を傍へに隔てゝ、「其の御名殘は道理なれども、嘆いて甲斐なき繰言よりも後世の菩提が何より功德、イザ〳〵御支度ありて、妹君の供養を勸めらるべし」と宥め賺せば附隨の女中も、「それが何よりの御千言ぞ」と、言葉を揃へ、俱に勸められて輪曼彌は理に服し、泣く〳〵月景殿へぞ歸りける。是や抑も隨緣眞如の功德にて悟れば善と惡と二つは無く、煩惱菩提の種深き罪障も、一時の懺悔に消滅して、下化衆生 結緣致すとかや。斯くて淨飯大王は摩耶の菩提を營まんと、白綸子のお服に召更へられ、一間の內に閉籠り、御經讀誦し給ひけるが、良あつて命婦を召され、「密かに優陀夷へ尋ぬる事あり、是へ招くべし」と仰せの旨、直ちに次へ傳ふれば、優陀夷畏りて御前へ出で、進みて平伏する程に、帝御聲發らせ給ひ、「如何に優陀夷、摩耶が身の上、今更悔んで甲斐なき事、是れ皆生ある物の慣ひ、とは云へ未だうら若き、苔の花の身にしあれば、惜し

む心も一入勝りて、斯く亡き迹を弔ふ內、ふと思ひ出でにしは、摩耶が此世に在りける折、何がな彼が身の上に、願ひの筋もありつらん、それ等の事も聞かまほしく、殊に過ぎし頃久々なる、彼の懷姙を訝かしく思ひ、暦が尋ね遣はしし事の有りし時、其方が種々の仔細ありと答へしが、其趣は如何なる事ぞ、包まず語り聞かせよ」と、優陀夷仰せを被りて、「さん候、過ぎし頃、摩耶へ綸言ありし節、委しき事は今以て、奏聞致さず候へ共、其節摩耶の仰せには、いやとよ、妾が胎內は、物の化の魅入り病氣にあらず、偏へに芽出度き王子なり、假へ令千劫萬劫經るとも、一度は誕生ます事疑ひなけれど、兎に角人の口端のうたてさに、懷胎と思ふ三年が間の、樣々を落もなく自ら書き認めて此所にありとて、某夫婦へ忍びやかに、見せ給ひしを拜見し、最とも尊く覺えしが、扨こそは此度不思議にも、夢の御告に少しも違はず、太子は御誕生ましませしが、摩耶の方は悴はしくも、既に果敢なく成り給ひぬ。其時傍へに置給ひし、御手

函を更め見しに、以前の御遺書は更なり、數多の女中達へそれ〴〵に、御遺物分けの事までも、認め置かれし御心入れ、未だうら若き御身にして、斯くまで物に行届きし、御貞心の忝なさ、思へばいとゞ悲しさに、未だ奏聞も控へしが、過ぎにし事の御不審を、御尋れに任せ只今こそ、某が妻に申付け、彼の御書物を取寄せて、尊覽に入れ奉らん」と、云ひつゝ袂の外へ向き、人を呼ばんとする樣に、折よく妻は御佛に、供養の花を携へて、行くを呼止め云々と、申付くれば女房は、驚て摩耶の手函を携へ、目も泣腫らし悄々と、御前へ出でゝ手箱の内より、御書證の文の中にも、三年の間惱み給ひし、其の故由を細々と書き綴りしを取出だし、帝へ捧げ參らすれば、淨飯王取上げ給ひ、熟々叡覽在ますに、始めよりして細々と、御身の果敢き事をのみ、書き綴け給ひしかば、帝を始め優陀夷夫婦も、感涙袖に包み兼れ、暫し言葉も絶えけるが、良有つて帝優陀夷に向はせ給ひ、「是見よ、此の返す書に若しも此儘相果てなば、懷胎なるか病かの、二つ一つの證りをば、身を割いてなりとも現はして、人の疑ひ晴らしてたべ、是のみ摩耶が上もなき、願ひに侍りと書きてあり」と仰せて尙も細々と、書遺されし事どもを、殘る方なく讀終りて、龍顏の涙を拂はせ給ひ、

「如何に優陀夷、摩耶が亡骸は、尙存生の體に待遇し、八葉の車に乘せ、宮中を曳り出だすべし、扨て弔ひ納むる處は、靑龍殿の東なる、夕陽山の景色をば、摩耶が常々樂みて、愛で悅びし處なれば、此の山の項上に、十六丈の寶塔を築き、正面に提婆羅樹を植ゑ、左右に藍毘尼苑の寶樹を植付け、靑龍殿を傍に引遷して、香華を絶す事なく弔ふべし」との綸言あり。優陀夷夫婦頭を下げ、「然りとては厚き御恩み、ゆゑや草葉の蔭に於て、此罪聞し召すならば、摩耶夫人は此御言葉を、名僧智識の經文よりも、嬉しく得道致さるべし、イデ綸言の趣をそれ〴〵へ申達せん」と卽座に御前を退きて、それ〴〵へ右の趣を傳へ、急ぎて用意を調へつゝ、摩耶の亡骸野邊送りは、君の仰せに任せつゝ、尙存生の

裝ひにて、八葉の車に移し、帝を始め附隨まで、殘る方なく香華の手向け、良終りて御供には、優陀夷を始め高明大臣、右將軍を先として、百官諸士の輩數百人、衣服を更め是か警護す。扨又女中の輩は、優陀夷女房命婦を始め、お側お小姓お次お茶の間、お仲居お末お婢まで、夫々に役を設け、御車に隨ひつゝ、轎て宮中を徐々と運び出て、列を亂さぬ道すがら、辻々には老若貴賤の隔なく、袖を絞りて立集ひ、摩耶の車を拜しつゝ、額き嘆くこそ殊勝なれ。斯くて程なく夕陽山の、麓近くへ來りければ、笙篠簫笛太鼓の音を、揃へて音樂を備しつゝ、尙も車を進むる程に、附隨ふ面々も、皆感涙を堰き敢ず、牛打つ男も斯く計り、尊き方の葬式に、一結緣する事の難有さと、感嘆すれば思はずも、鞭を覆りと、投げ捨てゝ、短き袂を伸ばしつゝ、涙を拭ふぞ道理なる。去程に夕陽山の御葬所へ、漸く着きければ、高きも低きも隔てなき、世の慣ひとて是非もなや、無常の風に靡くなる、旗天蓋も哀れ添ふ、葬禮の式事終り、車よりして

御柩を、既に土中へ納めつゝ、守りの役を付け置きて、忌日々々の御弔ひ、香華の手向け怠りなく、扨又彼の青龍殿を、追々此所へ引移され、贈進あるこそ冥加なれ。されば月景殿の轎曇彌は、その後心も改まりて、摩耶の菩提にも心を盡し、苟且にも媚めきたる、氣勢なければ、命婦は悅び、何とぞ帝の御伽に、親しく近づけ奉らんと、彼方此方を繕ひて、媒介しつゝ睦じく、御道はせを執持ちければ、夜の大殿も浮々と、酒の莚の繁々に、去る者は日々に疎しと、世の俚言に違ふ事なく、摩耶の忌日程經ちて、いつしか絕ゆる香華の煙は轎曇彌の胸に憧れ、帝も遂に月景殿へ通はせ給ひて、比翼連理のわりなき契になりける故、附隨の女中達ちも、悅びの餘りには、寄り集りて獨り殿の、身を恨み嘆くは、「宮仕へして憂きを知らざる、女子の常とぞ知られける。扨て淨飯大王は、或時命婦を月景殿へ召連れ給ひ、轎曇彌と語らひ給ふは、「青龍城へ殘りをる、摩耶が召使を始め、月景殿の女どもへも摩耶の遺物分けを遣はすべし」と、仰

せを受けて畏まる。命婦慇懃に申すやう、「御意の趣き畏み候へ共、摩耶夫人の御遺言の次第もあれば、此儀如何」と伺へば「如何にも〳〵、其遺書へ誌せし者へは、それ〴〵の遺物を遣はし、漏れたる者へは、其方達宜きに計らへかし」と、殘る方なき恵みの程、青龍城を始とし、月景殿の女中へも、優陀夷の女房を以てそれ〴〵に御遺物を下され、青龍城の女中は殘らず、御暇を賜はりし故、名殘涙の乾かぬ内、嬉し涙の嫁入沙汰、或ひは智取りそれ〴〵に、兄弟分の訪ひ音づれ、狂言見物月花の、供も互ひに世帶染み、夫婦諍ひの出來心から、重ぬる棲の敷現はれ、遂には苦界に身を落すもあり、憂きも辛きも假の世の、假の宿にも因と果の、車は巡り來るものを、知らぬが佛のいたづら事、謹むべし、慎むべし。

去程に、月日は流るゝよりも最と早く、摩耶の忌日、百ケ日も何時か過ぎけるに、太子は益々健かに成人し給ひ、殊に精悍やかなる事の聞えて、淨飯王は

優陀夷を召し、「今日幸ひの吉辰なれば、太子に始めての對面せん、疾く〳〵諸卿へも參内の趣き、相觸れよ」との仰せを受け、それ〴〵へ達せしに、月卿雲客、如何にも芽出度き御世の政事と、心勇みて參内ある。扨て玉座近くへ優陀夷の女房、太子を抱き奉りて進みければ、帝の御膝に抱き取り給ひつゝ、「如何にも優しき面ごしかな、摩耶に其の儘生寫しと、云ふも中々愚なり」と、心ともなく言ひかけ給ひて、「いや然にあらず、此若宮の母と云ふは、則ち是なる橋曇彌なり、忘れても摩耶の子と、云ふ事決して語るまじ、宮中は言ふも更なり、國中、民間、卑しの者の末までも、此事堅く示すべし」と仰せあれば、只太子は橋曇彌の、御腹なりと持て囃し奉りて、千代萬代の末までもと、祝ひ海き參らせける。然れば橋曇彌は世の聞え、旁々以て嬉しき事の、此上は侍らじとて、帝の御側近くより、太子を抱取り然も愛々しく、ほんそ子の如くに假裝し、良有つて乳母を引連れ、月景殿へ歸られければ、附隨の者の中にも、始めて玉顔

を拜せし者は、アラ麗はしの御有様や、桃の媚、翡翠の黒髪、艷々しく、璃瑠の眉より眦かけて、仁愛の御相現れ、如何にも優しき若樣と、手を打囃し喋けば、太子は御機嫌麗はしく、共に浮かれて愛いけに、頭てん〳〵手拍子まで、日に增して智慧づき給ふを、母君は餘念なく、取囃し守り立てらるゝに、早三歲と爲り給へば、初元結の御祝ひとて、月景殿にて樣々の、物の御調ひ數々揃ひ、既に帝へ參内の、吉日となりければ、御父淨飯大王へ、獻上の其品々は、察レ御駒、綾羅、金劍、銀剣、玉の旗、龍幢、龍旗、寶瑤桂、金銀珠玉を取揃へつ、華やかなる飾を添へ、官人仕丁打圍ひ、前後を守りて參内ある、其形容ぞ華やかなる、扨て太子へは、優陀夷夫婦乳母傅きて、軈て玉座の前へ進み出で、禮儀正しく見え給へば、帝叡覽ましゝて、御言葉優しく、「念なう斯く成長し給ひし事、偏へに國の榮え千代萬代までも限りなう、芽出度き例、則ち諱を、悉達太子と授くるぞ」と、仰せに從ひ傍らに、控へし優陀夷、乘て認めありし

辭讃折紙を、白木造りの臺の盛、差向けゝれば、差添ひの優陀夷の女房、押戴かし參らすれば、共に平伏ありて、御禮をぞ述べ給ふ。其時帝再び宣ふやう、「如何に優陀夷承れ、今日太子初元結、諱初めの祝ひ事に、三ヶ年の醜耶が忌も晴れたれば、轎曇彌諸共、太子を夕陽山へ誘ふべし」と宣示あり、優陀夷畏り、其趣き云々と、轎曇彌へ告げ知らせしに、「こは身に餘りて嬉しき仰せかな。願うても一度は、太子を誘ひ、摩耶が墓場へ趣き、切めて遺腹子の成人を假托に、我善からぬ事の懺悔をなさば、然のみに執念く恨みもあらじと、過ぎし日よりも此事の、心に思ひ絕えれども、帝への聞え如何あらんと、案じて控へ侍りしに、然りとは嬉しき仰せなり。御言葉の變らぬ内、疾く〳〵太子を誘ひ申さん。それ〳〵の者へ供の用意を、急がしてたべ」とある。遽かの御物詣に、附隨の女中も慌てさゞめきて、御供の身拵へ、何かに各々行通ひして、長局の混雜云ふ計りなし。斯くて程なく夫々の、御供方も揃ひ、御乘物か御廣敷内な

る、長廊下まで舁き上げしに、軈て轎曳彌の方、華美やかなる粧ひにて、太子を抱き、御駕籠へ移り給ひければ、御陸尺の女ども、力揃へて徐々舁き上げ、御玄關まで舁き出づれば、男の陸尺受取りて、尚徐やかに舁出だせば、御供には優陀夷夫婦を始めとして、お側お次お婢まで、列りて供し奉る。扨て夕陽山の境内には、藍毘尼苑の花今を盛りと咲き揃ひ、人待貌の梢々も、只山彦の音づれのみにて、花になる身は何ならん。中にも無情なき色を含み、咲亂れしは、寶塔の正面なる、提婆羅樹の花房は、山吹の色にあられども、物言ふ事の叶はぬは、醜耶が果敢なき亡魂の、若しや留まり給ふかと、宮守る人も袖を濡らせし折からに、麓より對の挾箱、凛々しき打物先立てつゝ、悉達太子、轎曳彌の方御參詣と、軈て寶塔の傍らへ、御乘物を舁きおろし、お服物參らせしに、悉達太子は常よりも、御機嫌冴々と勇み給ふを、附隨御手をひかゆれば、如何にしてか振り放ちて、彼の提婆羅樹の邊りへ、直ちに到り給ひつゝ、花の下に取

付きて、戯れて居給ふ内、轎曳彌は醜耶の寶塔の前へ跪き、科なき妹を恨み、終に果敢なくなり給ひし事の、今となりては我身乍ら、我身を恨み侍るかしと、後を悔みし繰言も、人目憚る口の内にて、又提婆羅樹に打向ひて、「夫れ花は心なしと雖も、折を待ち得て斯く其色を現せば、我罪科を如何に偲ぶべきか、あら懐かしの妹君、あら恐しの我心やな」と、戯悔い涙堰き敢ず、袖に餘れる折こそあれ。遽かに山風烈しく吹起り、雨は篠を亂して突く如くに、花を散らして降り來れば、轎曳彌を始めとし、皆々取敢ず傍らなる、青龍殿へ入りける故、附添ひし乳母も亦、太子を抱き宮中に入りて、雨を凌がんとしぬれども、太子は一人むづかりて、中々木の下を離れ給はず、尚惡足掻き仕給ふを、優陀夷は是れを見兼ねつゝ、雨ん厭はず走り出で、「コハ何故にむづかり給ふぞ、此雨風の烈しきに濕れて、故意と我儘を宣ふか、今にも雨晴れ風止みなば、又此所へ誘ひ參らせん、いざ〳〵此方へ〳〵」と抱き入れんとしつれども、中々に聽入

れなく、尙むづかり足掻き給ふにぞ、優陀夷は言葉を正しくして、「扨も心強き若君かな、然る御心なる兆にか、三年が間母君の、胎内に孕りて、遂に母上を失ひ給ひしも、既に此花の下なりき。あら恨めしの此花や、疾く〳〵渡らせ給へ」とて、無體に懷き抱へつゝ、宮の内なる轎曇彌の、御膝へ移し參らせて、「イザ是なる母君の許に、遊び給へ」と諫め申せば、「いや〳〵是なるは、麿が母には在さず」と、細き腕に押退けて、「我母慈し、何處にや在します、何科あつて此の麿を、早くも見捨て給ひしぞや、我こそ麿が母なれと、早や〳〵名乘りて見えてたべ」と、轎曇彌の裾に縋り、彼方此方の女中に賣はり、物狂はしく潛然と、打泣き給ふ有樣は、如何にも不思議と有合ふ人々、貰ひ泣しつ嫌し申して、他へ紛らせども聞給はず、太子は尙むづかりながら、「此所は何と云ふ所にて、主の名は何と云ふぞ聞かま欲しや」と宣ふに、轎曇彌は、彌々悲しく答へ兼れて、絶入る計り泣き沈みしを、何心なく太子は尙も袖を取り、「如何に〳〵」

と尋れ給ふに、轎曇彌は漸くに、涙押へて顏を上げ、「その御心に快からず、思さるゝ事の有ればこそ、然るお尋のあるらんを、恨みとも、情無しとも今更嘲ちは致されども、御心根の痛はしさに、申兼れたる此の所は、昔摩耶と云ふ者の、住みし宮にて侍るかし。アレ〳〵那處に美しき、綠の花の候を、御覽あつて慰み晴らし、然のみむづかり給ふな」と、轎曇彌は更なり、其餘の者も、取々嫌し紛らせども、「イヤ花より其の摩耶夫人を、此所へ召して給はれ」と、他なき仰せを聞くよりも、又々皆も興覺めて、何と答ふる者も無ければ、轎曇彌は優柔に、「其摩耶と申す女は、あれなる寶塔の苔の下に、住む人なれば中々に、召さるゝ事は叶ひ侍らず、異な事のみ仰せずとも、先づ祝ひの酒開し召せ」と、提籠の供御を進むれば、太子は不審の面色にて、頭をやゝら傾け給ひ、心の内に思すやう、今日の花見に眞の母の、在す所を聞得たる事の嬉しさ、時節を待ち、遂には深く尋れんものと、漸くに思ひ止まり、「さらばあれなる花一枝、誰

か折りて與へよ」と、仰せに優陀夷畏り、「最と安き御事なり」とて、一枝折りて差上ぐれば、太子は嬉しげに取上げて、是より御手を放ち給はず、是なん深き思慮の初めなり。是を三歳の出家と云へど、三年胎内に有せしゆゑ、五歳の出家とも申しぬ。扨て御歸りの路すがらは、御乘物を退けて、殘らず附き隨ひ參らせ、御徒歩にて月景殿へ、徐々と歸らせ給ひける。夫程に轎曼彌は、量らずも太子の心に、實の母て無き事を、悟られしより何となく不快らず思ふより、隔つる心の起りつゝ、傅くさへも疎ましけれど、帝の手前如何ぞと、包めど漏るゝ無情さの、涙の袖に懐き抱へ、晝夜慰め參らするに、加何なる故にか太子は又、動もすれば佛間へ入り、夕陽山より家産にせし、彼の花房を佛の前なる、經机に供へつゝ、愛けなる掌を合せ、何事をか祈念して、伏拜ませ給ひけるを、乳母は見るより疎ましく、お側へ寄りて餘所々々しき、事に紛らし諫むる樣、「是はしたり若君樣、まだお年も參らぬに、異な事ばかり遊ばさる、其

のよな事はまだお早い、畏れながら御相應の、コレ此所にある鳩車は、太子の御年既に早や、お五つに成り給ひし故、公卿大臣より參らせし、若樣のお手遊、いざ是をお引き遊ばして、母上樣のお心を、お慰め遊ばせ」と、申すを太子は餘所になし、「ノウ乳母何言やるぞ、世の有樣は常光石火、昨日生れて今日の夕の、煙と消ゆるも爭はれず、三才にても五才にても、身の老先は頼まれぬもの、齢は此所を離れる事は思ひも寄らず」と、又掌を合せ、再び答へも無き處へ、轎曼彌は忍び來て、若しや摩耶の俤の、現れもして若君に、見ゆる事の有らんかと、果敢なき事か推量りて、種々心か惱ましつゝ、先程より窺ひ居たるに、乳人は早く側へ寄り、今太子の宣ひし事云々と告げ申すを、轎曼彌は聞敢へず、弼よ涙も忍び兼れ、袖に餘れる計りなり。斯る處へ高明大臣、帝の宣旨を蒙りて、此の所へ入り來れば、轎曼彌は周章しく、泣顔隠して出で迎へ、「如何に大臣、何事の侍るにや」と、尋れに高明手か支へ「されば今日の宣旨に

は、太子五才に成り給ひし故、則ち三つ目の御祝ひ、冠定めのお儀式を、仰せ出だされて候」と、逃ぶれば轎曇彌打頷き、「オヽそれこそは、女は簪初めと云ひ、下つ方にては袴着の祝ひとて、兩親ある者は連りて、祝ひさゞめく事なるに、我太子の無情さは、年端も行かぬにアレリ給へ、あの佛間に終日在して只御仏を拜し給ひ、餘の事は申上げても、如何な〳〵聽入れ給はず、如何にすべき」と打嘲てば、大臣も訝りながら、御側へ進み寄れば、太子は早や色を悟りて優々しく言葉を懸け給ふ。其時大臣謹んで、「若君五才の御祝ひ、冠定めのお儀式を、仰せ出だされて候」と、恭しく逃べければ「それこそ身が望む處、轎曇彌の御方も、嘸な悦び給ふべし。急ぎ用意を致せよ」と、案に相違の御仰せ、之元より心と言葉の、裏表とは知らずして、千代萬代まで繁昌の、兆と皆々悦びける。聽て吉日と成りければ、帝を始め轎曇彌、奥書院へ褥を設け、月卿雲客袖を連れ、匹をついで並居る有様、實に勇ましき次第なり。去程に悉達太子は、

冠凛々しく衣紋つき、自ら兼高く見え、歩み出て給ふ御裝ひ、遲しき而差は、五才と云へど七才の智恵在しませば、席上の起居擧動、殊更に父君を、敬ひ從ふ言葉の品々、實に常人とは見え給はずと、皆々畏れ敬ひける。其時帝、太子を近く進ませ、「扨も〳〵美しき裝ひかな、朕が仁德に十倍増して、國を治め民を憫む事、今よりして忘れ給ふな。初冠の祝ひ、芽出たし〳〵」と謂き給へば、轎曇彌も木に竹を接ぐ、相性の生得惡き心から、祝ひ言葉を懸けられけれど、何となくうつり宜からず、餘所の見る目も鈍ましかりき。斯くて御祝ひも濟みければ、帝太子を誘ひて、月景殿の御庭へ降り給ひ、池水に浮べし小舟に乘り、帝自から棹して、漕ぎ戯れ給ひければ、太子殊の外悦び喋き、折しも蓮の花盛りにて、其色香の清らかなるを、只管に愛てらるゝ故、帝思はず涙を催し、御心の内に思すやう、そも太子は末頼もしからぬ、志の程現れぬ、斯くあらんかと此池に咲きし蓮を見せけるに、果して外の花よりも、別けて甚く好む事、是佛

心の兆疑ひなし。何とぞ此の志を、止めたしと只管に、思ふ心を押隠し、「水上の遊びは是までなり、尚勇ましき戯れせん、太子を始め女子ども、早や來れよ」と船より上り、宮中へぞ入り給ふ。扨も輪曼彌は過ぎし頃より、太子此世に亡き母の、摩耶を慕ひ給ふより、何ぼう辛さを忘れ兼れ、暫し心を慰む爲、腰元共を相手とし、琴琴を調べ唄ふ處へ、太子諸共帝入らせられ、「コハ面白し、今日の祝ひの芽出度さに、今より酒を始め、富貴組など唄ひて、腰元共一曲を奏で、我心を慰めよ」と、仰せは嬉しき女中達、立噪ぎつゝ種々の、思ひ付なる事どもして、御慰みに供へければ、帝一入興に入り、其夜は月景殿へ御止宿ありて、太子の心を勇ませ給ふは、彼の佛心を抑へ給ふ、下心とぞ知られける。

扨此緩き小弓の勝負に、太子と提婆の爭ひ、太子學問に才智ある事、太子修業の志、新宮造營、太子に妃を奉る事、太子御胤を宿しゝ妃を見捨てゝ、宮中を忍び出て給ふ事、此外種々の不思議ある事か、追々次編に著はすべし。

釋迦八相倭文庫

四編之序

夫れ天の命ずる二五の性理、精しきを受けて生るゝものは人也。性理偏氣に埋れて生るゝものは畜類なり。性理幽微なるを受けて生るゝものは草木也。さればその性理の精しきを受て生れし中にも、猶貴き賢仙を望む。太子の御歳七才にて、小弓の勝負を催し給ひ、大惡無双の徒弟なる、提婆達多と爭ひしが、終に射勝ち給ひしより、是ぞ提婆の

意恨の初め、扨太子九才にして、初學の師には髯頭覽弗の院へ遷り、回鶻麟馬虎頭の筆勢、皆流通あるあらましを、覺束なくもあやなして、冬籠する此草冊子、何とぞ梅に先立ちて、評判あらんことを冀ふと爾云ふ。

弘化三年丙午春の新版

万亭應賀述

釋迦八相倭文庫四編

爰に又淨飯王の四番目の弟、博濟道にて三ケ國を領せる斛飯王は、過ぎし頃善覺大臣の、姉妹の娘を深く思ひ侘び、戀ひ慕ひしが二人とも心に從はず。是に依つて自から善覺大臣が館へ赴き、何れなりとも奪ひ取り、立戻らんと狼藉を働きしに、折しも思ひがけなく迦毘羅城なる兄君、淨飯王より勅使として、初大臣入り來りしかば、斛飯王は又も仕損じ、空しく悄々立歸りつゝ、二人の娘の懷子を聞くに、早や姉妹とも淨飯王の、后と成りたる沙汰ありければ、斛飯は齒噛みを爲して、二人の娘が憎み、且つ兄上を嫉みしが、詮方なくて漸くに、暫時は思ひ止まりぬ。扨此の斛飯王と、奥方の中に出來たる、提婆達多と云ふ太子あり。幼きよりして心荒く、仁義の道なば少しも學ばず、只山へ行き野に趣きて、鳥獸を多く狩り捕り、些細の遊び戯れにも、殺生ごとを好みつゝ、

今年漸く十五にして、飽くまで勝れし豪傑の、凄まじき働きを、見るもの膽を冷さぬはなし。斯くて或時庭へ立出て、小性相手に唐犬を、賞め詩み居たりしに、腰元女中、「若様〳〵」と、腰折り屈めて、「只今迦毘羅城の伯父君様より御使ひ參り、父上お逢ひ遊ばす故、貴方様にも御對面あるやう、殿様仰せられました」と、申上ぐれば提婆達多、「はて何用あつて遽かの使者」と、言ひつゝ其所を打捨てゝ、縁側へ來て腰掛くれば、彼の腰元が注け參らする、湯桶の湯にて手を洗ふ。斯る處へ庭口より、淨飯王の御使ひを、側役の者伴ひ來り、提婆の前へ平伏すれば、提婆は不審の眉を顰め、「何事にや」と問ふも待たず、彼の使者言葉を正しくし、「今日の御使ひ、別儀には候はず、悉達太子さま、早や七才になられ給ひし故、駒競べ小弓の勝負の御催し之有るにつき、若君にも御相手の、思召し如何候や、御様子弥れ參れとの事、尤も其の當日は、即ち明日に定められ候」と述べければ、勇氣に誇る提婆達多、目に角立てゝ言ひけるやう、

「それは〳〵、御念の入りたる御使ひかな、然し悉達どのはまだ赤兒も同然、殊に羸弱き性質なれば、我を萬事の稽古の師匠とも頼むべき筈なるに、相手などとは傍腹痛し、オヽよし〳〵、何事も我が方寸の内にあり、會日は愈々明日とあれば、我来明より赴きて、荒馬の賞め方、手綱の捌き様、思ふ存分目に物見せん、併し悉達どのは、まだ年齢行かぬと言つて、駒競べ或ひは小弓の勝負にかゝり、滿更に用捨もなるまい、赤恥掻いて父淨飯王まで、好い相伴の面汚しも、我から決して望むにあらず、使者を向けられたる程なれば、元より覺悟の上ならん、面白し〳〵、委細は明日參りし上、萬事緩々語らべし、使ひの者大儀」と撫柄に、膠もしやしやりも無き挨拶、投げ出す様に言ひ捨てゝ、一間の内へぞ入りにける。使ひの人は手持無沙汰に、彼の側役に誘はれ、使者の前通りつゝ、暫し休息して歸りける。扨て其の翌日迦毘羅城にては、愈々今日駒競べ、小弓の勝負の御催しとて、殿上の大庭先なる御馬場へ、新たに敷砂を

爲し、凛々しく埒を結ひ廻らし、塵も据ゑざる掃き掃除の役を添へられて、綺羅びやかに御馬見所には、紫の幕を打たせ、前には御簾を懸けまくも、内には淨飯王を始め、橋曇彌の方、月卿雲客、殿上人等、それ〳〵に席を分けて着座せしめ、又其人々の北の方、皆〻く御簾の内に召されて、小弓の勝負を見物す。斯くて程もなく悉達太子は、提婆を先とし、數多の公卿の公達を伴ひ、附隨の者を召具して、馬場の假家へ立出で給ひて、敵味方の群を分けんと、則ち提婆を西の方の大將に定め、小太郎と名乘らせて、諸卿の公達を差副へられ、太子は東の方の大將となり、大太郎と名乘り給ひ、同じく諸卿の公達を誘ひ、斯く東西に陣を分ち、第一番には霞の勝負と名づけて、西の方の公達駒を進め、四寸の玉を東へ擲つを、東の方の公達走せ出て、是を射て落さんとすれども、其矢は外れて射止め得ず。是よりして漸次〳〵に、互ひに出で合ひ投げかけ〳〵、射れども〳〵空矢のみにて、勝負更に付かざれば、いで此上は大將同士の勝負

をせんとて太子と提婆、西東より鐙を蹴立て、最とも勇々しく出て會ひければ、馬見所には淨飯王を始め、橋曇彌附隨まで、今ぞ太子の勝ーぞと、手に汗握り身を顫はし、何とぞ太子勝ち給へと、心を凝し目視い居れば、並居る諸卿北の方も、片唾か呑みてぞ眺めやる。扨て提婆の方より來りたる、公達數多の女中達は、何とぞ提婆の勝つやうにと、神佛を念じそれ〳〵に、氣を揉み焦るぞ道理なる。然れば元より強氣の提婆、太子を侮り心の内に、已れ今目に物見せんと、嫌て西の方より馳せ出で〻、玉を虛空へ擲てば、悉達太子は心得たりと、兼ての身構へ弓引絞り、兵と射る矢は過たず、玉を發矢と射落し給へば、彼方此方の見物の人々、思はず聲を振り立て〻「東の勝　と呼ば〻つたり。提婆は是に氣を苛ち、身構へしたる程もなく、太子東の持場より、擲ち給ふ其の玉を、さしつたりと發矢と射る。其矢は外れて張詰めし、幕の外なる板塀を、射貫きたる其の音に、驚破射損ぜしと大音に、此所彼所にて囃されければ、提

婆は無念さ遣る方なく、イデ今一矢仕らんと、駒を勇ませ進めける故、太子又玉を投げ給ひしに、是をも思はず射外して、提婆は彌よ殘念さ、顏を背向けて齒噛みをなし、口惜涙を落せしは、是ぞ所謂る鬼の目に、涙と見えて心地よし。

此有樣に提婆の方より、召出だされし見物は、力を落し無念の思く、又此方には淨飯王、轎曇彌を始め附隨の、女中は更なり、月卿雲客、其の北の方も一同に、若君一人の御勝と、口を揃へて囃し立てられ、提婆の恥辱此上や有るまじと、流石の淨飯王差ぐみ給ひ、軈て優陀夷を召寄せられ、「如何に優陀夷、只今の勝負は、大空を飛ぶ玉なれば、中らぬが道理なり。然るを太子が射止めたるは、是れ過まちの功名なれば、極めて勝とも言ひ難し。依つて今一度東西を分け、第二番目、草薙の早勝負を、疾く〳〵催させよ」と仰せの趣き、優陀夷は畏りて、兩方の大將へ、斯くと告げゝれば、又東西の公達各々出で會ひ、草薙の早勝負に取懸るを、太子味方の公達に宣ふやう、「如何に各々、空飛ぶ玉さへ

射止むれば射止むるものを、此草薙の早勝負は、大地を轉ぶ玉なれば、射止めんは心の儘なり、然のみに焦り給ふ事勿れ、彼方に射止めば、此方にも、劣らず射止め給へよ」と、心を付けたる仰せを受けて、皆々心得出立ちつゝ、勵みて勝負を爭ひけれども、何れも逸矢のみにして、又も勝負定まられば、遂に又東西の、大將の手前となり、駒を蹴立てゝ西の方より、提婆は勇み進み出で、大力無双の日頃の手並に、十倍增して力を籠め、玉を大空へ貫く如く、殊更高く擲ちしを、太子は悠々と矢を交へ、未だ放たで在せしを、提婆は勿論身寄の見物、「悉達太子射損じたり、提婆の勝」と大音に、呼上げられて轎曇彌、其外附隨の女中達、皆冷汗を額へ流し、御簾の内より伸び上り、樣子を窺ひ見る處に、太子軈て身構へしつゝ、雲の中より落ち降る、處を丁と射止めし故、提婆は案に相違して、呆れて獨り膽を消し、射損ひしと一口に、謗りし事の恥かしげなる折からに、轎曇彌聲を懸け、「ヤレ出來したり、出來したり、初めに射損ぜし

と見せかけ、落來る處を射止めたは、一入手柄〳〵と」宣へば、先に囃し立てたる提婆方の者ども、皆消入りたき風情にて、何と言ふべき言葉もなく、顏赧らめてぞ控へ居る。提婆は尙も心を背ち、第三番目の勝負に小的を射けるに、太子は深く思案なし、彼方に射止むる時は此方も射止め、彼方が外せば此方も外し、小的の勝負を分けざるは、太子の心に思慮ある事と、皆々感じ敬ひぬ。偖提婆は十五才、太子は僅かに七才なるに、小弓の勝負に負けたるより、是ぞ遺恨の始めなる。然れば太子は其色を悟り、提婆に向ひて物慇懃に、言葉を交はし睦じく、袖を取りて先へ立ち、「先づ〳〵此方へ御入あれ、祝ひの酒、一つ參らせん」と、宮中へ伴ひ給へば、淨飯王憍曇彌も座席に列り、「芽出度き今日の座敷かな、いざや一献過さんず、腰元ども呼へや呼へ」と喋めき渡り、提婆を厚く待遇せども、提婆は中々興に浮かれず、暫くして館へ歸りければ、太子は附隨の者に宣ふやう、「扨も今日の遊は面白からず、本意なき戯れ、恨めしき事

かな」と悔ませ給ふは、奥深き思慮、在します事なるべし。然れば早くも年月經ちて、太子九才に成らせ給へば、帝よりの綸言にて、優陀夷へ仰付けらるゝは、如何に優陀夷、太子も早や、九才にもなりたれば、學問の道をも學ばせんと思へば、數多の殿上人を是へ呼べ」と、仰せに從ひ呼出だせば、皆參内して居並びたり。其時帝宣ふは、「そも太子には如何なる事を、初には學ばせんや、皆々宜しく詮議すべし。依りて朕が思ふには、先づ出世の道を第一に、學ばせんと存ずれど、汝等が存じ寄る處をも、詳らかに聞かせよ」と、事懇ろに仰せあれば、數多の殿上人、右と左に座を構へ、詮議取々なりけるが、軈て右の座より一人の公卿、進み出でゝ奏しけるは、「夫れ皇きは利を求めず、仰せの如く御出世の道こそ芽出度かるべし」と、逃ぶれば又左の方より、公卿一人進み出で、「畏れながら御尋れに任せ、申上げ奉る、唯今右より奏聞せしは、實に尤もの事なれども、我々が存ずる處は、先づ太子の初學には、世間の道こそ然

るべし」と、速かに言上せしに、帝暫く御頭を傾けさせ給ひしが、其有つて宣ふやう、「成程々々、只今右の方より申す條も然る事なれど、能々思慮を廻らし見るに、太子摩耶の胎内にある節、百人の相見の内、一人の老翁が占ひし處、今となりて太子の起居動作を思ひ合はすれば、未だ年端も參らぬに心賢く、人の心を破らぬ氣質、正しき樣子の見え侍れば、如何にも出世の道よりも、先づ〳〵世間の事業を、學ばせんに如くべからず。斯樣に年波寄する朕が身の、只案じらるゝは太子の事、心に掛るは是のみなれば、皆の者宜き樣に計らひくれよかし」と他事もなく、事懇ろに仰すれば、座中一同頭を下げ、畏りをぞ申しける。其時優陀夷座中の者に、殘らず談じて言上するやう、「君の仰せ、座中の者殘る方なく、御道理に存じ奉る。就きて太子の初學には、何れの者を師と定めん」と、皆々評議仕りしに、それこそ兼て聞及ぶ彼の鬱頭覽弗は、世間の事に通達せし博學の法師なれば、此方へ太子を參らすべしと、衆議を詰め候ひ

しが、此儀は如何に候や」と、伺へば父帝は、點頭かせ給ひつゝ、「然あらば其の鬱頭覽を師として、太子修業の其間は、綾錦に纏ふ身を、謙遜らせて粗服を着し、九夏三伏の暑さ寒さ、寒風素雪の厭ひなく、夜は燈臺の下に夜を更し、身を輕々と致されば、天下萬民の司と成りても、民の辛苦を辨へず、世を治むる事難かるべし。優陀夷は是等の事どもを、能々太子に言聞かせ急ぎ院の許へ遷すべし。夫とてもまだ、代に勤めぬ内なれば、成り丈け忍びやかに伴ふべし」と、殘る處なき御指圖に從ひ、優陀夷は月景殿へ赴き、輜蒙彌の方へも帝の綸言云々と申上げ、太子にも更めて此旨が御聞きに入れしに、太子殊の外悅び給ひ、「麼が願ふ處、あら嬉しき父の仰せかな。人として道を知らざれば、禽獸にも如かずと聞く、返す〳〵も學問ほど、世に難有き物あらじ、疾く其の鬱頭覽弗の院へ赴くべし。用意々々」と勇ませ給ふ。それに引易へ輜蒙彌は、流石女性の、馴れ〳〵し太子の今宮中を、離れ給ふと聞

くよりも、只何となくうら悲しく、心も浸ろに引止めて、名殘を惜いて有せしに、時移りて漸くに、御支度調ひ、供の用意も宜しとて、既に御暇乞爲し給へば、轎輿彌はいとゞしく、別れの涙はら〳〵と、落し給ふを見るよりも、太子は尙幼き御身も優しや遽かにむづかり給ふこそ、道理せめて憐れなれ。斯くて又數多の女中も、皆御暇乞として、若君の御前に進み出て、御機嫌伺ひも濟む折から、早や暮れ初むる鐘の響に、打合はす時計の數に、「いざさせ給へ」と、優陀夷は傳き、帝を始めそれ〴〵の者へも、御別れの御意を賜はり、夫より帝の仰せに背かず、殊に手輕き御供連にて、宮中を芽出度く立出て給ひ、急ぐとすれど道芝の、露踏みしだき踏分けて濕る裳に捗取らず、漸く辿り着く頃は、早や暮れ過ぎて鬱頭覽弗の、院は門の扃を閉ぢて、案内を乞へど答へ無ければ、優陀夷はほと〳〵打叩く、音の響きて漸々に、取次の僧立出てゝ、「此の暗がりに迂そりと、提燈一つ携へず、院の案内訝かしく、汝も何者ぞ、名乘

れ〳〵」と、情も無く詰れられ、優陀夷言葉を正しくし、「如何さま不審は尤も、身を忍びしは仔細あり、某は迦毘羅城の重役優陀夷、帝よりの勅用なり、不審を晴らして扃を開けよ早く〳〵」と聞くよりも、「コハ一方ならぬ帝の勅使、辭退しては」と取敢ず、戸を開かんとせしを一人の僧、「ヤレ待給へ、勅使と僞り、何者の詐かして、入り込まんも計り難し」と、止むる聲か聞付けて、院主鬱頭覽弗立出でゝ、「何は兎もあれ勅使とあれば、等閑には成し難し、自ら門を開くべし」とて、扃を開けて恭しく、迎ひ入れつゝ先に立ちて、客殿へこそ請じけれ。

去程に優陀夷は太子を勸りつゝ、鬱頭覽に打向ひ、「勅使と申すは餘の儀にあらず、尊くも是に在ますは、帝の御子悉達太子に在するなり」と、聞くより鬱頭覽座を退りて、敬ひ畏れ平伏するを、優陀夷聲かけ近く進ませ、「太子此度位を離れて、御修業の爲、則ち御坊を師と賴まん爲、斯の如く故意と輕々しく、

謙遜りて御來臨ありたるなれば、然ばかり禮儀正しきは、却つて無禮に當るべし。扨て帝の綸言には、若君の初學びに、先づ世間の事業を、知し召すこそ宜しからん、御坊其心して、能く敎へ導き給へ、今より長く此院に遷し遣はし置くからは、賤山賤の子も同然に、隔てなく修業の道を、學ばしくれよとの御事なれば、忘れても十善天子の、御子とばし心得て、勦り傳づき參らすこと、必ず以て無用なり。然なき時は勵みも薄く、太子自から心撓みて其道に、發達し給はれば、其趣を弟子達の、數多の御僧へも盡く言ひ聞かせ置かるべし、然らば某は立歸り、帝へ之等の事どもを、早く言上致すべし」と立上るを押止めて鬱頭覽弗袖掘合せて、「愚僧の身に取り有難き、帝の綸言然りながら、見申せばまだ御年も、九つ十の最愛盛り、お乳やめのとに傳かれ、在ませし御身が如何にぞや、御着更の衣服の御用意もなく、其儘住み荒れたる此院に、置き參らせて若しや又、御煩ひの事もあらば、却つて愚僧が不忠の名を取る心の苦しさ、優

陀夷どの、御推量あれかし」と、眉を顰めて申しければ、太子は御聲浮やかに「イヤのう師の坊、此の麿が、忍みの道が覺ゆるまでは、此姿は愚か假令又、吹雪寒けき冬なりとも、氷餅き瀧にも打たれ、修業せんと思ふなり。今より は土民の某と、聊かも用捨なく、叱りも懲しもし給ひて、「學問の道が明らかに、敎へてたべ」と穩なしく、手を支へ給ふ面ざしを、鬱頭覽熟々と拜しつゝ「最とも長き御志、然らば兎も角も此院に、留まり給ひて御修業あれ。恐れながら懇ろに、敎へ導き奉らん。アラ尊き若君かな」と、幼兒愛す優々しき、言葉に優陀夷は安堵の思ひ、直ぐに太子の御機嫌が伺ひ、鬱頭覽に暇を乞ひ、數多の僧へも挨拶して、迦毘羅城へぞ歸りける。實に良禽は木を選んで棲み、忠臣は主を選んで仕ふとかや。然れば太子は道學勝れし、鬱頭覽を選み師として仕へて、此院に留まり在ましてより、東の間も此世を去りし、母摩耶夫人の事を忘れず、心に偲ばぬ折もなく、何とぞ御恩を報じたしと、朝な夕なに思召せ

ども、浮世に亡ければ詮方も、涙に霧れて憧れ給ふ。扨て鬱頭覽は太子の志、一方ならぬ望みと悟りて、御心を量り見ん爲、經机に二品の、經文を並べ置き、太子を近く招ぎ寄せ、「如何に太子、畏くも我々を師と頼み給ひ、學問せんとの御望みに任せ、唯今より能く敎へ傳へん。あれなる机に、二品の經文あり、何れなりとも望みの方を、此處へ携へ來り給へ」と、心を量らるゝとは努知らず、太子は机の前に赴き、二品の經文に、記せし外題を見給ふに、一つには神變妙奇集と記して二百部あり。一つは發心報謝論と記して百部あり。太子頭を傾け給ひ、夫れ外題と云ふものは、其冊の趣きを案じ付くるものなり。是なる二百部の方は神變奇特の品々を、書き著はす處ならん。元より麿は世間の事業は、轉輪王の威勢をも、更に望む處にあらず、心に偲び憧るゝは、母摩耶夫人の御事にて、御恩を偏へに報じたき、願ひなれども如何にせん、此世に在しましまされば、報ずべき便りもなく、今日まで空しく過ぎつるが、此百部

の經文の、表は斯ばかり打ちたる外題、發心報謝論こそ聞かま欲し、それよ〳〵と打首肯き、百部の方を携へて、師の坊の前に來り、「麿が志すは此冊なり、疾く此經の趣きを說き給へ、鬱陽せん傳へ給へやよ是なるぞ、のう〳〵と鬱頭覽の法衣の袖に、縋りて頻りに乞ひ給へば、鬱頭覽心に思ふやう、然あらんと思ひし故、聊か心を量り見しに、淺ましや案に違はず、發心報謝の思召し、之有る事隱れなし。然れど優陀夷より聞きたるには、世間の事業を第一に、學ばし給へとなれば、二百部の妙奇集の方ならば、直ぐにも說きて得さすべけれど、今發心の學問は、容易く說く事は能はず。とは云へども二品の內、何れなりとも御心に、染みたる方を持給へ、我說くべしと言ひたる故、それは叶はぬ二百部の方に今更し給へとは、言ふに言はれぬ師の一言。兎やせん、角やと思案の內、太子は頻りに促して、「早や〳〵說きて給はれかし、如何に〳〵」と縋りたる、袂を放ち給はれば、鬱頭覽是非なく早速の挨拶、「成程々々、御望みに

任せ其冊の趣き說くべきが、云はゞ大切の御初學、我が私にも成し難し、此趣を父帝へ、言上せし上心置なく、說き傳へて御望みを、如何にも叶へ奉らん。先づそれまでは彼所にて、慰み戲れ給へ」とて、一間を出だして鬱頭覽は、首傾けて褥に直り、アラ淺ましの若君かな、到底も十善の御位を、望み給ふ御志は、中々に思ひも寄らず、只賢仙の道發心報謝、三摩耶行の御望みあれば、最愛の御身と云つて、心は許されず、若し然ある時は帝を始め、宮中の嘆き、上下の悲しみ、譬へん方もある可らず、思へば果敢なき思召し、然りとは云へど此由を、包み隱さず詳かに、帝へ言上する時は、愈々萬民の嘆きの基、只何とぞして御志を、取直させ申さんと、心を苦しめ案じける。扨又太子は心の内に、師として望む經文を、說き傳へぬは如何なる故ぞと、不審は晴れれど執念く問はず、折を見合せ尋ねんと、心に藏めて居給ひける。去程に太子は此院に留りて、日を經る儘に動もすれば、出家達の寄りこぞる中へ交はり

りて、只御佛の道をのみ、深く尋ね給ふ故、快からぬ法師ども、太子に向ひ申すやう、「如何に太子、君は十善の位に生れても、斯く修行の道を學ぶ時は、我々は兄貴にて、一つ膳に列る友なり、此儀如何と思召す」と、聞いて太子は打點頭き、「扨てこそ〳〵、まだ九つか其處等の麿を、皆の者が深切に、勸りくれる忝なさ、麿十善の位に即かば、格外の褒美を取らせん間、此の間も賴みし如く、木像金佛は假の世の、作り物にて賴もしからず、何とぞ發心報謝の道、正眞の佛を拜すべき事、偏へに敎へ傳へてたべ、新參ながらも厭ひなく、假令如何なる行なりとも、勤むべきに」と涙を浮め、賴ませ給ふ、御心の、内こそ殊に優しけれ。其時一人の僧打點頭き、折から幸ひ徒然に、慰みくれんと進み寄り、「オ、其優しき心を愛でゝ、後とも云はず今此所で、そこらの秘密を傳へんず、必ず仙へな洩らし給ひそ。扨も正眞の御佛を、拜まんと思ふ者は、此院より北に隔ちて、淫肆と云へる契情町あり、是は即ち四方の、安養淨土を表

してあれば、歌舞の菩薩も來迎まし〳〵、無明の長夜は懸燈籠に、火を點じて明らけく、皆人の信仰して、通ふ所に候」と、聞きて太子は行儀を正し、「それは誠か忝なや、何とて斯ほどに容易き事を、鬱頭覽師として敎へぬぞ、アラ恨めしのお師匠や」と、嘶つ言葉を打消して、「イヤ〳〵今言ふ彼の所は、即ち悟りの捷徑にて、是佛法の奥儀なれば、うかとは師も許さぬを、我等は親しき友と思ひ、密やかに傳へるなり、必ず〳〵此事を、師の耳へ入れ給ふな、能々忍び て彼の町に、夜に入り通ひて見給へ」と、あられもない事偽れども、賢きながら御年も、まだ九つの頑是なく、太子は實と悅びて、「然らば今宵其の所へ、行きたけれども道は知れず、何うぞ賴むは御僧達、案内してはたもらぬか」イヤ我々は心立悪しく、其佛達に嫌はれて、拜む事は中々叶はず、御身一人趣き給へ、其道筋は斯う〳〵」と、事細やかに敎へられ、太子は彌々悅びて、日の暮るゝを待兼れて、尙ほ亂次き姿にて、立出で給ふを引留め、「其樣にては人や

咎めん、此の手拭にて面を包み、幸ひ是なる笠を冠り、成りたけ忍びて意づけ人目に懸らぬやうにし給へ、並々ならぬ御身と云ひ、殊に夜路の事なれば」と、口には情、心には、悪を含みて似非笑ひ、門口まで送り出だして、「明日は夜の明けぬ先に、歸りて來ませ、それまでは、師匠の手前は我々が、宜きに計らひ置くべければ、安心して」と内と外、別れてこそは行く雲の、北に其名も隱れなき、淫肆の里と聞えたる、契情町は軒を並べ、喋き渡る其中に、婆須密多女と云ふ傾城は、水際の立つ品ものにて、夜毎に通ふ賓客の暇とては無かりしとかや。然れば太子は一心に、正眞の佛を拜せんと、敎へられたる道を急ぎ、彼の契情町へ着き給ひ、心嬉しく其所此所と、眺めやれども中々に、是ぞ佛と見受くるもの、一人だに有る事無ければ、扨ては罪障深くして、曆には拜まれぬ事かいの、アラ情なき有樣やと、袖を掩うて泣く體を、婆須密多遠目に見兼れて、「喃それに渡らせ給ふ、いわけなき御出家さま、何故に悲しみ給ふぞ、

若しや遽かの病氣にて、惱みての事共ならば、此方へ入りて息ひ給へ、藥を參らせ侍らんに」と、慈悲の言葉に内へ入り、「アラ忝なや悦ばしや、如何なる人か知られども、まだ親しみもせぬ者に、慈悲深かる志、其の嬉しさに絆されて、詠れ侍る事のあり、必ず〳〵叶へてたも。麿が願ひを明かすべし。汗も其方衆は兼て聞く、契情とやらに在すかや」と、聞かれて婆須密多女が、「如何にも傾城にて侍るなり」と言ふに太子は雀躍して、「アラ難有や、章やな、然らば偏へに正眞の、佛菩薩と拜まれて、麿が嘆きを止めてたべ」と涙拂ひて頼み給へば、數多並居る傾城ども、皆打笑ひ口々に、「イヤ此の幼い御出家は、異な事言うて興がらす、何處の者ぞ、名は何と、此所へは何しに、傾城買ひに、來たのては無いかや」と、そゝるを押止め婆須密多は、「コレのう、そりやマア何言はんす、何者に欺されてか、其樣な事を求め給ふぞ。淺ましき我等の懷には、假令夜叉鬼神は住むとも、佛の宿りは思ひも寄らず、早々家路を志し、喝

申してお歸りあれ。若し此所彼所に彷徨ひては、酷き目見んも計られず」と押出ださんとすれば氣色を變へ、「そりや何とある、何うあつても、正眞の佛は拜まれぬとや、如何にも五百生の骨々を燒香に燒いても正眞の佛はいかな拜まれぬと、師の敎へしも道理か、さらば奥までとは言ふまじ、ツイ門口からなりと、拜ましてたも、傾城どの」と、幼心の一心に、足摺しつゝ頼み給へば、女どもは汗も何事と、理由を知れば怖氣だち、「オヽ氣味惡や」と散々に、立行く一人が袖引止め、「コレ、のう、頼む、〳〵ぞ」と泣き叫ぶを振放され、此方の一人に又縋り、「偏へに願ひを叶へてたべ」と、聲を上げ泣きつくを、又押遣られ突退けて、一人も殘らず逃げて行く。後には何とも詮方なく、途方に暮れて泣き居る處へ、此の家の長走り出で、「コハ忌々しき小出家めが、何を其所に泣きくさる、此傾城が買ひたくば、早く黄金を持て來よ」と、威赫がましく咎められ、「オ、黄金さへ持つて來れば、正眞の佛が拜まれるかや」「如何にも

〳〵、黄金さへ多度持つて來れば、佛は何程も望み次第、拜まるるとも拜まれるとも」「それこそ最と易き事、黄金故に毘摩耶夫人の、菩提の直きに帛はるゝとは、忝なし〳〵、さらば明日の夜さりには、黄金を盗んで來る程に、必ず待つて居てたもれ。然し佛さへ拜めば、人の物盗んでも大事ないかや」「オヽ大事ない〳〵、夫れ偸盗戒を破つ　も、正眞の佛は拜みたしとあら、お經をばまだ讀まずか、呉々も明日の夜さ、黄金を多度持つて來て、契情に抱かれて寢て見よ、それこそ中々安養の淨土も及びないぞや」と、言ひそやして、其方はまだ幼心に合點行かず、「イヤ傾城買うては、帶解いて抱かれて寢ずならぬ者かの理ならず、「ならぬと　、傾城の懐は、安養淨土と云ふ事を、まだ知らぬ乳の香失せざるおことの年齢、何は兎もあれ、極樂入りは、明日の夜さあすの夜さ」手の裏返す慾張根性、口任せ言ふる偽りも、表裏ある世渡りの、心のほどぞ淺ましき。斯くて王子明日の夜を、只樂しみに遊廓を出で、長の道もせ

一筋に、佛を拜せん志に、闇なも厭はず只一人、鬱頭覽の院へ立戻り、密かに忍び入りて、何時もの寢間へ入りしが、一人熟々思ひ給ふは、扨て僧どもの教へし如く、正眞の佛を拜すべき、手蔓は求め得たれども、時へたる黄金なければ、詮方も無き事ながら、如何にもして手に入れて、是非一度佛を拜し未來の母の功德にと、心を凝らし居給ひしが、良有つて心付き、オヽそれよ〳〵、今朝見つる師の居間に、積み重れし布施は則ち黄金なり、是を密に盗み出だし、望みを遂げんと思ひ詰め、夜の日も合はず待明かし、其の明けの日も夕暮に、至るを終日待暮らして、黄昏頃になりしかば、時分は宜しと人々の、目を忍びつゝ諸方より、寄進の布施物錢を、掻き集めつゝ、慾のなき、心の慾に懐へ隱して又々忍び出て、彼の里さして嬉々と、後の嘆きも白露を、踏分け行くぞ可怜らしき。帝の仰せを被りて、王子の學問如何ぞと、輔蘂彌の仰せを兼ねて、王子の傅き優陀夷の女房、良人に代る御使ひの役、腰元下僕を引連れて、鬱頭

覽の許へ立越え、案内すれば取次の僧、斯くと言ひ次ぎ一間へ招じ、鬱頭覽稚なく面會に、互ひの一禮濟むか濟まぬに、鬱頭覽言葉を正しくし、「扨て優陀夷嚴の御内室、御入りこそ幸ひかな、然なくば今日此方より、參内せんと存ぜしなり、其儀はこれ他にもあらず、帝の綸言とは申しながら、止む事を得ぬ仔細あつて、王子と師弟の契約を、只今是にて御斷りを申上げ奉る。帝の御前宜しき樣、賴み申す」と有りければ、優陀夷の女房眉を顰め、「扨は何故か知らず侍れど、思ひも寄らぬ師匠樣のお言葉、惡あがきは幼兒の慣ひ、又學問に器用不器用は其者の性質と云ふもの、之等の事もあるならば、假令天子の御子たりとも、子弟となれば心散なく、戒め教へ給ふをこそ、師の道と申すべきに、一旦にして情もなく、師弟の契約を斷るとは、近頃ながらそりや御坊の、思召違ひにあらずや」と、男に勝る利發の辯舌、速かに述べければ、鬱頭覽頭を打振りて、「いや〳〵和女の仰せらるゝ、處は尤も至極なれども、中々左樣の儀

に有らず、學問とても人に勝れ、回鸞麟馬虎頭の筆勢、悉曇懸河驪龍の點、速かに流通せし故、並々ならぬ御方の、心の底を試し見んとて、一つの机へ二百部の、世益論と、又た百部の誠諦論を並べ置き、太子の志ある方を、携へ給へと申しければ、太子は机の下へ行き、暫く小首を傾けて、外題か考へ在せしが、軈て百部の誠諦論を、携へて來り給ひ、麿が望みは此方なり、疾く教へてたべ、イザ說き傳へよと法衣の袖に、縋りつかれし其時には、此の鬱頭覽思はずも、涙差し含み、ヤレ浅ましや、此若君は十善の位を、望ませ給ふ御方に非ず、偏に發心の御兆と、推せしものから詳かに、此の趣を言上せば、帝を始め轎曇彌の方、諸卿怪しの末までも、然ぞ悲しみ嘆かれんと、思へば愚僧、太子の前は、樣々に綾なして、未だ彼の百部の書は、一枚も說き傳へず、ならば二百部の世益論を傳へて、帝の御心が安んじ、御子孫繁榮の政道を、成さしめ奉らんと思ひ、折々機嫌を伺ひて、諫め賺し參らする內、人の心は幼なきと

て、油斷のならぬ慣ひとて、其兆在ます太子、まだ九つか其處等の御身で、過ぎつる夜より淫肆と云へる、傾城町へ通ひ馴れ、甚は三度の、食物さへ碌に進まず、何となく、懊々として在します故、御意見申上げんとは思ひしが、アヽいや〳〵理か言ひ詰めて、若しや又幼心の一向に、果敢なき御悟も在まさば、却つて愚僧が不忠の至り、それよりも宮中へ、恙なく戻し奉らん、先づこれまで何事の、在しますとも見ぬ顔して、仂ない噂など致すなと弟子共へ堅く申聞かせ置き、御心の儘に任せ置く故、既に昨日の夜より院を出て、未だ御歸りも無き次第」と、具さに聞いて愕き呆るゝ、優陀夷の女房耐り兼れ、思はず涙潤なして、人目も恥ぢず泣伏しける。僧頭覽も亦心の内は、泣くより辛き苦しさを、秘して故意と餘所々々しく、「如何に御身然ばかりに、嘆き居る處にあらず、少しも早う宮中へ戻り、御身の良人優陀夷どのに、斯くの次第を告げ知らせ、還御成さしめ參らする、御計らひあつて然るべし」と、勸められた

る優陀夷の女房、容を正し涙を拂ひ、「イヤ、それまでも無い、女ながら、優陀夷に代つての御使、此儘聞捨て歸らんや、太子の御歸りを待受けて、一通りは御意見申し、若し御入れなき時は、此身を捨てゝの御諫めを、致すれば濟まぬ義理、且つ萬民の聞えも惡しかりなん、テモ怯めしの若君かな、過ぎし頃より耶夫人の、亡き後をのみ戀ひ焦れて、兎も角發心の思召立ち之あるは孝心の道、御尤もとは思ひながらも、由なき事に紛らして、思ひ留まり在ますやうに、するもとぞ十善の、御位に即かせ奉り、代の知ろし召を願へばこそ今はそれより倘果敢ない、お志に成り給ひしか、妾夫婦が附添ひて、これまで守立て參らせし、其甲斐もなき御擧動人の誹謗に常まで、御名を下す悔しさ辛さと、恨みつ泣きつ赤心の、餘りて喞つ言の葉も、早や入相の鐘ならで、思ひ數そふ兼言の、太子の歸りか待受けんと、僧頭覽と諜し合せ、一間を隔ち怨ばんと、したる折しも仂き番僧一人進み出て、「コレ優陀夷の御内賢、是な

見給へ此中に、一杯有りし諸方の布施を、太子様が一つも殘さず、淫肆へ御持參遊ばせし」と、箱を叩いて喚きければ、女房は胸も張裂く計り、如何なる惡鬼が魅入りてか、斯程卑しく淺ましき、御身とは成り給ひしと、愈々益々心の内に、齒噛みを爲して愕けど、面へ其色を顯はさず、「オヽ可し〳〵聞屆けました、今に埒明けて進ぜませう、先づそれまでは密かに〳〵。コレ御僧達、此の一間に妾が忍び居る事を、太子の戻り給ふ迄も、必ず知らせて給んなよ」と、言ひ含めつゝ一間の内へ、入らんとすれば押止め、「イヤ若し其所の御座敷は、則ち太子のお部屋なれば、唐紙一重彼方の間に、立隱れて在せかし、程なく歸らせ給はんに」と、座敷の樣子案内に、任せて一間へとぞ入りて、太子の歸りを待居るこそ、女ながらも山々しけれ。去程に太子は一心に母醜耶夫人の後世菩提を、吊らはんとのみ思ひ込み、人の敎へを守りつゝ淫肆の里へ通ひ馴れ、身をも振をも省みず、契情屋の長に親しみ、只管賴み嘆きつき、一度正眞の御

佛を、拜ましくれれよと宣ひし故、元より長は志の、拙きもの故虛に附入り、欺し賺して黃金を望めば、太子は最易き事と、數多の布施を隱し持ちて、長が望みに任せしは、まだ御年の幼く、殊に天子の御胤なれば、黃金やら、土塊やら、人の物やら、我物やら、貰ふ事やら、取る事やら、更に分ちは渚吹く、風に任する青柳の、みどり兒同然に在ませば、有らん限りの彼の黃金を、貪られても心は付かず、「まだ金子欲しくば何程もある、持て來りて與へん程に、明日の夜さりは僞りなく、是非正眞の佛を拜ましくれよ」と、約束して、遊郭をすご〳〵悄々立戻り、漸く院の門前なる、寶塔の傍らに腰打掛け、我〻我身を熟々と、御覽あつて思はずも、「扨て此先は何うせうぞ」と、わつと泣入る御身の有樣、院の内には優陀夷の女房、一間に忍びて氣は張弓、今やお歸り在ますかと、心を金鐵の如くに守り居る。内と外との悲しさ辛さ、態は變れど其因を、思へば同じ、忠と孝、何れ愚かは無かりけり。めでたし〳〵。

釋迦八相倭文庫

五編之序

夫れ大盡の大蔽顔は惡むべし、味噌汁の味噌臭きは嫌ふべし、佛身の佛臭きは厭はねど、什麽當世の大看官は浮世につれて堂宮詣の晴小袖も、戀が七分で劇場が二分、殘る一分が纔かに佛心、されば此冊子の卷々も、その緣の綱に聢と拿附き、佛の香幽かにして、貴意に合うて賣れるが德と、更に大人佛者の誹謗を數はず、釋迦牟尼佛の尊名を汚

し、未來は倘し極樂へ行かれて、地獄の呵責を受け、また
も穢土へ垂跡り、再び色と酒との敵に、遇ふことあらば其
も亦、予が本望たらんかと、怯まぬ顔にて云ふ事しかり、

弘化四丁未年初春發市

万亭應賀識

釋迦八相倭文庫五編

去程に太子は、鬱頭藍弗の門前なる、寶塔へ息ひつゝ、母摩耶夫人の御菩提を弔はんとする氣魂も疲れ、いつしか憔れし面差を、我れと我身て心付き、離に語らふ人もなく、心細げに伏沈み、嘆き給ひて在せしに、遙彼方へ提灯の、火影の來るに打愕き、涙を袖に拭ひつゝ、良立上りて潛門の、扃を最とも忍びやかに押せば、開きし身の幸ひと、悅びながらそと入りて、扨て敗石は音のみして、耳にや立たんと心づき、爪立つ足に芝を踏み、密々玄關の繰戸を開け、内を覗けば常よりも、物密やかに森々と、靜まり有るぞ折よしと、尙差足にて上りつゝ、居間の座敷へ入りて見れば、早や行燈も睡れる如く、微かに燈りて、寂しきに、心細くも御安座在まし、吻と一息つき給ふも、尙ほ絶えやらぬは涙なり。其時太子は熟々と、獨り案じ在ますやう、我身これまて心を碎き、母の

菩提を弔はんと、件の淫肆へ夜半毎に、通ひ行きしが明日の夜こそ、正眞の佛を拜ませんと、長が約束したれども、貯へし黄金は悉く、是までにくれて了ひぬ。扨て此先は如何して、苦金を携へ行くべきやと、樣々工風し給ひしが、良有つて御心に、密かに思召すやうは、過ぎし頃僧どもの、それとなく語りけるは、此の院の本尊なる左りの傍らに、新たに安置せられし佛は、南天竺の東に當る、南庄國の巽なる、栴檀山の窟なれば蓮華臺と云ふ、其の蓮華臺の藏王如來の佛形を、忉利天の帝釋が、自ら閻浮檀金を以て造りしを、今此の院に連綿と傳へあると聞けば、志すは此の金佛、人まりて折もよしと、佛間を指して忍び行くを、優陀夷の女房は一間の内に、怀へ〳〵て始終の樣子を、窺ひ居るとは努知らず、太子は程なく尊像を、携へ戻り座に就きて、幼心の只一心に、母への孝心何は兎もあれ、此一側は、金なるか、但しは土かと短刀にて、丁々と斫りかけしに、不思議や内より金色の光明輝き、四邊眩き

折こそあれ、優陀夷の女房、腰元を一間へ殘し、裲襠脱ぎ捨て、氣色を變へて走り出て、涙と共に太子の又、振上げ給ふ短刀の御手を無手と留むれば、太子は愕き振返り、熟々と御覽じて、「ヤア其方は優陀夷の妻、何うして夜深に、此の院へ、參りたりしぞ、仔細やあらん、疾く言ひ聞かせよ、如何にぞや」と、お尋ねあるより女房は、御膝許へより添ひつゝ、「オ、御不審は御尤も、私此の院へ參りたるは、そも太子の學問修行、此程は如何ゐますや、若一御我儘など遊ばして、尚未熟にも在しなば、聲頭覽どの遠慮なく、厳しく叱り敎へてよと、事々しく母君より、仰せ越されしは表面上、誠は馴れも習ひ給はぬ、君の起居此頃の、不順の夜爽も一方ならず、父君ゝ御案じと云ひ、轎晏彌の方、又私ども其外の末々までも、此の院へ遣らせられし其夜より、今頃は何う遊ばしてか、慣れぬ御身の憂さ辛さを、御案じ申して夜の目も合はず、餘りの辛さに、私が轎晏彌の方へ願ひ、帝へも此の由申上げ、太子の御顔拜せんと、心

いそ〳〵、此の院へ、來りて見ればソモ什麼に、打つて變りし樹頭覽の、空怖ろしき物語り、譬へん方なき御擧動、如何なる天魔が魅入りてか、世に淺ましき戯ら事、契情町と云ふ綽名、文字に見るさへ汚らはしきに、殊に尊き御身にて、夜々通ひ御年にも、似げなく賤しき傾城に、肌觸れられしか御顏容の、憔れし事はと恨泣き、言葉も涙に口籠る、一太子は始終を聞き給ひ、胸を貫く劍より、思ひ苦しき其の諫め、何は兎もあれ其の心を、先づ宥め置き其上にて、深き思案も致さばやと、思召しつゝ最愛けなる、御手にて泣崩折れし、女房が背撫で擦り、「ノウ優陀夷の妻何事も、麼が多度悪い程に、謝罪つた、堪忍しや、然ぞ憎からう許してたも」と、宣はすれば、女房は、はつと計りに起直り、太子を膝に抱き上げ、「エ、何を御意遊ばすぞ貴方がお可愛いければこそ、勿體なくも兎や角と、言うても甲斐なき振分髪の、まだ八つ九つの御年にて、此世を去られし摩耶夫人を、實の母君と迷ひ給ひ、其の亡後を最愛けに、深く弔ひ給

ふをさへ、悪しきやうに呼いて、何とぞ發心を止め參らせ、萬乘の御位に、即けんと是まで樣々に、諫め申せしに甲なや、今はしも其發心に、百倍劣りし御身の擧動、最早天下萬民の思はく、是が天子の若君と、何面目に宮中へ、今更御供なるべきや、是と申すも此年頃、守り立て申せし此乳母が、悪しき故に罪もなき、太子の御名を汚し申せし、其の落度の言譯に、自ら果てしと世上の者に、言はせん爲に、今此所にて、姿は自害致すべし、假令五障三從の、戒めある女子なりとも、やはか男に劣るべき、此身は此處に朽るとも、一念の魂魄は、太子の影身に添ひ奉り、附纏ひ居る天魔波旬を、祓ひ除けて是非ともに、十善の御位に即けまさば、帝を始め轎輿彌の方、其外卑しの末々までも、國土豐かに御代長久と、悅び勇むか草葉の陰から、今見るやうで嬉しけれども、此儘此所て最期を遂げては、二世の曰びの吾夫に、再び逢瀬も之無き儘、恐れながら太子より、優陀夷へ何とぞお傳へ下さるやう、只一つの願ひは誰も知る通り、宮

中に居る忰槃特は、抑も如何なる因縁にや、生れつき愚痴にして、まだ幼なしとは云ものゝ、我名をさへも覺えぬ身故、心に心を付けて育て、何とぞ人並の者にして、太子へ忠誠の美名を上げさせ、果敢なく果てし母が名も、世に美しう呼ばれなば、千部萬部の經陀羅尼、それにも増したる功德ぞと、是を土産に成佛せん、臨終の願ひは是のみと、偏へに御告げ下されかし、妾は最早是までなり、いでや若君おさらば」と、有合ふ太子の御刀もて、死なんと肌を寛げれば、太子は愕き、取縋り、「ノウ女房、それや何事、先づ止まれよ、コレのう」と、慌て止むる有様を、醫頭覽物陰に蔦と窺ひ、今や危しと走り出て、懐劍無手と捩放てば、女房よりも太子は迂路〳〵、「ノウお師匠さま、面目ない、麿こそ死なれば叶はぬ身、後懇ろに弔ひ給へ」と、言ひつゝ醫頭覽が取放ちて、持てる懐劍に縋り着き、我れと我咽喉元へ、突き立てんとし給ふを、醫頭覽漸く刄を隠し、「御心急くはお道理なれど、是れまで御身の放埒も、何がな様子ある

きなり、仔細を包まず語り給へ」と、言へば太子は早速の挨拶「オヽ麿が放埒の其の仔細、語り聞かさんが最前より、心惑はれて苦しき儘、あれなる一間にて氣を休め、頓て委しく語るべし」と、一間の内へ入り給ふ。扨又優陀夷は此の夜さり、妻の歸りの遲かるを、心許なく思ひしかば、供人僅か召連れつゝ、迦毘羅城を出でゝ醫頭覽の、玄關へ來て案内を乞ひ、云々と言ひ入るれば、早くも通じて女房は、亂次風俗見せまじと、容繕ひ甲斐〳〵しく、腰元連れて出で迎ひ、「オヽ優陀夷どの、宜い處へ、先づ此方へ」と先に立ち、以前の座敷へ伴へば、醫頭覽もいとゞ挨拶終り、「扨て太子には斯樣〳〵の事に賤しき御身持」と、語る辛さ、聞く辛さ。優陀夷は一入呆れ果て、暫し言葉も無かりしが、真有つて、「シテ若君は何處へ」と、問へば女房一間を指さし、「あれなる内に」と、聞くよりも、優陀夷は急き立ち取敢ず、襖開いて入らんとするを、「ヤレ暫し」と醫頭覽押し止め、「心急くは道理なれど、是にも仔細の御座る事、此所に暫

く待給へ、程なく是へ出で給うても、甚く叱りなど仕給はで、何事も辭穩便に、此の院を還御なさしめ、御引取下さるやう、此の尊頭覽が別けての頼み、必ずお遣へ下さるなと、御内儀へも談じ置きたれば、心得てたべ、優陀夷どの」と、念に念をぞ入れにける。優陀夷は聞きて打點頭き、「御坊の仰せ至極せり、萬事心得申したり、然りながら、「若君は何事の、一在してか餘りの暇取り、殊に又、一間ひつそと心許なし、コレ女房、早く御様子を伺うて、餘り夜更けぬ其先に、御供して立歸らん、早く御様子伺へ」と、指圖の下に女房は、襖の際へ立越えつゝ、「若君それに在ますか、若君様〳〵」と、呼べど答への無きは不思議と、夫婦相共間の襖を、打開き見ればコハ什麼に、太子は影だに見え給はず、彼所此方の隅々を、見廻す傍へに捨てられし、扇開きてありけるを、雪洞に認して能く見れば、最とも優しき假名文字にて、書き誌したる筆の跡、優陀夷取上げ讀み見れば、「人に欺され正眞の佛を拜せんと、一筋に、淫肆の

里へ通ひ馴れ、肌身は汚し申されど、尊き父の御名を汚し、最早や宮中へ歸るべき身にあらず、殊に報加賽錢を盜み取り、其上佛體に刄をかけし、是皆母への孝とは云へど、何の因果で淺はかに、罪造りなる事向して、我故母君は尚暗き、闇から闇へ迷ひ給はん、其の言譯に潔よく、腹切つて冥土へ赴き、母の手づから打ち叩かれ、お叱り受けても奈落の底へ、魁して母の呵責の、御身替りに立たんと思へど、斬れ物は挈ぎ取られ、此所で死なれぬ身なればとて、如何で生存へ居らるべき。只父上の御前を能く執做してくれよかし、優陀夷夫婦」と優しくも、書遺されし扇を見て、優陀夷は慄然と心も顚倒、「イヤ女房狼狽へな、コリヤ斯うしては居られぬ處、彼所の障子開放して、あるを思へば彼所より、忍び出さゝ給ひしに、違ひは無し」と彼方を見やり、心漫ろに急き立てば、女房は又遺物の扇、つれ〴〵と身に添へつゝ、「様子も知らず兎や角うと、御憑見したが勿體ない、許して給はれ、若君」と、打伏し嘆き居る處へ、

欝頭覽も様子み聞付け、走り出て、「御夫婦とも咲いて居るべき處にあらず、此の庭口の外はこれ、卽ち仇し野の一筋道、早く後より追付きて、太子の御最期止め給へ、サア〳〵早く」と急り立つれば、實にもと夫婦は身繕ひ、優陀夷は股立取敢ず、庭へ飛び降り、「女房急げ」と急き立てられて、裲襠を端折りも敢ず、良人に續き、いそしく外面へ出でし頃、欝頭管内より聲を懸け、「此の暗がりに提灯を、持たずば萬事に不便ならん」と心を付くれば優陀夷は答へて、「イヤ、提灯あつては若君に、早く我々と知らるべし、殊に世間へ内々なれば」と、言ひ捨て急ぐ表の方、優陀夷が供せし足輕一人、來つゝ「何事の候」と、言へば優陀夷は言葉忙しく、「オ、宜い處へ來りたり、其方に申付くるは、此の院に居る年長けたる番僧を、取逃さぬ樣、嚴しく繩かけ、縛め置くべし、詮議致す事數々あれば、必ず拔るな、外に又、申付くるは夜明けぬ内、迦毘羅城より太子御迎ひの乘物を、密かに取寄せ置けよかし。是等の事決して外へ、

洩らさぬやうに心得たるか、急げ〳〵」と立別れ、夫婦連立ち行くと雖も、何れを當度に後追ふべき。折も折とて眞の闇、一歩先も見え分かぬに、廣き野原を何方から、尋ね初めんと心とり〴〵、女房は早や涙含み、「西の方より廻らんか」と言へば優陀夷は頭を掉り、「イヤ〳〵東より行くべし」と手を取り草を踏み分けつゝ、急ぐにつれて女房は愕き、「ノウ怖やアレ〳〵〳〵、あれに光るは若し太子の、此世を早く去り給ひし亡魂にては在さぬか」、「イヤあれは亡魂ではなし、あれこそ狐火、更々に怖いものでは決して無し、斯る折から然ばかりの、不吉三昧言はずとも、早う〳〵」と誘へども、女房は泣石女氣の、心怯れて立停まり、「あゝ持病の癪が差込んで、此の胸先へアレ〳〵〳〵、ノウ苦しや、耐へ難や、ヨウ一歩も歩まれぬ、痛や〳〵」と道の邊の、千草の上に伏轉べば、優陀夷は言葉を荒らげて、「イヤ此所な甲斐性なしめ、若し此の暇に太子の御身へ、萬一の事あるならば、二人ともに何面下げて、宮中へ又歸ら

るべき、何うせ死なねば成らぬ命、氣をしつかりと持つて來よ」と、無理と知りつゝ言葉で叱り、心で勵はる優陀夷より、何ばう辛き女房は、病ひに勝たれずハイ〳〵と、返辭の内にウンと計り、仰氣に反りて引入りたり。優陀夷慌てて大音に、呼べど答へのあらばこそ、傍に立越え流の水を、手に掬びつゝ獨言、「實に此流れの水源は、雪山の寶窟に續くと聞けば、諸佛諸菩薩力か添へ、此の水に奇特を顯し、妻の病苦を助け給へ」と、一念凝して口より口に含むれば、佛の利益か難有や、誠の一心通じけん、女房は目を開き、「アヽ有難や諸々の、諸菩薩が今あり〳〵と、顯れて宣ふには、妙智無爲の太子と雖も、數多の外道が附纏ひ、修行を妨げ或ひは又、死魔と變じて禍し、諸佛守護すと雖も、御身の上尙危し、急ぎて助け參らせよと、敎へられし」と不思議を語れば、優陀夷は大きに力を得て、「さらば未だ、太子の御身に惡はあらじ、悅ばしや、少しも早く奈れ出ださん、此の仇し野の内より外に、豈夫赴き給ふまじ、いざ

や急がん、然らばとて、夫婦互ひに勵み合ひ、彼方此方と彷れ行く、心配りぞ切なりける。去程に悉達太子は、薯頭蘿の院を忍び出で、踏みも習はぬ荒野の内、其所よ此所よと痛はしや、最期所に彷徨へど、流石此世の名殘には、父君に心引かされ、安らふ隙も泣く涙、優陀夷夫婦と幾度か、袖摺れ交へど情なや、此世の緣の暗闇に、それとは知らで西へ行き、優陀夷は東に人影と、一走せつき見れば、口惜しや、枯れし尾花に招かれしと、又立戻る西の方、太子は怪しき人影と、東へ忍ぶ摺合ひに、躓く石も緣の端と、云ふ俚言さへあるものを、餘りと云へば腹立や、五更の空の北斗さへ、光りを失ふ雨雲の、雨も落ち來る計りなる、空物凄き有樣に、女房は優陀夷の袖引止め、「コレ申し、此樣に、幾度か同じ道を、彼地へ行き此地へ行き、尋ね巡るに今までも、逢はぬと云ふも不思議な事、そして折〳〵人影の樣なる者に摺れ交うて、漫ろ心にゾッとする、氣持の事もござんすが、あれは確に惡戯な、狐か狸でござんせう、それ

に又空合は、次第に悪うなつて來る、氣の濟まぬ事多度あり、如何に佛のお知らせが、あるとても皆此樣に、一層悪い辻占計り、若しや太子のお身の上に、過ちはありやせまいかと、思へば最う私は、生きて居る空はござんせぬ」、と、言ふ聲さへも顫らせて、袖に涙を押拭へば、優陀夷は急に止めつゝ、「又愚痴ばかり言ひ出して、何ぞれ彼ぞれ泣きたがる。然らば今度は手分けして、和女と私が右左より巡つて尋ねる程ならば、見逃しはよもあるまじ、尚それにても逢はずんば、是非に及ばぬ兼ての覺悟、二人が命を仇し野ゝ、空となすとも恨みはあらじ、然らばと計り諸共に、西と東へ別れつゝ、心に佛の御名を唱へ、道を分けてぞ尋ね行く。夫婦が忠義の眞實心、哀れとも切なりとも、云ふも中々愚かなり。

去程に太子は尚、此所彼所と仇し野の、露となる身を迷ひしが、只ある小陸に冬枯れたる、芒、尾花の其が中に、誰が亡き後の記念にか、數多の石碑荒れ

〳〵て、並立ちたるを御覽じて、此所ぞ宜き我が最期處と、既にお覺悟在ませども、死ぬべき仕方は御存じなく、「ハテ何うしたら死なれうぞ、何うして死なうか、斯うせうか」と、今更に又屈托の、涙と共に打伏して、暫し思案に暮れけるが、「有つて上ん御覽じ、「オヽ死ぬるに宜きもの見付けしぞ、あれなる柳の下枝に、腰の細紐結び下げ、それへ掛りて相果てん」と、紐を解く〳〵兩手に捧げ、伸び上りつ又飛着きて、掛けんとすれど背足らず、紐は外れて掛られば、又々智慧を巡らし給ひ、傍らにある手頃の石を、辱弱き腕に二つ三つ、漸くに積重ね、それへ上れば柳の下枝に、思ふが儘に手の屆けば、あな嬉しやと細紐を、結び付けて一息つき、「今が此世の暇乞ひ、父上樣驕雲彌の方、先だつ不孝を許させ給へゝ、又二つには優陀夷夫婦、心を盡して此齢まで、育てし禮も宜う言はず、然ぞ、今頃は淺ましい、者ぞと恨んで居やらうが、到底も汚れた身にしあれば、宮中へは歸られず、今此の原て死果てゝ、鳥や獸の餌食とな

り、身の罪障を滅すべし。方々然らば、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、言ひさまに、一飛ばんとしたる其折から、右左より來る人音に、見つけられじと立ちたる儘、息を殺して居給ふ處へ、優陀夷と女房は巡り逢ひ、黑白なき闇に透し見て、「和女や女房か、」「オ、優陀夷どのかいの、是程までに尋ねても、見え給はぬ太子は最う、頼みの綱も切れ果てたれば、一私や覺悟を極めました」と傍への石に腰打掛け正體、涙瀧なして、目も當てられぬ痛はしさ、優陀夷も俱に不覺の涙、良掻拂ひ慰ませ、「如何にも〳〵斯程に心を盡しても、巡り逢はざる上からは、兼ての覺悟にオ、極むべし、然りながら宮中に、遺し置く悴槃特が事、思ひ出だせば痛はしい、年端も行かぬ幼な兒を、獨寢させた其儘で、別れて果てし其後では、局々の者どもにも、親の無き子と侮られ、嬲られ蹂まれ辛き身の、立行く方も無くなりし、其時には然ぞ酷い親と、嘲つ涙は目の前に、見るやうで乃公やそれが悲しい、太子樣の在さぬ上は、是ばつかりが氣に

懸る」と、子を思ひぬる親心、女房は尙ほ女氣の、最と〻涙に掻暮れて、「アレ、其樣な悲しい事、もう語つて下さるな、私や尙更女子ちやもの、疾に知つては居たけれど、お前に言ふたら呆氣もの、悴どころの事では無いと、叱られようと思うた故、獨り心でくよ〳〵と、泣いてばつかり居りました。ほんに浮世の俚言に、持つべきものは子と云へど、今の此身は生中に、一人の悴がある故に、冥土の障と成ります」と、語る折から髻頭覽の、院の時鐘明け六つを、告ぐれば女は氣を苛ち、「何時まで悔みても甲斐なき事、二人の最期を今此所で」と、覺悟の言葉を俛陀夷は押止め、「イヤ始めより今よでも、偕老の契りは致せしが、此所にて二人相果てゝは、世間の者の口の端に、淫奔事の情死など〻、冒觸らされんが口惜しい、」「イエ〳〵私や二世の緣、死なば一緒と心の内に、堅く誓ひし事あれば、人は何とも言はゞ言へ、何うても來世は同じ蓮」と、死後を語らふ折しもあれ、一番烏鳴き渡れば、優陀夷は空を見上げつゝ、「最早

や夜明けに程あるまじ、日の出を告ぐる烏鳴き、吉事に近き今の辻占、何と女房、アレ聞いたか」と、言ふ間も鳴き行く烏の聲、女房も氣を取直し、「オ、然うでござんす」と、言ひつゝ空を見上ぐる途端、石の臺座に立ち給ふ、太子を見つけ未だ暗きに、それとは知らず優陀夷に向ひ、「コレ此所に石の地藏の辱。なくも立たせ給ふ。聞き及ぶ地藏菩薩は、小供を守る佛とある。太子のお命恙なく、未だ此世に在まさば、其の現在を守らせ給へ、若し早や此世を去り給はゞ、後世を偏へに助け給へ、南無地藏菩薩、薩埵の誓を現はし給へ」と、心に深く念じつゝ、「コレ優陀夷どのも拜み給へ」と、勸められて容を正し、夫婦諸共掌を合せ涙と共に唱ふるやう、「南無衆生正念必得往生、知るべし本性重ければ、正念するもの皆生ろ」と、太子へ向ひて南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、と深くも誓を懸けらるゝを、太子は始終聞くよりも、優陀夷夫婦懷かしや、我を助くる誓願を、我へ向つて願むとは、何ぼう知らぬ事ながら、

餘りに果敢ない冥路の迷ひ、寧そ名乘つて出でたらば、二人が命も助からん、ヤレ、悔ない、懷かしい、優陀夷夫婦、太子ぞと言はんとせしが、ア、いや〳〵、斯く淺ましき身の罪障、豈悟しながら今更に、名乘るは愚かの至りなり、愛着心に引かしては、後世は成佛ならぬと聞く。此所ぞ大事の處なりと、口の內にて今生の暇乞を宣ふ程に、流石に深き恩愛を、留むる苦しさ、胸先へ、刃の如くに突き來る涙を、呑込み〳〵顫ふ身を、顫はせもせず耐へ忍び、目を閉ぢ給へば微かにも、夫婦が姿は見えれども、怪なや生憎に、太子〳〵と打嘆く、其聲耳に入る物から、聞くに耐へ兼ね。止め兼ね、耐へ〳〵し御涙閉ぢたる眸に堰き止め難く、思はずはら〳〵と零れ散り、優陀夷夫婦の顏へかゝれば、女房は扨惜さ、「アヽ疎ましや今となり、雨が落ちて來たさうな、大降のせぬ其先に、最う一度念晴しに、巡つて見よやござんせぬか」と、顏にかゝりし涙の雨を、それとは知らず袖で拭く。優陀夷も己が涙の雨の、乾かぬ顏へ汐先

か、太子の涙はつたりと、又降りかゝる一粒は、千尋の海にも優るべき、太子の思ひ方々の、顔に晴れ間は無かりけり。斯りし程に夫婦の者は、雨の大降せぬ内にと、目の前なるを見殺しに、後の哀れも知らぬが佛、打連れ急ぐ二人の後を、太子は見送り〳〵て、「ア、我ながら愚かの嘆き、いざや最期と兩掌を合せ、願以此功德平等施一切、同發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」、と句なつぎ以前の組にかゝり、石を後へ蹴返しながら、ひらりと飛べば、悼はしや、僅かに九才を一期として、此世の息は絶えにけり。袈裟ては、夜明けも遲くまだ暗きに、鉦を力に打鳴らし、墓場〳〵を回向する、寒念佛の僧しと〳〵と、目に稱名途絶えなく、此の所へ來かゝりしが、不圖傍らを透し見て、「ハテ朝な〳〵巡れども、いつしか此所に見慣れざる、あの佛の立姿、見落すやうな末熟な修行、愚かなり〳〵、どれ〳〵回向致さん」と、側へ立寄り熟々見て、「ヤアこりや佛ぢやない、幼兒の縊死ぢや、後世のみ助

くるが出家の役か、現在は尙下の事、助けて見んと石へ乘り、紐解きて抱き下し、身内を探ればまだ溫か、コハ幸ひと大音にて、「幼兒よ、喃々、喃〳〵」と幾度か、呼び活け〳〵抱き窘めて、目に吹き込む此世の風、太子はふつと活復り、御目を開き四邊を見て、「ア、情なや、又も此世に復りしか」と、宣ふ内に優陀夷夫婦は、彼の出家が、幼兒〳〵と、呼ぶ高聲を遙かに聞付け、若しやそれかと周章しく、夫婦諸共走せ來り、と見れば出家の抱きたる、小兒は正しく太子なり。「ヤレ嬉しや忝なや、御身慧なく在ませしか」と、女房早くも抱き取り、悲み涙怨ちに、嬉し涙と降り替はる。優陀夷は件の修行者に、有りし樣子を打聞きて、「コハ忝けなき御坊の情、御名は何と宣ふぞ」と、問ふに出家の答ふるやう、「イヤ、我等は家を捨て身を捨てゝ、只雲水に任する修行者、名乘るに及ばず、人を助くるは出家の役、身寄の者なら幸ぞ、勦り給へ」と言捨てゝ、恩にも被せず其が儘に、笠を取上げ鉦打鳴らし、見返りもせ

ず別れ行く。後を優陀夷は見送りて、「如何にも尊き僧の有様、名をさへ言はぬ美しさ。イヤのう女房、此所は蟲に腰掛けた、地藏菩薩の前なれど、地藏は更に見え給はず、扨は太子と見違へしか、如何に闇がりなればとて、然うとは知らで白々と、後世を頼みし愚かさよ。其折などて御名をば、名乘りて夫婦が千辛萬苦を、息めては賜はらざりし」と、恨りながら恨み嘶てば、太子も今更思ひに耐へ兼れ、「ノウ夫婦の者、其恨みは誠に尤も、然りながら、忍び隱れて死なうとしたも、深き願ひのある故ぞ、もう仲にも言うてくれな、暦があやまると宣ふにぞ、夫婦はハツと恐入り、「コハ勿體なや、餘りの事に、思はずお恨み申しました。サア〳〵、還御在ませ」と夫婦は之より慰め申し、お世嗣にする下心。女房は早速の口調子に、浮かれて唄ふ子守唄。優陀夷が囃す雨こん〳〵も、拍子抜けたる可笑しさに、皆々笑ひに紛れつゝ、昨夜の難儀に引換へて、荒野の路も苦にならず。既に其夜も白々と、明け渡りたる山かゝら、空

は迷ひの霧霽れて、日輪東に輝けば、夫婦は御壽命長久と、悦びの眉開きてぞ、太子に傳き、髻頭寺の、院へと道を急ぎける。去程に、髻頭寺の院にては、優陀夷が殘せし彼の足輕、一人の番僧へ繩をかけ、堅く絆め繫き置き、且つ太子御迎ひの、乘物の用意も調へど、優陀夷の歸り遲かるは、如何にも心許なしと、不審は晴れず立ちつ居つ、野面眺めて待侘びける。折から以前の庭口より、太子密かに御遲御の、樣子を窺ひ漸くに、心落着き控ゆる足輕、倘繩付を守り居る。良有つて女房は、姿を更め、太子に傳き、端近く立出づれば、其人優陀夷は威儀正しく、先に立ちつゝ玄關の、障子さらりと押開き、凛々しく立出で大音に、「ヤア〳〵誰かある、兼て申付け置きし、繩付の僧是へ引け」と、言葉鋭く呼立つれば、はつと答へて足輕ども、彼の繩付を取開ひ、太子出御の玄關前に、最とも嚴しく引据ゑたり。其時優陀夷、悪僧を、はつたと睨付け、荒らかに、「汝番僧、承れ、過ぎつる頃悉達太子の、此院に遷らせ給ひしより、

斛飯王の一子提婆達多、先つ頃小弓の勝負に、打負けたるを無念に思ひ、遺恨を報はん其の爲に、汝を諜者に入れ置きて、有るにも有らぬ惡事を勸め、太子の學問を妨げて、大切なる千金の御身を、能くも汚させしぞ。抑〻淨飯王は、斛飯王の兄君にして、辱けなくも今萬乘の、御位に備はり給ふ、君の御子悉達太子と提婆とは、則ち從弟同士の續き、是尊の事も辨へながら、是までの汝が不始末、我れ忍目付を以て、詳らかに之を知る。最早匿しても匿されまじ、直ぐ素直に巧みし惡事を、白狀して刄を受けよ。とても許さぬ汝が命、然りながら此院の、佛の場にて果てりとは、惡人には似ず冥加な奴め」と、刀すらりと拔き放ち、其の面前へ突付けつゝ、「サア此刀にて引導せん。疾く白狀せよ、覺悟は如何に」と、突付られても、繩付の僧は、不貞々々しく似非笑ひ、「オ丈聞き及ぶ優陀夷とやらか。斯く露顯に及ぶ上は、何をか包まん、我こそは、汝達も能てや知らん、摩偈國の北山に棲む、法性妙顯と云ふ者にて、十六

寶界百種の外道、七道速疾鬼を手下として、あらゆる幻術を行ひて、天變不思議を働く身なれば、假令百筋千筋の繩目に、縛ればとても怯みはせねど、事顯はれぬ今迄は、太子を首尾能く往生させ、此の所を遁げ去り、提婆が許へ立越えて、愈々太子は小氣味よし、我と我身を果たすやう、工風を凝してしなしたりと、盲ひ跨らんと思ひしに、アラ口惜しや、殘念や、命冥加な悉達太子、再び見るこそ口惜しけれ」と、彼方の太子を睨め付くれば、優陀夷は怖へず刀を振上げ、首打落さんとする處を、太子は聲かけ、押止め、徐々と立出て給ひ、「イヤ、これ、優陀夷、其怒りは、如何にも尤も、然り乍ら、院の場にて人を殺め、三佛場を汚さん事、麿が心に適はれば、先づ〻此場は助けてよ」と、云つゝ側へ立寄りて、自ら繩を解き給ふ、仁心の程こそ難有けれ。優陀夷は驚き太子に向ひ、「コハ難有き君の御慈悲、さりながら之等の如き、大惡人を殺せばとて、聊か以て罪ならず、却つて多くの人を助くる、大善根になり申さん、

然なくば天下千萬の、一人を惱まし募りては、遂には此世を已かまに〳〵、黨界と成さんも計り難かり、助け置くべき奴にあらず、許させ給へ」と言ひ敢ず、又振上ぐる手を押へ、太子は惡僧に打向ひ、「此後屹と慎みて、惡事を思ひ止まるべし」と、尙樣々に敎へ諭し、又優陀夷にも言葉を盡して、其の心を宥め給ひ、遂に繩解き放ち給へば、優陀夷も今は詮力なく、暫し傍へに控へたり。

其時惡僧忽ちに、大地をも踏拔く計りに、躍り上りて優陀夷に向ひ、「ヤア小賢しき刃三昧、思ひ知らさんこれ見よと、空へ向ひて印を結び、口に秘文を唱ふれば、遽かに震動夥しく、此所彼所に黑雲の、渦卷き下る其の中に、あらゆる惡鬼、惡鬼神、外道の眷族、異形の者、夥しく現れ出で、太子を始め、優陀夷等を、取拉がんと近寄るを、優陀夷は臆せず立向ふ。腰元數多の供人は恐れて皆々窘み居る。中にも流石は優陀夷の女房、褄搖き上げて甲斐〳〵しく、太子を抱き、院の内へ、入れんとしたる其の程に、優陀夷が拔きたる獅子王の名

劍に、惡鬼外道は恐れを爲し、法性妙顯を雲に乘せ、摩偈國の北山指して引き退く、劍の威德こそ尊けれ。時に優陀夷は齒噛みをなし、「アラ口惜や、惡鬼ども、太子の深き惠みに絆され、取逃がせしが殘念なり、思へば憎さ提婆どの、此上ともに片時も、油斷のならぬは太子の御ん、先づ兎も角も此院を、遁御なさしめ奉らん」と、それ〴〵の者を呼び集ふるに、以前の騷ぎに氣怯れして、皆々隱れ居たりしが、優陀夷に忙しく呼立てられ、詮方なく畏る〳〵、出て〻供立をぞ成しにける。斯くて優陀夷は欝頭覽に逢ひて、懇ろに一禮を述べ、太子を御乘物へ移し、還御なさしめ奉らんと、申上げしに何故か、太子は兎角の應へなく、御顏襟に差入れ給ひ、嘆き給へ〻御裝ひ、女房は不審の眉を顰め、御膝元へ進み寄りて、「是はしたり、若君さま、又おむづかり遊ばすか、少しも早う還御まし〳〵、父君へ御對面、殊にお嬉しい筈なるに、お悲しいとは聞えませぬ」と柔らに諫め奉れば、太子は泣顏押隱し、見せじとすれど、尙洩る

る、涙を拂はせ給ひつゝ、「イヤ、喃う、女房、何言やるぞ、父君へ御目に懸る事は嬉しけれども、此院へ還りて學問は得遂げず、由なき人に狀し賣され、あられも無い事仕出だして、不義放埒の名を求め、奉加錢を盗み出だし、或ひは佛像を双にかけ、旁々以て面目なく、生甲斐もなき此身にて、父君は言ふまでもなく、數多の殿上殿下の者へ、今更顏を合せん事の、最と恥かしく、疎ましさ。それが悲しく堪ゆる」と、又御袖を差入れて、打泣き給ふを女房は、實にお道理とは思ひながら、然あらぬ體にて又言ふやう、「これは又異な事を、お悔み遊ばす仇氣なさ、其等の事も御心から、求め給ひし惡戯なられば、偽りし人の罪とこそなれ、聊かも君の御身に、係りし事には侍らず、假令神佛の尊像を、汚し給ひしとても亦、知ろし召さぬ事は是非もなし、殊に幼い御身なれば、神佛も許し給ふなり。此か能く聞分け給ひて、御心安く思召せ。ア、譯もなや、若君さま、疾く〳〵還御遊ばせ」と、非な理に言へる方便も、時に取

りては善の綱、漸く賺し拵へて、御乘物へ移し參らせ、それ〴〵の者附き隨ひ、列を亂さず御供して、鬱頭覽の院を還御あれば、女房は、鬱頭覽へ、始終の挨拶述べ終り、太子の後より身繕ひして、腰元下僕を引連れつゝ、歸る途中も兎や角うと、太子の事を心に懸け、片時忘れぬ眞心より、宮中の御首尾も、我眞先へ立歸り、帝の御前執做さんと、召連れたる下僕の者に、近道を案內させ、太子よりも先立たんと、迦毘維城指してぞ急ぎける。

此編は先づ此所にて止め、六編七編引續き遲滯なく出版致すべし。めてたし〳〵。

釋迦八相倭文庫

六編之序

却説も天上の淨居佛は、悉達太子娯樂に愛着して、諸佛の本願を忘失せん乎と疑ひ、或は病者、或は死者と貌を變じ、一二回來りてこれを試すに、物に擬へ、事に摸へて、修行の翁と二役兼、摩訶那摩國王の愛女を、馬將軍の孃に苟且の、假の浮世の假名章も、思ひの外に行はるれば、氣は張弓の鳴滸がましくも、看官の的を狙ひ、予が戯意も

已に六編、先づこれまでは通し矢の、當る今春此板の、御評判を冀ふのみ。

弘化四年初春

万亭應賀誌

釋迦八相倭文庫六編

去程に悉達太子の御乘物を、迦毘羅城へと急がする。其の道邊に白髮の一人の修行者、露の身の末の命も細き音の、鉦打鳴らし來懸るを、お先を拂ふ徒武士、目に角立てゝ仂なく、「ヤア見苦しき非人坊、這は忝なくも帝の若君、鬱頭藍弗より還御のお先、片寄らぬか」と罵りながら、肩肱强く突き退けられ、年波寄せし翁が足下、早や蹌踉きて倒け轉ぶを、ソレ打拂へとお後より、下僕一人走り來て、長柄の元にて刎ね飛ばすを、太子は乘物より御覽じて、聲かけ給ひ、駕籠下させ、周章しくも立出で給へば、優陀夷を始め、お供の面々是は如何にと止むるを、耳にもかけず走り寄り、下僕を那方へ叱り退け、伏轉びつつ惱みぬる、翁の手を取り助け起し、塵打拂ひ勦りて、「ノウ翁許してたべ、下僕は畜類に異らねば、老いたるを敬ふ事、父母の如しの敎を知らず。如何に

輪曇弥の方
悉達太子の
發心の意を
諭し賜ふ
命婦
優陀夷
大臣
悉達
太子

輪曇
弥の方

優陀夷承れ、君十善の位を有つも、國土豐かに萬民の、榮えを守る僞ぞかし。然るを惱なき今の舉動、齊は何ぼう心苦し、其方も翁を勦らずや」と、實に難有き御言葉に、優陀夷は眼して甲斐〳〵しく、側へ立寄り勦れば、翁は惱める色を隱し、襟掻い繕ひ容を更め、太子の御顏熟々見て、「こは不思議面妖な、和郎は正しく此の日、仇し野にて我が助けたる、幼な兒よな」と言ふ言葉に、優陀夷は愕き翁に向ひ、「扨は先に逢うた修行者どの、盡きぬ緣に邂逅ひ、深き恩なれば仇で報いし、知らぬ事とて下人が慮外、偏へに〳〵許されよ。何は兎もあれ此所は途中、先づ迦毘羅城へ伴ふべし。いざ〳〵」と勸むれば、翁は頭を打掉りて、「いやそれには及ばぬ事、餘りに優しき此の兒の、志に愛で今此所て、我身の上を明かすべし。夫れ南海國の都をば、摩那羅城と申すなり。此の都の主摩摩加王の一子、摩紹太子と云ふは我にて、其の初め十五歳の時、とうじやう國の艮なる阿相陀山と云山にて、寶慧菩薩摩訶般若を說き給ふ、其聽

問を望むにより、或時宮中を忍び出で、法座に列る程もなく、其の菩薩惜い哉、早く涅槃に入り給ひ、半偈を聞いて半偈を聞かず、此儘宮中へ歸りなば、十善萬乘の君と傳かれ、漸くにして聞き得たる、般若の奇特も空しくせば、後生如何と思ひし故、一菩薩へ報恩、二つには、此身の修行と住慣れし、都を餘所に振捨てゝ、あらゆる國々を遍歷せしを、今將た思ひ數ふれば、七十年に餘りし今日、不思議と情ある若宮に、邂逅ひしこそ嬉しけれ。アラ豐かなる宮の粧ひや、アゝそれとても頼まれぬ、老少不定の慣ひにて、萬事は夢の浮世なる、若宮さらば」と立上る。太子は翁が物語、御身に偲び在します、願ひの道に其儘なれば、今は人目も憚らず、行かんとする袖に取縋り、「アラ尊との宵やのう、齊も無々最と深く、志しぬる事あれば、何處までも連れ行きて、般若の道一字なりとも、敎へ學ばしたび給へ、然なくば此は放たじ」と、漫ろ泣きして縋り着き、他事なく見ゆるを優陀夷は押止め、「コハ淺ましの御心や、愈々以て發心

の、御望みをば中々に、思ひ止まらせ給はぬよな。さればとて父上の、豈打捨て給ふべきや。イザ御乘物に召し給へ」と、心に涙、目に角立て、翁を隔て退くれば、翁も然るもの、優陀夷の心を、それと察して然り氣なく、呵々と打笑ひ、袖振り切つて行かんとするを、太子は甚く引止め、「ノウ情なや見捨て給ふか、是非々々伴ひたび給へ」と、わりなく見ゆるを荒けなく、故意と振り切り押遣りて、翁は急ぎ別れ行く。太子は何と詮方も、泣く〳〵只茫然と、立たせ給ふを優陀夷始め、附隨諫め奉り、早くも御乘物へ移し參らせ、迦毘羅城へと還御成るは、如何にも辛き御光景なり。去程に太子は、宮中へ歸御在まして、玉の床に即き給ふといへど、翁が言葉を聞きしより、尙更發心の志強く、如何にもして彼の道に、入らんと心に搗みなく、思召せども深く愼み、只御心に染まぬ浮世の、塵に是非なく交らひ給ふ。然れば是を世に傳へて、如來の九歳出家、十一解脫とは申しぬ。扨又優陀夷は轎曇彌の方の、前へ密かに進

み出て、太子戀瞰覽の院にての御擧動、殊に提婆が謀叛にて、外道の怪しき事の樣々、それより御歸りの途中なる、彼の修行者の翁が有樣、物細やかに申上ぐれば、轎曇彌は深く愕き、又は大いに悲み給ひて、「いやとよ、優陀夷、アノ太子は、愈々發心の御志、止まり給はぬに極まつたり。然ればとて此儘に、聞き流して打捨て置かば、其方は勿論、自らの落度、如何なる御咎めを蒙らんも知れず、父君今宵渡らせ給はゞ、其等の有樣詳らかに、御物語り申上げん。先づそれまでは附隨の、者へも包み隱すべし」とて、優陀夷には先づお暇賜はり、夜の御殿の御身仕舞も、何となく物蕭如なる、折しも彼方賬はしく、人目の關は越ゆるとも、いかで許さん戀の關、目に正月は味もなしと、女中も唄へば男も唄ふ、奥と表の境なる、口の鈴の音高々と、帝のお入を知らすれば、皆々裲襠掻い取りつゝ、女中達の御出迎ひ、直樣夜のお床へ移し奉りて、それ〴〵に御機嫌伺ひ相濟めば、優陀夷の女房指圖して、皆お暇を給れば、數多の

女中はいつよりも、早いお退けと笑顔を造り、頭を掉て詰所々々、部屋〳〵へとぞ下り行く。斯くて轎曇彌の御方は、帝の御機嫌の折を窺ひ、御膝近くへ進み寄り、「只今申上ぐるは外ならず、太子の御身の上斯樣〳〵」と、曩に優陀夷が申せし如く、事細やかに告げ奉れば、帝は甚く御心を痛め、暫し涙に暮れ給ひしが、良有つて宣ふやう、「然有りし事今嘆いて返らず、兎も角も此度の、仔細は麿は知らぬ振にして、和女と優陀夷談合して、屹と諫め諭すべし。扨て其のちは麿が思ふ計らひ方もあれば」と、物柔らかなる仰せを受け、轎曇彌は、嘆きの中にも、嬉しき君の御言葉と、少しは心落着きつ。其夜は紅閨に夢を結び、一其の明くる日に轎曇彌は、帝の仰せを其儘に、優陀夷を召して物語れば、優陀夷は何となく太子をば、轎曇彌の一間へ誘ひ、四邊の人々を遠ざけしに、太子は早くもそれと悟れど、只何氣なく在するを、轎曇彌は莞爾やかに、「オオ何時とても麗はしき、太子の御裝ひやのう、父君を始め自らが、悦び此上や

侍るべき、それにつき些と尋ね度いのは、此程人の取沙汰に、太子は發心報謝の道、三摩耶經の御望み、深く在ますと云ふ世の噂」と、聞くより太子は微笑みつゝ、尙其色を隱さんと、「是は〳〵母上の思ひも寄らぬ御尋れ、然らば實を告げ侍らん、今は何をか包むべき、麿は頭覽の院へ遷りてより、獨寢の肌寒く、身をも世をも顧ず、淫肆の花街へ通ひ馴れ、味な事の數々に、人の誹謗も儘にして、遂に頭覽の布施報加、費錢までも運び盡し、それのみならず閻浮檀金の、佛身に双をかけし事、優陀夷の妻も知る處、アヽ勿體なや、恐ろしや、此外に發心とやらは、如何なる事か覺えなし」と、最と恥かしげに宣へば、轎曇彌は頷打掉り、「イヤ其事も聞き侍り、然あらば又此程、頭覽より還御の途中、見る影もない修行者の、僞り事を申せしに、太子は深く信じ給ひ、直ぐに其儘發心の師とも、賴まん計りの御擧動、是は如何なる御事ぞ、モシ然樣の事もあるならば、自らは如何にせん、若君在しませばこそ、帝の御愚みも深

く、殊に御代繁榮と、萬民の悦び之に過ぎず、其の芽出度さに引易へて、愈々發心の、御望みあらば是非もなや、自らも假令如何なる野山の末、虎狼野干の棲家までも、太子に從ひ參らんと、思へば思へ思はるゝ、後の此身の辛さより、今の心の悲しさを、果敢なき花の露ほども、察し給へ」と掻き口説き、袂を顔に押當てゝ、消え入る計りに嘆き給へば、傍聽する優陀夷も俱に、貰泣して控ゆれば、太子も流石遣る瀬なく、方々の心を宥めんと、「是は由なきおむづかり、夫れ發心報謝とは、道と智慧と慈悲心にて、一つ缺けても叶ひ難し。抑も道とは心の沙汰なり。知慧とは思慮分別。慈悲とは人に從ひて、心を破らぬを申すなり。磨鑒頭寛よりの歸るさ、道の邊りに來かゝりし、年波寄せし修行者を、下官どもが仂なく、打ち惱ますを見るに忍びず老いたるを敬ふ事、父母の如しと聞くからに、乘物より立出でゝ、翁の心を宥めしに、翁は何ぼう恨めしげに、我も或る國の太子にて、多くの臣下に傅かれしが、羽とやら兀とやら云ふ、惡

しき事を好みしかば、遂に國を追出だされて、斯る拙き身と零落れ、此所等の國まで彷徨ひ來たりと、言ひつゝ道を避けて行かんとせし故、自ら翁の袖引止め、其羽とやら兀とやら云ふ、御身の好き給ふ事を、些と聞かまほしと慕れければ、此の翁は好きの道を、人には包むか、得も言はで、只打笑ひつゝ行過ぎぬ。之等の事も優陀夷ならで知る者なし、其羽とやら兀とやら云ふは、位も國も失ふ程の、惡しき者なれば、此の悉達は更々以て望みなし。アラ恐ろしの羽兀や、崑崙の山は崩るゝとも、磨が心は空しくせじ。若しもや惡き事あらば、優陀夷は屹と磨を諫めよ、必ず父君や母上に、密かに申す事勿れ」と、御心の底か押包み、只片言に宣ふを、それとは知らず轎曇彌、又も涙を押拭ひ、「ノウ許してたべ、若君、然ほど優しき御心を、恨み申せし恥かしさよ。知慧なき者に知慧つけて、却つて不覺を取りしよな。般若を羽と思ひ給ひ、半偈を兀と思召す、いと仇氣なき幼な心に、何事の在すべき。優陀夷も心安く思はれよ、

如何に、誰かある々やれよ」と、呼ばれて出で來る女中達、驚て太子に傳きて、優陀夷も共に御居間を、出でゝぞ歸らせらる。既に日も早や暮近き、折から雪の降り出でゝ、遽かに積る白妙の、御庭の那方にて、十一二の女子の聲、「些とお願ひ申します」と、言ふ聲さへも降り頻る、吹雪の風に揉まれつゝ、細りて微かに聞ゆるか、お側に居合はす命婦か聞付け、氣味惡げに耳を澄まして、窺へばこれ正しく、乙女の聲に違はれば、樣子を見んと庭に出て、手笠に雪を凌ぎつゝ、折戸を細目に開けて見れば、まだ十ばかりの幼き娘、最と憐れなる姿にて、雪に埋もれて畏まり、命婦を見るよりハツと手を突き、戰く聲の細やかに、「些とお願申上げます。私は過ぎし年、千乘國の善覺大臣の御娘、橋蟲彌の方の御附人にて、此迦毘羅城なる月景殿へ參りたる、馬將軍の娘に侍り、遠々の所か只一人、尋れて參りましたれば、お取次を」と言ひさしつゝ、後は涙に聲咽れて、哀れとも不憫とも、譬へん方なき有樣を、見るより命婦は胸塞がり、勦りたくは思へども、苟且ならぬ譯あれば、心強くも餘所々々しく、先づ其仔細を知らせんと、浮む涙を呑込みて、「成程其の馬將軍は、橋蟲彌の御方の、お附にて有りたれど、加何なる所存ありけるや、過ぎし頃些方を立去り、今では大惡無道なる、提婆達多に仕ふると聞けば、和女に罪は無けれども、仇の手に付く者の娘、片時たりとも置く事ならず、疾〳〵出でゝ行くがよい」と、枝折戸はたと閉て切れば、娘は耐へ兼ね打伏して、わツと計りに泣入れば、橋蟲彌は端近く、出でゝ命婦に仔細か聞き、「扨も不憫や幼な兒なれば、斯も如何程の事のあるべき。お恐れながら帝へ忍び、事の樣子を聞きたければ、密かに此方へ呼び入れよ」と、聞いて命婦も心嬉しく、再び出でゝ、折戸を開け、娘を見れば這は什麼に、雪に埋れ、正體なく、手足も冷えて絶々なる、息の玉の緒力草、命婦は漸く抱起し、肌に添へつゝ溫め鳥、欄干の下へ連れ來り、一方ならぬ介抱に、娘は漸う顏を上げ四邊を見廻し驚きて、涙ながらに兩手をつき、

轎蟲彌を見て打守れば、轎蟲彌も亦娘の顔、熟々と御覽あるに、遠路の旅に憔れても、如何にも氣高き樓はづれ、同じ浮世にありながら、太子や姫と崇められ、又此樣に淺ましく、居所にさへ迷ふ子の、あるは如何なる因果ぞや、親の心が誠ならばゝ生先長き幼な兒の、路次に彷徨ふも知らざるか、馬將軍は鬼畜ぞと、親が憎みて子を憐み、思はず袖を濡らし給へば、命婦も俱に貰ひ泣して、言葉も無かりしが、轎蟲彌は思案を極め、仇の血統と知りながら、生中不憫を加へては、後の別れも辛からんと、言葉優しく乙女に向ひ、「ノウ娘、然ぞや然ぞ、情ない者と恨まうが、何うも此所へは置く事ならぬ、氣も落着かば支度して、身寄の方へ行くがよいぞや。シテ此品は僅かながら、サア和女に遣るのでは無い、此所へ捨てる故拾うて戻りや」と、菓子、果物、鼻紙何か取交ぜて、帛紗に包みて下さるゝを、コハ雖有しとも言ひ兼ぬる、幼な心に只平伏し、涙拭うて身繕ふを、見る目悲しさ彌增して、命婦は轎蟲彌に手を支へ、「此

上に一つのお願ひ、何うぞ此子を一夜は、此の樹下の下へなりと、腰さして遣りたう存じます」と言ふを押止め轎蟲彌、「如何に命婦、自らも女子ぢやものゝなれど、其所ゝ怀へて情もなく、歸さにやならぬ理由ある娘、道ひやる此身の心の内、マ何の樣であらうぞい、推量しや」と言ひさして、涙に暮れゝば、娘は聞分け、「ノウ、奥樣、勿體ない、大恩受けし父樣の、お主を捨てしお憎しみ、それに易へ難有いお惠み、假令父さまは敵にもなれ、私は此の御恩、いつまでも忘れれば、何うぞ父さまの罪科も、見遁してたび給へ、コレ此樣に手を合せ、お詫ゞ申上げます」と、涙の霰はら〳〵はつと、平伏す怜悧しさ。轎蟲彌命婦も今は耐り兼れ、俱に涙の顔掩ひ、「又そんな優しい悲しい、哀れな事言うて泣かすかや、親に似ぬ子の可愛さに、後日如何なる事もあれ、是が見捨て歸さりよか、今宵一夜は寒くとも、此所に休んで明日早く起きて戻りや」と留

むれども、「イエ〳〵最う參ります。後の御難義が私や悲しい。皆様おさらば〳〵」と、止めても止まらず立上れば、雪も小止みし滝月に、命婦は是非無く後に添ひ、折戸口まで送り出て、「ノウ娘御よ、必らずともに、雪に滑べりて轉ばぬやう、又た食物にも氣を付けて、煩はぬやうにしやれよ」、「アノ〳〵難有う存じます」と、後掉返り〳〵、辿り行くこそ哀れなれ。

斯くて其夜も過ぬれど、轎曇彌は馬將軍の、娘の行末を伺案じ、心も更に榮えやらず、命婦を召して仰らるゝは、「何と命婦、昨日の娘、雪踏み分けて今頃は、何處に居やるてあらうのう」、「アレ又貴女様思ひ出して、其様なこと御意遊ばし、涙をお浮め遊ばすか、モウ薩張と思ひ切り、とは申すものゝあれがマア」と、後は涙に口籠れば、轎曇彌目を連瞬き、「ソレ和女が最う泣くではないか、私や悲しくも何ともない、思へば憎い仇の子」と、袖を翳せば命婦が又、「ソレ貴女もおむづかる」、「ナニ和女が」、「イエ貴女が」と相互ひに、涙を呑

ふ障子のそと、お庭掃除の下僕が聲にて、「これに見慣れぬ櫻花の、取り落し て」と明くよりい、命婦は愕き立出で見て、是こそ昨日娘が忘れし、品とは流石言兼れ、所に紛しく取りつゝ、轎曇彌に斯くと告げ、果敢ない思案も女の慣ひ、命婦は櫻花携へて、お庭口から迂濶〳〵と、若しや其所等に迷うても、居ろか〳〵と行く向ふより、見慣れぬ足輕一散、「御注進〳〵」と駆け來るに命婦は愕き、立歸らんとするを呼止め、「優陀夷大臣へ直々に、申上げたき一大事あり、急いで御取次下されよ」と、周章しく言ふを聞き、命婦は何かは知られども、先づ出方へと先に立ち、御玄口へ控へさせ、急ぎ内に入りて斯くと告ぐれば、優陀夷は軈て櫻干に立出で、「何事かは知られども、一大事とあれば是へ〳〵」と招ぎに從ひハツと答へて、走り入りて跪き、「私事はお家の足輕、過ぎし頃仰せを受け、姿を變じ提婆方へ、太子へ仇す手段の稚を、見透かさんと忍び入り、心がけたる折ふ忘れ、昨日夜深と思ふ頃、

邪智佞奸の馬將軍、悉達太子の御首を、討取りしとて提婆の館へ提げ來る、其無念、骨髄に徹し、汝馬將軍、太子の仇、遁さじと味方を集め、狙ひ付けしに天命遁れず、一今朝早くも捕へし故、直ぐ様首を討落し、太子の鬱憤を霽らすべし、とは思ひしが待て暫し、並々ならぬ仇なれば、迦毘維城へ引いて歸り、太子の御家臣上下を分たず、一刀づゝ斬り苛み、俱に天を戴かじと、是へ連れ來り候」と、述ぶるに優陀夷は不審霽れず、夢見し心地に言葉もなく、小首傾け居る處へ白髪交りの馬將軍に、繩をかけて引立て〳〵、御庭先へ引据ゑければ、優陀夷は様子を糺さんと、「這は珍らしや馬將軍、淨飯王の御扶持を食みながら、横道者の提婆に與し、能くも太子の有ること無い事、内通ひろぎし而已ならず、太子の御首討取りしと、披露ありしと喋者が注進、仔細ぞあらん、夫れ聞きたし、サ、語られよ」と責め問へば、老には入れど、馬將軍、聊か怯れし氣色もなく、欄干見上げて優陀夷に向ひ、「最早大望成就の上は、馬將軍が本心

を、只今それにて物語らん。暫らく縛を許されよ」と、言ふに優陀夷は打首點き、「其の繩解け」と指圖の下、捕手の者は四方を固め、縛解けば馬將軍、徐々上り擡乎と座し、「如何に久しや優陀夷どの、不慮の面會珍し〳〵、扨て某が大恩受けし、此宮中を去りし一通り、物語らん、能く聞かれよ。我に一人の老母あり、過ぎし頃此の母を、提婆方にて奪ひ取り、我に味方に付くか付かぬか、返答如何にと度々の催促、否と言へば母の命、斬り苛むと退引させず、よし然らば此方は又、來に至りて高恩〻、報ずる時節ありもせん、先づ大切なる母の命を、助けん者と思案を定め、表面ばかりの忠臣顔にて、提婆に與しありける内、提婆も痴漢、一つの功に、悉達太子の御首を、討取らば、日頃の願ひ、母の縛め許さんず、然なくば命も今宵限り、如何に〳〵と無體の難題、是非なく館を立出てゝも、空しく歸れば母の命、是を救ふは太子の御首、右も左りも思の山、一歩行きては一歩戻り、一歩戻りては一歩行き、暫く道に立ち

とぶまで、思案に暮れて一心に、神佛の名を唱へつゝ、腹切らんとする傍らより、十一二なる幼な兒が、雪に惱み袖打振り、提婆さまのお館は、方の方と問ふ顔を、つくづく見れば其の氣さ、是ぞ正しく親を助け、主を助くる犬よりの、授け物ぞと不憫ながら、抜く手も見せず首討落し、其儘館へ引返し、提婆の前へ携へて、淨飯王の一子なる、悉太子の首討ちぬり、篤くと御褒分下されよと、似ても似つかぬ其の首も、忠と孝との二筋にて、提婆が五躰を搦めたれば、不思議や眼眩みけん、太子の御首と見定めしか、馬將軍出來したり、褒美には母を返す、勝手に連れて、早や歸れと聞くも遲しと老母を勸り、兼願ひの夕戸山へ、姿もぴく丘出させ、本望遂げし上からは、有りて甲斐なきぞ命、召捕られずとも此方から、名乘つて出でゝ首差し延べ、不義不忠の名を雪がんと思ふに甲斐なく細に紐り、盲譯でない其の證據は、こゝ見給へ」と言ひも終らず、帶刀抜いて襟掴げ、左りの肋へ突立てるを、優陀夷は支へる隙もなく、

しなしたりと後悔の、折から襄より物陰に、立聽き給ふ輪發彌、命婦も共に轟び出で、右左りに取縋り、「う早まりし馬將軍、最前よりの物語に、恨らみは霧晴してあるものを、何故の切腹」と、泣き口説かれて馬將軍、苦しき顔を振上げて、「道は勿論ない姫君のお言葉、假令へ朝敵の言ひ譯立つとも、過ぎし頃の妹、摩耶夫人の懷胎を、調伏せしゝ我が計らひ、二人の行者の成り行を、思ひ出だすも空怖ろしく、大切の太子を恨みし罪、殊には一旦心ならずも、提婆の扶持を食みたれば、是にも恩の義理立たず、只此上のお慈悲には、我が本國へ遣し給へ、妻と娘を召寄せられ、御惠み下されかし、是のみ黄泉の障りなり」と、妻子を思ふ涙の雨、輪發彌が懷へ雇れ、「如何に大將軍、其の娘の、顔をば見覺えて居やるかや」、「然れば然るが娘と申すは、未だ懷胎なりける内に、此の屋中へ參りたれば、其面差しは知られども、名をば野女と呼ばれつゝ、年は十二になり侍り、何とぞこれが我が代りに、行末長く召仕はれ、お目

隱けられて給はれ」と、割符の合ひたる昨日の娘、偽りもなきほんそ子にて、太子様のお身代りは、必ず是に極まったりと、思へば不憫彌増して、命婦は涙に暮れながら、「これ其娘御は一日此所へ、父御が尋れて來たわいな」と、聞くより將軍目を見開き、「ヤア我娘が此所へ何うして」、「サア一人遥々尋ねて來て、父上に逢はせてたべと、最愛けに言うてなれど、今其の父御は悪人の、提婆が方へ加擔して、此の御殿には居給はず、殊に此方と提婆とは、仇同士の間なれば、女子と云うても此方へは、片時も置くことならぬと、情なく言うて歸せしが、扨ては昨夜途中にて首討たれしはお前の娘」と、言ひつゝ瞼押拭へば、馬將軍は身を顫はし、「ヤ、そんなら昨夜首討つたは、我が娘にてありけるか、世にも因果が斯くばかり、巡り合せて子は親を、戀ゝと尋れ來る道て、親に殺され親は又、知らで最愛しい子を思ひ、此所で死ぬるも外ならず、我子を頼まん爲ばかり、然るに斯くまで齟齬ひ、暫ひに暫ひし神佛の、粗みの綱も

切れ果つれば、今は早や是までなり、少しも早く世を去らん」と、恨み嘶てば、轎曇彌、優陀夷、命婦も諸共に、泣き萎れて居る處へ、忘れ置きたる藁苞を、縁に引かれて昨日の娘、怖々折戸を入り來れば、組子の者ども見咎めて、追出ださんとする聲に、命婦は見付け、走り出て、見れば紛はぬ昨日の娘、能くこそ來たれと懐き抱へ、轎曇彌の前へ連れ行けば、轎曇彌篤と見て、「オ、嬉しや〳〵、昨夜首討たれたは、此の子では無いさうな、和女の父御は、あれ那所に」と、聞くより娘は傷者に縋り、「ノウ父様でござんすか、お懐かしや」と泣き沈む。血統の聲に引かされて、今を限りの馬將軍、漸うに顔を上げ、篤くと見詰めて打惚き、「ヤ、其方は、昨夜道にて首討つた幼な兒ぢやないか」、「イエ〳〵、私は鹿野女でござりますわいな、お前が眞の父様なら、どうぞ物言うて下され」と、言へど不審は霽れやらず、「シテ和女昨日の夜は」、「ハイ昨日此の御殿を戻つてから、父上に早う逢ひたさに、提婆さまのお館へ、漸う辿り

行く道で、俄かり夜が更けた故、地藏樣のお堂の内で、夜を明かさんと、寢た處」と、言ひつゝ父　顏打守り、「オヽそれ〳〵、お前に能う似た父さんに、首打たるゝと怖い夢、見・見たれども恐ろく、それから夜が明けて見れば、大事の數珠取落し、是が無ければ父樣に、邂逅っても名乘る事が出來ぬ故、父此所まで、それを尋ねに參りました」と、事細かに語るを、馬將軍つく〴〵聞きて、「ハテ首を討ちしも地藏の聲、娘が寢たるは堂の内、是ぞ正しく佛の力に、太子を助け母を助け、娘を助け、我を助くる御身代りか」と言ふを聞き、皆々一度に顏見合せ、尊み敬ふ地藏の誓ひ、今の世までゝ明らけく、身代りの尊體とて、迦毘維城と伊達那の、其の世の道の淨に、立たば給　ぞ有難き。傷ましは娘を引寄せつゝ、「庵野女であつたか、懷かしや、母は何處に在するぞ、ね女一人來はせまい、何處に〳〵」と尋ねられ、娘は何んと思さへ、泣く目を拭う搖ぎ拂ひ、「ノウ母樣は此の内に」と、命婦が渡せし數珠を、差出だしたる不思議

の言葉に、「ナニ母が此の内に」と、押開け見れば錦の袋、中より牌を取出だし、「そんなら母は亡なつたか」、「さいなア、親子　人の佗住居に、朝夕の事も乏しく、それに祖母さまが提婆の方へ、捕はれさんしたゝ聞くよりも、母さまは病ひ起り、お藥とて一盛なゝず、日に增しゝ枕の側、私へ御遺言に、若しも此身が亡ならば、守袋納め置く、女ゝ腑の緒並びに又、系圖の書物一つにして、大切に肌に添ゝ、迦毘維城の父上を、尋ねて親子の名乘りをせよ、必ず母の亡い後で　聖あがきして父の、名を汚すな御教訓、其のお言葉の内よりも、彌よ弱りて程もなく、卑敢なく息は絶え給ゝ、呼べど叫べど早四日かず、是非もなく〳〵兼てよ　、仰　ありける　へ葬り、それより此のお位牌と、系圖の書　人切に、尋ね　來れば父ゝも、敢ない最期の此のお姿、どうぞ妾も諸共に、冥土へ行つて母樣　逢ひ度いわいの」ゝ取縋られ、馬將軍は、「世に尤も、とても因果の七月陽、獨り言りは殘さぬ」と、腹に立てたる

刃にて、既に斯うよと見えけるを、轎蟲彌は走り寄り、鹿野女を早く抱き取り、「血迷はれしか馬將軍、佛に助けし尊き娘、今より妾が貰ひ受けて、追つて太子の妃に傳け、馬將軍の家名をば、萬代までも絶やすまじ」と、聞いて將軍臨終の悦び、「ハア難有や、忝なや、此上は此世の中に、思ひ殘す事更になし、其のお言葉が將軍には、名僧知識の御經より、實に難有き御引導、方々然らば、南無阿彌陀佛」と、右へ引いたる彌陀の利劍に、此世の苦痛は逝れける。鹿野女は取着き聲を上げ、嘆けど返らぬ無常の風、優陀夷も俱に咽びつゝ、忠心義心孝心を、感ずる涙果てしなし。斯くて轎蟲彌は優陀夷に命じて、其の遺骸を厚く取扱かせ、忌日〳〵も懇ろに弔ひ、鹿野女の慈みも漸次に深く、養ひ給ふぞ忝けなき。扨ても斯る有樣を、太子は聞し召されしより、愈々發心の志しふかく、摩耶夫人の亡跡、二つには、彼等が菩提も捨つるに忍びず。幼なき身とて露の命は、草に宿りし如くにて、無常の風の誘ひなば、後とも更に言

ひ離し、アラ味氣なの我身かなと、流るゝ水に臨みては、其の行末を思ひやり、空行く雲を御覽じては、其の行先を羨みつゝ、今宵の内にも宮中を、忍び出でんと思へども、行先更に辨へれば、辿り迷はん覺束なさ。我が發心の師は何處、如何なる方に在するか、誘ひ給へ、伴ひ給へと、悒々惱み泣き給ふも、人目憚る忍び音に、漸次〳〵にお姿も憔れて遂に朝夕の、供御も進ませ給はぬを、傳きの者轎蟲彌へ、知らせ申せば打愕き、直ちに太子の住居へ行き、樣子を伺ひ轎蟲彌、「此程は御惱み强くまし〳〵て、朝夕の供御も進ませ給はぬ由、自らが心細さは、何に譬へんやうもなし。若し過ぎつる頃目ちが、太子を情なく恨み申しゝ、其の御心の霽れやらで、其故の御惱みに、在ます事も在さんかと、心苦しく侍るかし」と、言葉優しく宣へば、太子は深き御思案あれば、「これは又母君の、思ひも寄らぬ御仰せ、如何なる事のあればとて、母上の御言葉、何とて惱みに成り申さん」、「然らば人は人を友として、語り慰むものと聞けば、

數多の公達を召寄せて、舞の御會を催され、御心を霽させ給へ」と聞きて、太子は笑を含み、「それ〳〵麿が望む所 然らばそ多の公達へ、其の沙汰致さん、〳〵かあス優陀夷を是へ疾〳〵呼べ」と、その趣きを附し女中、急ぎ優陀夷へ告げにける。去程に 卿の公達は、上 北度舞の會を、催し給ふ召によつて、地謠、笛、鼓、太鼓、皆それ〴〵に役を設け、我劣らじと、華美やかに、綺麗を飾り、威儀繕ひ、參内するこそ勇ましけれ。既に其の刻限至れば、舞臺の正面には淨飯王、太子を始め奉り、月卿雲客左右に列り、舞の曲、鳴物の、妙音 見聞せらる。此の有樣、暇はしさ、心言葉 盡されず。然れども太子は兎に角に、思ふ存細の在しませば、此の舞樂にも御心移らず、其の終るを待ち給ふ内、早や番組の結り、太子は父君 お暇乞ひ、日景殿の御居間へ、歸り給ひし其 後に、今日 參内の公達を、殘らず是へ召寄すべし」と、仰せを被り、光明大臣、其趣きを通達すれば、皆々太子の御前へ、引續き並み出づ

れば、太子「今日の舞樂の役々を、殊の外御賞美ありて、扨宜ふやう、「麿が思ふ外 らず、十人名れば十里の物語、十品を知ると申すに依り、幸ひ今日は公達の宜き會の折なれば、思ひ〳〵の物語心の儘に打明けて、一座の興を催されば、麿が心も悅びは、此上やあるべき」と、聞きて諸卿の公達は、太子心に偲 るゝ、深き存細のある事を、知られば面々に進み出で、浮世の噂取々に、物語り申 と雖も、太子の心に差當る、言葉の端も無さまゝに、太子は只如何にもして、わ[illegible]足て遊 を、等れ落して知らばやと、種々に御考案ありしが、つて心に頷き、「如何に皆々聞き給へ、凡そ四海の内に棲む、生とし生ける 毎に、心々に友を求めて、馴れ親 て遊ぶやらん、此儀如何」と、宣へば、座 挙へし殿 人が、進み出でゝ申すやう、「さん候、それ つき、品々變はる事の[illegible]、生つ日の[illegible]一 り、申上げ奉ら人。夫 龍は諸鱗にして、諸蟲 鱗毛を並べず、獅子麒麟は諸畜にして、諸畜に脚 性を交へずと申す。

然れども彼等は皆、心無き物なれば、友を以て己が心を、顯はす物に候へば、片時も友を離るゝ事能はず。又人間は格別にて、上品上性なるが故に、我が心を以て友となし候へば、心の如き友を、心から親み候故、己れが心を知らんと思はゞ、先づ己が親しむ友を、見つべしと申す事の候」と、速かに言上しければ、遙か末座に控へたる、年若なる殿上人、前なる人と日頃より、何かに就きて問惡しく、刺々しき物言しけるが、此時又進み出で、「只今何某が言上致せし、心の沙汰然るべからず、畜類は然もありなん、それに非れば知る事なし。人間の事は如何な〳〵、然樣には候はず、假令心に適ふ友を、友としたく思ふとも、心に適ふ友あるべからず。然れば友なきとて、心を友として只一人、慰む者やはか世界に候べきか、無き事を誠しやかに、よく沙汰し給ふ人かな」と、上座を睨みて苦々しく、言へば以前の人怒へ兼れ、「アラ出過ぎたる青嘴かな、貴殿の如く、心なき者に於ては力及ばず、某只今言上せしは、道ある人の

比例なり。入らざる過言嗜み召され」と、言葉を正して言ひ返され、尙も怯まず威丈高に、「イヤ〳〵それは由なき事、假令理に當ると云ふとも、證なき事は數ならず、又證ある事と云ふとも、證なき事は明かならず、サア何處如何なる處にか、心を友として只一人、棲み候もの之有るや」と、畳叩きて詰め寄するを、以前の人も亦臆せず、「夫れ人間たる者は、皆聞く事を語る者なり、某も亦聞きたる事を、物語り申すべし。夫れ世間に有りと有る、道たる者は數盡きず、文道、筆道、音聲道、技闘、管弦、醫の道、琴棋、書畫、武藝、智謀、何れか秘事の無かるべき、然れども是等の品々は、善くも惡しくも夫迄なり。扨爰に道と云へるは、心を友とする事なり。夫れ賢道、妙道、政道とて、三つの道を道と名づく。これ天道の明道。賢道とは仙法の秘事にて、發心報謝の道と聞く。扨妙道とは妙 至玄 成要化の秘事と聞く。扨て政道と申すは、人寰撫育の道にして、十善の戒德に、君の諫さめの政 事國土安全の秘事といふ。此

の三つの宝を尋びつゝ、心ゝ友とする人を、大道人と世に名づけて、厚き人とは申すなり。既ゝもの國の三門、一千三百餘里を踊ち、檀山寶嶺より、靈山、醫王、勝山、奇特雪洞駱駝剛、番々、御法の峰に、明ち心を友として、行ひ澄まし、妻み給ふ、聖道、爲の神仙達、歴々として分明なりと、承り候」と、言葉尽く述べければ、太子は感涙胸に塞へ、日頃より心に忍ぶは、之なる者をと思召すのみ、面へ其の色、顕はさず、莞爾として宣ひけるは、「アラ尊き物語かな、何れもの言葉愚かは無く、皆自し〳〵」と、殘る方なく愛で給へど、彼の年若なる殿上人は、前後の事も辨へず、人の話の腰折りて、手ゝ沙汰に見えにける。其時太子は御心に、思ふ仔細の在ませば、上座の一人を留め置き、其餘諸卿の公達は、殘らずお暇賜はりて、嬾て退出したりける。斯くて太子は殘りたる、彼ゝ一人の殿ゝ一人を、御膝近くへ進ませ給ひ、「如何に只今は心無き、若輩者の分として、仂なき言葉を吐き、殊に尊き物語の、

妨げを爲しつるが、必ず心に懸けらるゝな、磨が心に含みあれば、何とぞ今の物語の、後詳らかに聞かまほし、疾く聞かせてよ」と更まりし、仰せに彼の人打驚き、「是は又若君さまの、思ひも寄らぬ御言葉、只今の物語は、仰せに任して取敢ず、當座の興に申せしに、偖御尋ねに預りては、恐入り奉る」と、卑下して言へど聽き給はず、「イヤ〳〵並々ならぬ今の話、詳しく聞かん爲にこそ、數多の者を先へ歸すより、是非とも聞かん、いさ〳〵」と引くに引かれぬ言葉の續き、容を改め咳しつゝ、「給らば御免を蒙りて、描きながら申上げん。扨又鬼門に相當つて、一千二百五十里を隔ち、阿首仙、阿私陀仙、伽葉阿修羅仏妙顕、修摩訶羅憂鉢羅仙、是には皆妙旨の賢者達、能くも行ひ澄まして棲み給ふとかや申し候。之等の聖りも性も體もある事ながら、只傳聞の儘なるを、御慰みに申すなり、御笑ひ草と思召し、言葉遣ひの賤しさをば、御許しあつて、此儘に、早や御聞給はれかし」と、申す言を太子は引留め、「ぞ天より人を以て、

冒はしめ給ふ教にこそ、尙奥深く聞かばやと、「アラ尊き物語、天門とは巽の事、鬼門とは艮の事、シテ一千三百餘里の行歩する道の末にも、尙人の棲家もあるかや」、「さん候、五百里は、鹿野道と申して、民の竈も之有る由。扨て其の先五百里は、人の通ひはありながら、寂寞として谷深く、又其の先三百里は、山陽道と申して、山の峰を踰ゆるとかや、承りて候」と、聞きて太子は心の内に、飛び立つ計り喜び給ひ、如何にも天に口なくして、人の唄ふを法となし、人に心なくして、天の德を心とするとは、今こそ思當りたれと、思ふ心を色には出ださず、彼の殿上人を勞ひつゝ、先づ今日は是まてなりと、御暇をぞ給はりける。めてたし〳〵。

釋迦八相倭文庫

七編之序

昔天竺有王而有二夫人、一夫人生千之子、次第皆當作佛。第一俱留孫佛、第二拘那含佛、第三迦葉佛、第四釋迦牟尼佛、乃至第千樓至佛也、以上千佛皆現在賢劫之佛也。又第二夫人生二子、二子誓曰、願以成金剛神居門外而守護千兄出世佛法也、後人謂之門前之二王也と經卷に見えたれど、何れが那れ歟是非の沙汰は天竺なれば

且さしおき、日本の人情に慕擬し、五常を以てす、既に此巻七編は、悉達太子の立春宮より、后を娶ることまでを記す。

弘化四丁未春新版

万亭應賀述

釋迦八相倭文庫七編

去程に年月押移りて、悉達太子の御年も、早や十五歳にならせ給ひしかば、淨飯王より春宮の、御儀式を仰せ出だされ、此趣き太子へは、優陀夷を以て申上げ、諸國の王達へは、御使ひを走せて、此度太子春宮に、立たせ給ふにつき、當二月八日吉日なれば、御元服の御儀式之有るにより、時日を違へず、朝勤あるべしと觸れられたり。然れば程なく其當日となりければ、御親族の甘露飯王、白飯王、斛飯王を始めとして、諸國の王達、月卿雲客、無位無官に至るまで、其家々の禮服に、身を飾り袖を連れて、參内あるこそ勇ましけれ。扨て迦毘羅城の大殿には、淨飯王を始めとし、其の役々の座を設け、威儀を亂さず控ゆる折から、悉達太子は悠々と出御あり、座に着き給へば、一人の官人白玉の盤へ、四海水を湛へて、是を先づ甘露飯王へ奉り、それより漸次〳〵に、諸

王達へ傳へ終りて、帝自ら盤水を捧げて天地を拜し、頓て太子の頂に灌ぎ、御聲いとも高らかに、「今日悉達太子を以て春宮に立てゝ齊が繼嗣とす。此旨上天皇帝を始め、率土の濱、諸國の王、乃至月卿雲客に告げ知らしむ」と宣ふより、殿上殿下の人々、皆一同に御代萬歳と唱へつゝ、それ〴〵の獻上物を、思ひ〳〵に獻上あれば、帝の歡喜斜めならず、それ〴〵に官爵を加へられて、聽て大宴を開きて、諸王諸臣を饗應あるこそ、如何にも芽出度き例なれ。然れば月景殿の奥向も、太子の御元服の御祝ひと、互ひに曠なる衣服を着飾り、行交ふ局の混雜に、お仲居お末お婢ども、三人寄れば姦しく、譬への如くに寄り集り、「コレのう鶴竹さん、今日の忙がしいには頓と最う、倦み果てたでは無いかいな」、「イヤ最う忙しい事は、云までもない其の中に、お前は蠢から見えなんだが、大方又お口へ出て、男ぜゞりも宜い加減にせぬと喧しう出ますぞえ、ドレ供御のお仕舞けをゝと、立上るをお婢の、若梅が引止め、「ホンに其の供

御で思出したが、アノ天子様を十善と申すが、それでは毎日三度の供御を十膳づゝも食りますかえ」、「オヽそりや知れた事、天子は十善神々は九膳づゝ召食るのさ」、「そんなら殿方は、幾膳づゝ食るのだえ」、「サアそれは、オヽそれ〴〵殿様方は十善の半分故、ごぜん様と言ふでは無いか」、「フウそれでは此方連は、二膳ぐらゐがやつとの事だれえ」、「まアそんなものさ、其故御次男御三男様では、お位が無いから、お冷飯様と言ふでは無いか」、「オヽそれ〳〵、したが非人袖乞は、幾膳食べますのか、是には供御の位がありますまいな」、「イエ〳〵有るとも〳〵、お前も折々お下へお下りの時、隨分お見であつたろが、ソレま中に袖乞非人が、哀れな聲で掌を合はせ、何うぞや叶ひませぬ者に、一膳戴かしてと言ふでは無いか」、「ホンニ然うぢやわいな、只た一膳の位とは、誠に〳〵果敢ない身の上。したが又天子となつて十膳づゝ食べるのも氣が滯れてなる道いわいの。私は早く勸め上げ、お禮奉公もして了ひ、ソレかの人と夫婦になり、

氣兼なしの取膳が、一層最う待遠い」と、口も輕く氣も輕く、互ひの轉口孤合、背中を叩く氣散じは、唐も日本も天竺も、變らぬ奥の慣ひぞと、思ひ遣られて最と可笑し。折柄表使ひの知らせにて、「只今太子さま月華殿へ、入らせられし」と聞くよりも、遽かに襦かけまく〳〵、御獻立の順違へじと、心いそしく繰出だし、御元服の御祝ひに、奥の噪く物音は、さしも山々しく聞ゆるに、お伸居お末陪者まで、遙かの隙より我勝に、今日の太子の御粧ひを、忍びて拜し奉るに、御顏容の麗はしさも、以前に優りて艷々しく、そも此君に嫁し給ふは、何れの姫に在ますかと、一寸してさへ媚きたる、嗜も女の常ぞかし。斯くて程なく、御祝ひも濟ませられ、轎輦彌の方の御悦びも、日に增して一方なれど、只お楽に在ますは、發心の御志、何とぞ留め參らせんと、或ひは舞樂何與と、御心慰め奉れど、太子は只管書籍にのみ心を傾けさせ給ひて、終日餘事を顧みず、是に依りて百官の者、優陀夷を以て、帝へ言上申すやう、此折節

太子か些と、藍毘尼苑へ御幸なさしめ、御心を慰め奉らんは、如何に候と伺ひけるに、帝もそれこそ然るべし、急ぎ支度を爲さしめよと、御許しを受けて取敢ず、優陀夷は此の由告げ奉れば、太子は些とも辭み給はず、「それこそ齊が望みの遊山、一嬉しや然らば民百姓の、業に妨げ之無きやう、忍びの供にて赴くべし」と、物に賢き仰せに任せ、御供僅かに俱せしめて、御庭口より送り參らせ、藍毘尼苑へ入らせ給ひぬ。扨藍毘尼苑の境内は、折しも彌生の頃にして、今を盛の花の香に、空さへ醉ひつる計りにて、四下眩く見えければ、右將軍は御腰掛を、此所ぞと思ふ花の下へ、据ゑて太子を饗應すに、何事の在しましてや、隨隨の者を遙かに遠ざけ、只一人そよ吹く風に、散り初むる花を御覽じて、無常を觀じ給ひしが、頻りに嘆息し給ひつゝ、青苔蒸したる平石へ、腰打掛けて首俯垂れ、暫し屈して居給ふ内、不思議や夢幻の如く、痩せ衰へし一人の修行者、彷彿と現はれたり。太子は不審の眉を顰め、「ヤアそれなるは何

者ぞ、名乗り聞かせよ」と仰せあれば、行者は僅かに打咳き、「イヤ某はな
か〳〵に、名乗る程の者ならねど、太子へ對し只一言、示す事あれば來りたり。
夫れ富めるも貧しきも、尊きも賤しきも、假りの浮世に住むものは、斯樣に花
の散る如く、且た待たぬ有爲轉變、斯る大難か懷さながら、此の遊樂は何事ぞ。
過ぎつる頃も餘所ながら、修行者の姿に打扮ち、羅那羅城の主、摩摩加王の一
子、摩紹太子と名乗りつゝ、太子を助け參らせて、菩提心を勸めたる、我こそ
天上の淨居佛なり。努々疑ふ事勿れ」と、聞こし召すより太子は愕き、「アラ
有難や、日頃より、心に念ずる御佛よな」と、立寄らんとして見給へば、早く
も姿は消え失せて、又はら〳〵と葩の、散り來るのみぞ物寂しき。折りから優
陀夷附隨の、者は太子の仰せにて、遠ざかりつゝ居たれども、時刻移れば立出
てゝ、御機嫌如何と伺へども、何の應も在まさず、茫然として在せしが、良有
つて御心惡しきとて、早や還幸を急がせ給ふに、優陀夷は心ならずもそれ〴〵

へ、御供立を急がせつゝ、宮中へ還御まし〳〵ける。事の有樣何となく、常な
らず覺えしかば、優陀夷は御供にて歸ると雖て、淨飯王へ太子の御氣色、斯樣
〳〵と奏しければ、父帝は御機嫌損に、「これ伺佛心ある故なり。抑も何の宿
緣にて、斯くまで執念く出家の道に、志の止まざるや。此度元服の祝ひより、
齋が心も休らひて、何とぞ早く世を讓り、國土豐かに泰平を、唱へしめんと思
ひしに、今更書 籍にのみ心を入れ、氣を痛めたる煩ひとあれば、行末の事思
はれて、何を頼みに暮らすべき。優陀夷は何と思ふぞや、力の綱も切れ果てし」
と、咄ち給へば優陀夷は尙、平伏の頭を擡げ兼れて、何と答辭もせざる處へ、
輪蟲彌の方御入りありて、太子の御煩ひを語り給へば、帝も夫のみ御心に、懸
る由を仰せありて、重れて又宣ふやう、「今も今とて優陀夷へ言聞け、宜き計
ひ方はあるまじきかと、共の穿議をする處へ、思ひ廻せば過ぎし頃、彼の老翁
が相したる、占方こそ不思議なれ」と、憂きに集まる三つ鼎、物しめやかなる

御簾の内、輪鼓彌の方宣ふやう、「如何に帝聞し召せ、太子最早十五歳に成り給へば、眉目麗しき美女を選み、宮妃に付け參らせて、是等に伽致させて、樽々の御心を、散ぜしむる御計ひは、如何侍らん」と宣ふを、帝聞し召して首肯き給ひ、「如何にも〳〵、草も木も春を迎へて、花咲くは天の精、太子も今年は十五歳なれば、閨の伽もあらまほし、優陀夷は何と心得るぞ」と、仰せを受けてやうやくに、頭を上げて申すやう、「さん候、仰せの如く、眉目容麗はしき、宮妃を供へて悒々しき、御心の結ぼれも寛ぎなば、極めて其の妃の内へ、太子の御胤を宿し、安々御誕生まし〳〵て、如何ばかりか芽出度くさゞめき立てなば、遂には太子の御心も、自づと仏意を離れ給ひ、上下萬歳を相唱へて、安堵の時もや到り候はん。あら悦ばしき思召かな」と、色を直して奏しければ、帝も俱に悦び給ひ、「然らば太子へ此趣きを告げ、諸國の王の愛女の内より、容貌宜しきを數多穿議致さすべし。扨てこれに就きては城南に、新内裏を造進せよ。言ふまでに無けれども、此の新宮の裝飾は、先づ東の間は、春を象つて、花を彩色に鏤め、南の床は夏を象り、野邊の淺茅生民の仕業、西の殿は秋を表して、洞庭の月の盛りなく、千草の花の莚を眺め、北の造りは冬に擬へて雪の景色、其外諸向も磨き立て、太子を祝ひ參らすべし」と、殘る方なき御指揮に、優陀夷は厚き思召を、逐一に伺ひ終り、直ちに番匠工匠の長に、給圖を詳らかに引立てさせ、念に念を入れつゝも、夜を日に次いで、新宮造營を急がしける。扨又太子は過ぎし頃、藍毘尼苑より歸らせ給ひて、御枕重く思召すは、我れ斯く十善の若宮と傅かれ、浮世の塵に交はる事、餘りと云へば嘆かはし。玉の臺に錦の褥、殆と汚らはしや忌はしや。今宵なりとも宮中を、遁れ出でんか立去らんか、アラ淺ましの我身かなと、忍び音に鳴く鈴蟲の、雨夜に焦るゝ如くなる。折から優陀夷は御機嫌を、拜せんとて靜々と、御褥近くへ進み出で、「若君如何在ますや」と、伺ひ申せば莞爾やかに、太子は枕を上げさせ給ひ、「オ